
パッセルベルの猫の妖精

林来栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パツセルベルの猫の妖精

【NZコード】

N2318D

【作者名】

林来栖

【あらすじ】

大きな森の奥の、大きなトネリコの木に住む、猫の妖精の子供、ハナハナ。彼女と、同じくトネリコの木に住む妖精たちの日常の出来事を描いたファンタジーです。ちょっとだけ、冒険や魔王などの対決もでてきます。

- ・・・あ、いけない。「トネリコ」を「トリネコ」って書いてました。猫の妖精のお話だからって・・・バカ作者です(汗)

その1 村の泉（1）（前書き）

パツセルベルという小さな渓谷の村に住む動物の妖精達の日常茶飯事を描いた物語です。怖い話や不思議な話はちょっととしか入っていません。基本のんびりのほほんな物語です。

その1 村の泉（1）

緑龍渓谷の更に奥、パツセルベルという谷間に、猫の妖精とその仲間達が暮らす村がありました。

村はトネリコの大木の上、太い太い枝の上に、猫の妖精達と仲間達がそれぞれ家を作つて住んでいました。

南の枝の端の方に、ハナハナという子猫の妖精が住んでいました。ハナハナは今年で十歳、元気な女の子です。

ハナハナには両親がいません。ハナハナが赤ちゃんの時に戦いに出て行つて死んでしまいました。だから、ハナハナは今お姉さんのミイミとそのだんな様のティーヴ、それとミイミの子供達と一緒に暮らしています。

ハナハナはお田をまが上ると一番に起きて、お気に入りのピンクのエプロンをつけます。お姉さんのお手伝いをするため、トネリコの樹の根方にある泉まで、木のバケツを銜えて一気に駆け降ります。泉にはいろんな妖精達がやつて来ます。シマリスのボツヘさんはおじさん妖精、毎日バケツ一つに一杯水を汲んで運び上げて行きます。木ねずみの妖精ママおばさんは、子ねずみ三匹をお手伝いに連れて来ます。上から順番にリック、ニック、マック。三匹の子ねずみはまだ小さくて、お手伝いよりも水遊びが大好き。水の掛けっこをしておばさんにしょっちゅう怒られています。

ママおばさんはハナハナが来るといつも目を細めて笑います。
「ハナハナはお利口さんね。うちの子達もハナハナみたいになつてくれないかしら」

ハナハナはちょっと嬉しい気持ちになります。

泉には黒い妖精マーフが、半年前から住んでいます。マーフは優しい妖精ですが、最初に泉にやつて来た時は大騒ぎになりました。

その1 村の泉（1）（後書き）

いかがでしたでしょうか？ 読んでほのぼのして頂けたら幸いです。

その1 村の泉（2）

その日も、ハナハナはピンクのエプロンをつけてバケツを銜えて、勢い良く泉に駆け降りて来ました。

でも、どうしたことが、いつも来ている人達が誰も来ていません。

「みんな、どうしたのかな？」

ハナハナは周りを見回しました。すると、トネリコの太い幹の脇から生えた若枝の葉の陰から、子ねずみのマックがちょこんと顔を出しました。

ハナハナは急いでそこへ行きました。

「どうしたの？」

「泉の中に、気持ちの悪いものが沈んでるの」
リックの後ろの枝から、ママおばさんが顔を出しました。

「おばさん」

「ああハナハナ。今は泉に近付いたらダメよ。悪いものが入ってしまったからね」

「悪いものって、なあに？」

「魔王の手下だった、黒い妖精よ」

「魔王って、だあれ？」

「魔王は昔、この世界を一人占めしようとした悪い奴よ。その手下だった黒い妖精も、私達や外の人間達を散々苦しめたのよ」

「黒い妖精って、じゃあ今も悪いの？」

「今はそんなに悪くないけど、でも昔は悪かったのよ」

「ふうん」

危ないって言われると気になります。

ハナハナは更に聞きました。

「黒い妖精は、泉の中で何をしているの？」

ママおばさんは、真っ黒な田を「二回ぱぱぱぱする」と、ハナ

ハナを困つたように見上げました。

「何つて…。今は寝ているわ」

「ふうん」

寝ているなら、起ひきしないといよひにすれば大丈夫じゃないのかな。

悪い妖精を少し見てみたい気になつて、ハナハナはとことこと泉の方へ歩き出しました。「どこへ行くの？ ハナハナ

「黒い妖精さんを見に」

「まあ、なんてことつ！」

おばさんは慌ててトネリコの葉の陰から飛び出して、ハナハナの手を引つ張りました。

その1 村の泉（3）

「そんなことをして、妖精が起きたら危ないでしょ？」「

「でも、今はねてるんでしょ？ 起こさないようここにずっと見るわ」「ダメダメ。もし起きたら危ないわ。行つてはダメよー」

「そうだよ、ハナハナ」

ママおばさんその後から、シマリスのボックさんが顔を覗かせました。

黒い妖精は、それに恐れしそうでは、もし妖精が起きて、

卷之三

黒い妖精に勝てるの?』

「長老さまはその昔、悪い龍がこのパツセルベル谷を荒し回った時、

たつた一人でその龍と

「ソラノ」

いつもトネリコの木の一

h_0

「ねえおばちゃん、長老さまは何時来るの？」

ママお母さんは田を細め、尖った鼻を上へ向けてくんくんと動

かしました。

「わざわざおもろいからじゃないかしら」

「あ、戻つて来た」

マックが上を見上げた時、トネリコの木の上からぴょん、とソックとソックが飛び下りて来ました。続いてもう一匹。そして最後このやのやと長老さまが幹から降りてきました。

長老さまは真っ白な長いヒゲを生やした、大きな猫の妖精です。右手に持ったトネリコの枝で作った杖をぐつと地面に立てると、よつよつりじょ、とせや曲がった腰を伸ばしました。

マーマおばさんとボッヘルさんは、長老さまにて寧にお辞儀をします。

「お待ちしました」

「うむ。して黒い妖精は？　まだ泉の中かの？」

「はい。全然出て来ようとはしておりません」

長老は、ゆっくり泉の方へ向きました。

その1 村の泉（4）

「どれ。」

のそのそと、杖をつきながら歩いて行きます。
ハナハナは何だか心配になつてきました。本当に長老さまは大丈夫なんだろうか？

あんなにふらふらしているのに。

長老は泉の縁までやつて来ると、杖をふつと振り上げて、先を水にちょんと付けました。

その途端。

泉の水が大きく波打ち、真ん中が急速に凹みました。そして、凹みの中から真っ黒い塊が浮かんできました。

丸い塊は、次に縦に長く伸び始め、あつという間にハナハナ達猫の妖精と似たような姿に変わりました。

黒い妖精は、真っ黒な髪と焦げ茶の肌をした、若い男でした。
灰色の服を着た若者は、でも姿は猫の妖精によく似ていましたが、全く違うところがありました。

「しつぽが無い…」

パツセルベルの人々には、猫の妖精だけでなくみんなしつぽがあります。

けれど黒い妖精には、しつぽだけでなく、頭の上に耳もありませ

ん。

「変…」

思わず呟いたハナハナに、マーマおばさんが「しーつ」と入さし指を口に当てました。

長老は、現れた黒い妖精に向かつて言いました。

「あなたは、どうしてこの泉に入ってしまったのかの？」

黒い妖精は小さな声で返事をしました。

「ここへ行きなさいと、言われたからです」

「ほへ、ほつ」

長老は大きく頷きました。

「その話を、して下さるかの？」

「はい。私はその昔、この緑龍渓谷よりずっと南の森の湖の妖精でした。

私は、魔王が現れるまでずっとそこで、仲間達と楽しく暮らしていましたのですが、ある

田湖に魔王の手下が現れ、私や仲間を捕らえたのです。魔王は私達に闇の魔力を秘めた

黒い水を守るように命令しました。でも、黒い水に触れれば、私達水の妖精は黒く染ま

つてしまします。仲間が拒否すると、魔王は拒否した者を凶暴な妖魔の巣穴へ投げ入れました

「なんて酷い…」

ママおばさんが恐そうに口を押さえました。

「私は、仲間が妖魔に噛み殺される悲鳴を聞いて堪えられなくなりました。私が犠牲に

なれば、仲間が助かるならと、私は黒い水を守ると、魔王に言いました。そして、黒い

水に入ったのです。その途端、私の心は凶暴なものに変わりました。
…多くの人間や妖精を酷い目に遭わせました。でも、魔王が倒され黒い水が消えた途

端、私の心は元に戻ったのです。けれど…」

黒い妖精は、そこでぽろりと涙を零しました。

その1 村の泉（5）

「心が戻つて、私は仲間の住む湖に帰りました。でも、仲間は私が黒く染まっているのを見て、湖に入れてはくれなかつた。私が犠牲になつて、みんなを魔王から守つたのに。」

「仕方なく、私は他の水辺を探しました。けれどどこも皆、妖精達は黒い私を受け入れてくれなかつたのです。水の妖精は、水が無ければやがて弱つて死んでしまいます。」

私は水辺を求めて放浪しました。酷い時は、雨で出来た水溜まりに何日か居たこともあります。

私は水辺を求めて放浪しました。酷い時は、雨で出来た水溜まりに何日か居たこともあります。

ある時、大きな街の裏通りのどぶ川で私は眠つていきました。そこへ年寄りの魔導師がやつて来て、言つたのです。

『緑龍渓谷の奥にあるパッセルベルという村の泉へ行きなさい。光の子があなたを救つてくれるでしょう』

「私は初め、人間の魔法使いの言つ事を信じていいのか迷いました。けれど、私にはもう

行くところは無かつた。行つて追つ出されれば、今度こそ私は死ぬしかないと迷いました。

でもそれでもいいと、私は思いました。一度魔王の配下になつてしまつた妖精には、結局安息の地など無い……。私は覚悟を決めてここへ来ました。

もし本当に光の子という方がいて、私を救つて下さるなら幸い、そうでなくとも、もうここまで他には当てはまりません。

…長老さまは確かに魔王と呼ばれた龍の帝王と戦つて勝つた方だと聞いております。も

し私がこの泉に住まう事をお許し下されないのでしたら、どうか私を殺して下さい。もう、他所をさまよう気力はありません。じつは、長老さまの強いお力で、私を自然に還して下さい…」

長老は少しの間、白い顎ヒゲを片手で撫でて考えていました。それから「ふと、ハナハナ

を振り返りました。

「ハナハナや」

呼ばれて、ハナハナは「はい」と返事しました。

「こっちへおいでの

「はい」

とことこと、ハナハナは長老の側へ行きました。

「この、黒い妖精をどう思うかね？」

「え…」

いきなり聞かれて、ハナハナは困りました。じつと自分を見ている黒い妖精を見返しました。

した。

妖精の目から、また涙が零れました。赤い大きな目が涙で一杯なのを見て、ハナハナは

黒い妖精が本当に悲しい思いをしているのだと思いました。

「長老さま

ハナハナは言いました。

「私は、黒い妖精さんが悪い人には思えません

「まあつ」

後ろで、ママおばさんが声を上げました。

「ハナハナ、この妖精は大勢の人間や私達の仲間を苦しめたのよ？みんな酷い目にあつ

たのよ？」

「でも、今は悪い人ではないと思うの…」

「殺された人も、いるんだよ？」

ボツヘさんも言いました。

「それでも悪い人ではないのかい？」

「うーん…」

ハナハナは考え込んでしまいました。

確かに、前はみんなを苦しめて人殺しをした人です。でも今は、その事を反省している

し、十分苦しんでもいます。

何より、黒い妖精の赤い瞳はとってもきれいで、ハナハナには嘘をついているとは、とても思えません。

困つてしまつて、ハナハナは長老を見上げました。長老はにっこり笑いました。

「ハナハナは、どうしてこの妖精が悪い人に思えないのだね？」

「…目が」

ハナハナは正直に言いました。

「目が、とってもきれいだから」

すると、長老は大きく頷きました。

「うむ。わしも同じ事を思つたよ。??妖精さんや」

「はい」

「あなたは、何という名前かの？」

黒い妖精は、小さいけれどはつきりとした声で、

「マーフ、と言います」

「ではマーフ、パッセルベルの長老の名において、この泉に住まつ事を許そう。

ただし、条件がある

長老は心配そうにこちらを見ているみんなを振り返りました。

「わしとハナハナはいいんじゃが、他の者が心配しておるのでな。

そこで、申し訳ないが、
ひとつあんたに枷を掛けさせてもらひ」

その1 村の泉（6）

黒い妖精マーフは、今度はしっかりと頷きました。
「はい。ここへ住まう事が許されるのなら、なんなりと
「うむ。では」

長老は杖の頭をすつ、とマーフの首に向きました。と、そこから金色の光が一筋発され、

真直ぐにマーフの首に飛んで巻き付けました。

マーフの首に、金色の首飾りが巻かれました。

「その首飾りは戒めじや。もしあんたが、今話した事や村の人々に嘘や悪さをした時には、

その首飾りがあんたの首を絞める。

ま、これは余計かもしけんが、その首飾りを外そうと魔法を使つても外れんよ。それは

龍の魔法封じに用いたものじやからな

「はい。絶対に外しません。…ありがとうございます」

マーフはもう一度、長老に深々と頭を下げました。

長老は「うむ、うむ」と頷くと、背後で恐こわ様子を窺つていた村の人々に言いました。

「もうマーフは悪さは出来んよ。安心して水を汲みなさい」

「本当に、大丈夫ですか？」

「わしが、保証する。」

長老の言葉で、村の人々はほつとして泉の側へと寄つて行きました。

ハナハナは、まだ悲しそうな顔をしているマーフに、にっこり笑い掛けました。

「大丈夫。きっとみんな分かつてくれるわ」
それから半年。

マーフは毎朝、泉に来るみんなに「おはよう」と挨拶します。

ハナハナ以外のみんなは初めは怖がって、マーフに挨拶を返しました。
けれどだんだんと平氣になつて来て、今ではみんな挨拶するようになりました。

マーフはみんなが水を汲んでいるのを、反対側の岩に腰掛けで楽しそうに眺めています。

ハナハナは、今日も元氣にバケツを銜えて泉に駆け降りてきました。

岩に腰掛けたマーフを見つけて、大きな声で挨拶します。

「おはよう、マーフ」

「おはよう、ハナハナ」

すると、ハナハナの後ろからも大きな挨拶の声がしました。

「おはよう、マーフ」

木ねずみの子供達でした。ハナハナが驚いて振り向くと、子供達はちょっと照れたように笑いました。

マーフはとっても嬉しそうに、子供達に挨拶を返します。

「おはよう、リック、ニック、マック」

ちゃんと名前を呼んで貢つて、木ねずみの子供達はちょっと得意げにお互いの顔を見ま

した。

見ると、ママおばさんがトネリコの木の根元で笑っています。

「今日もいい天氣ね、マーフ」

「ええ。ママおばさん」

二人の会話を聞いて、ハナハナはとっても嬉しくなりました。

ハナハナはうきうきしながら水を一杯バケツに汲んで、家へ戻りました。

その1 村の泉（6）（後書き）

「その1 村の泉」は、これで完結です。

アクションも何もない、のんきなファンタジーですが、
気に入つて下さつたら、ぜひご感想を下さいまし。

次は、「その2 銀の水時計」です。

いたずら子ねずみたちが、とんでもないことを！

ハナハナは子ねずみたちを庇つて、ある決心を……！

「パツセルベルの猫の妖精」は、まだまだ続きます！

その2 銀の水時計（1）

木ねずみの子供達は男の子三人。上からリック、ニック、マック。とっても仲良しの三人兄弟は、揃つてとってもいたずらっ子です。ボッヘさんの仕事道具ののこぎりをこつそり持ち出して、トネリゴの枝をあちこち切つて回つたり、長老の眼鏡をいじつて壊したり（そのせいで、長老は歩く時暫く孫娘の二二

ニヤに手を引いて貰つていきました）。

その度におかあさんのマーマおばさんは「近所に謝りに飛んで行きます。

「もつつ、あんた達ときたらつー もつちよつといい子になれないのつ？」

叱られて、それでも子ねずみ兄弟は元気一杯、好奇心いっぱい。

春は、パッセルベルに色んなお密さまが来る季節です。

お密さまが来ればみんな嬉しいのは当たり前ですが、何と言つても一番歓迎されるのが、

妖精の旅芸一座。寒い北国の妖精達の一団で、毎年パッセルベルに春の初めから一月程滞

在します。

旅芸一座には手品師やらアクロバットの人やらが居て、ハナハナを初め子供達にも大人気です。

中でも大人気なのが、トーベルさんというピエロの人。真っ赤な服に真っ赤な三角帽、

鼻も真っ赤で、動きもおしゃべりも面白くて、みんなトーベルさんがステージに出て来る

と大拍手です。

旅芸一座は、いつも南側の一番下の大きな枝にテントを張ります。それは物凄く太い枝で、富殿がまるまるひとつ乗るんじゃないかと思つような大きさです。

赤青黄と、七色に塗り分けられたテントが建つと、子供達は一斉に近くまで走つて行きます。

春一番の花風が吹いた日、待ちに待つた一座がやつとやつて来ました。

一座は早速、いつもの枝にテントを張り始めます。子供達の中でそれを最初に見付けたのは、子ねずみ兄弟でした。

「すげえっ、妖精旅芸一座だつ」

「ハナハナ達に知らせて来ようつ！」

三人は急いでトネリコの木の中程にある、ミミミミの家へ行きました。

ハナハナはちょうどお姉さんを手伝つて、家の裏の小枝に洗濯物を干している最中でした。

高い枝にだんな様と子供達のシャツを干すミミミの側で、まだ背の低いハナハナは低い枝に靴下やハンカチを掛けていました。

「ハナハナつ！」

「あ、リック、ニック、マック」

自分のピンクの靴下を干しているハナハナの所へ、兄弟は走つてきました。

「来たよつ、妖精旅芸一座つ！」

大きな声で、リックが言いました。

「えつ、ほんと？」

「うん、今南の大枝にテント張つてゐる」

「うわあつ！見に行きたいつ！」

ハナハナは、ちらりとお姉さんを見ました。

ミヤミは、クリーム色の柔らかい毛並みをふわっと和ませて、小さな妹に笑い掛けました。

「行きたいんでしょ？」

「……うん。いい？」

「いいわよ、行つてらうしゃい」

「わあいっ、お姉さんありがとうつー！」

ハナハナは飛び上がって喜んでから、でもちよつと待つて、と子ねずみ達に言いました。

「これ、干しちゃうから」

許可は貰つたけれど、お手伝いは最後までちやんとしないといけません。

それは、ミヤミとの約束でした。

ハナハナは手早く洗濯物を小枝に掛けると、洗濯籠を持って家の方へ行きました。

裏口近くの木のこぶの上に洗濯籠をぽんつ、と置いた時、

「お姉ちゃん、どこか行くの？」

裏口の窓から姪のモモが顔を出しました。

「うん。妖精旅芸一座が来たの」

「あーっ、モモも行くーっ！」

窓枠を両手で掴んでぴょんぴょんと跳ねるモモ、窓枠をさのい

イミが洗濯物を干す手

を休めて言いました。

「ダメよ。モモはお風邪でしょ？ 治つてからね」

今年六歳になつたばかりのモモは、身体が丈夫ではありません。生まれた時から、真冬

になると必ず一度は風邪で熱を出します。

「 ずるーーいっ ! ハナお姉ちゃんばっかりーーっ !

拗ねて鼻を鳴らすモモが可愛くて、ハナハナはくすつ、と笑いました。

「 お土産話、聞かせてあげる 」

チヨッ、ヒモモのピンクの鼻の頭にキスをして、ハナハナは窓を離れました。

「 じゃあ、行つて来ますつ 」

その2 銀の水時計（2）

ハナハナは子ねずみ達と一緒に勢い良く南の枝まで走つて行きました。

枝へ行くと、テントはもう大体出来上がつていました。去年の春にも見た、七色に塗り分けられた大きなハ八角形の布の建物の上に、金色の三角旗がはためいています。

ハナハナと子ねずみ三兄弟は、わくわくしながらもつと近くまで寄りました。

「あれ、なんだろう？」

リックが、テントの裏側、南の枝先の方を指差しました。そこには、大きなテントに隠

れるように、小さなテントが五つ、張られていました。

「ああ、あれは芸人さん達のお家よ」

ハナハナはにっこり笑つて言いました。

「え？ 芸人さんのお家？」

小さいマックが、びっくりしたようにハナハナを見上げました。

「でも去年はそんなの無かつたよ？」

「去年もあつたわよ。きっとマックは小さかつたから、気がつかなかつたのよ」

「そうかなあ……」

マックは不思議そうに、一人の兄を見ました。

「ツクが言いました。

「あつたかもしれない。僕達ショリーに夢中だつたから、気が付かなかつたかも」

「そうかもね」

長男リックがそう言つたので、マックも「うん」と納得しました。

「ねえ、あそこに行けば芸人さんに会えるのかな？」

「会えるんじゃない？」

「行ってみようよ。」

「え、でもみんなお仕事してるよ。行ったら邪魔じゃない？」

ハナハナの言葉に、三兄弟はうーん、と唸りました。

「だめかなあ」

「ダメよ」

「でも、トーベルさんのファンですって言つたら、通してくれないかな？」

「僕達、まだ子供だし」

「うーん」

今度はハナハナが唸りました。

もしかしたら、大丈夫かもしれない。リックの言つ通り、自分達はまだ子供だし、トーベルさんに会いに来たと言えば、テント張りの職人さん達も通してくれるかな。

「……行ってみようか？」

怒られるのは嫌だけど、でもやつぱりトーベルさんに会いたいし。ハナハナが行こうと言つたので、子ねずみ三兄弟は大はしゃぎで駆け出しました。

それでもテントの側に来ると、四人は大人達の仕事の邪魔にならないよう、気を付けながらゆつくり歩きました。

色々な妖精達が作業をしていました。テントの上で太いロープを張っているのは猿の妖精。

精。三人居ましたが、みんな焦げ茶の毛並みで同じ顔をしています。下で荷物をあちこちに運び入れる仕事は、熊の妖精達がしていました。大きな熊の妖精

が側を通り、ハナハナ達はどきどきしました。

漸くテントの裏へ出ると、ハナハナと子ねずみ達は一度立ち止まりました。

「どれが、トーベルさんのお家だらう?」

きょろきょろと、五つの小さなテントをみんなで見比べます。で

も五つのテントはみん

な同じ灰色で、どれがトーベルさんのお家だか分かりません。

そこへ、置んだ大きな布を幾つも持った、熊の妖精のおじさんが通り掛かりました。

「あの?」

「おつ、何だい? 嬢ちゃん」

熊のおじさんは、とっても低い優しい声で答こたへました。

「あの、トーベルさんに会いたいんてすけど?」

「ああ。トーベル先生のファンかい? 先生のテントなら、右から

「一番田だよ」

じゃあな、と荷物を抱えて去つて行くおじさんで、ハナハナは大きな声で、

「ありがとうございました」

とお礼を言いました。

それを見ていた子ねずみ達も、一拍子遅れて「ありがとうございました」とお礼を言いました。

お礼を言いました。

教えて貰つた、右から「一番田」のテントに、四人は行きました。テントの前で、リックが言いました。

「トーベルさんつて、偉いんだね。さっきのおじさんトーベルさんの事『先生』って呼んでたよ」

「じゃあ、私達も先生つて、呼ばなきゃね
ハナハナはテントの入り口に向かって、
「トーベル先生つ、こんにちはつ」
と言いました。

でも、待つても返事がありません。

「お留守かな？」

ハナハナは子ねずみ達を顔を覗合わせました。

「お留守みたい。帰ろうか？」

「もう一回、呼んでみよつよ。みんなで」

一シクの提案で、もう一回、トーベル先生にこうは、と、今度はみんな揃つて言い始めた。

でもやつぱり、中から返事はありません。

その2 銀の水時計（3）

「やつぱつお留守よ。帰つましょ。」

ハナハナはそう言つて、くるりと後ろを向きました。

と、小さじマックがたたつ、とテントの入り口に近付きました。

「でも、ちょっとだけ」

そう言つて、マックはぱつ、とテントの入り口の布を捲つ上げました。

「あ、開いてる」

「中、どんな？」と、一ツク。

「暗くて見えない」

「入つてみようよ」

「え？ ダメよそんな事しちゃ」

ハナハナは止めました。けれど、好奇心一杯の子ねずみは止まりません。

三人はするする、とテントの中に入つてしましました。

「リックつ、ニックつ、マックつ！」

ハナハナは仕方なく三人の後に続いて中へ入りました。トーベルさんのテントの中は、本当に真っ暗でした。

前を歩く兄弟の姿も全く見えません。

手を伸ばすと、何かが手の甲に当たりました。ハナハナはそれがすぐ前のリックのしつぽだと気が付きました。

「もうつ、こんな事しちゃいけないのよ！」

小声で怒りながら、ハナハナはリックの細いつるつるのしつぽを掴みます。

リックはしつぽを引っ張るよう取り返すと、「しつつ」とハナハナに口に指を当ててみせました。

ややあつて、先頭のマックが何かを見付けました。

「ここ」、行き止まりだ

「入り口の反対側？」

それにしては、あまりにも短い気がします。マックが「ううん」と言いました。

「板みたいのがある。おつきいの。それに、ドアノブが付いてる」「回してみるよ

ニックの声。

「ダメよつ

何となく、その先に入つたらいけない気がしてハナハナは止めました。

でも、マックはドアノブを回してしまいました。
ぎいっ、と、木のドアが開く音がして、扉が開きました。
ドアの向こう側から、淡い光が漏れてきました。

「うわあ

感嘆の声と共に、マックがまず中へ入りました。続いて二人の兄が、そしてハナハナは恐る恐る中を覗きました。

ドアの中は、これがテントの中とは思えないような場所でした。
まず四方にはちゃんとした壁がありました。布張りテントにある
篱のない土壁に、みんな田を丸くしました。

右側の壁の上半分には、丸い小さな窓が五個あり、そこから光が入っています。

窓の下には長椅子が一脚、椅子の上には、柔らかそうなキルトのカバーとクッションが三個、置かれていました。

左側の壁は一面戸棚です。一部にガラスの扉が付けられた棚には、何に使うのか分から

ない複雑な形の細い管が幾つも付いた銀色の道具や、勝手にくるくるく

る回っている地球儀、

銀の皿の上に乗つてずっと煙りを出している透明なコップなどが置かれています。

部屋の真ん中には黒い大きな机があり、机にはきれいに丸められた羊皮紙とペン、インク壺、水晶玉などが乗っていました。

リックが、机の上の小さな砂時計を取り上げました。

それは、銀色の枠に収まつたガラス容器の中に、きらきら光る半透明の砂粒が入つた、

小さな時計でした。

「きれいだね」

リックは時計を丸窓の方へ高く上げ、砂粒のきらきらを透かして見ます。

「すごいつ、これ砂じやない」

「えー？ なになに、兄ちゃん」

「僕にも見せてつ」

途端に、子ねずみ達は砂時計に似た、不思議な時計の取り合いを始めます。

きやつきやと喜ぶ三兄弟に、ハナハナはどきどき。

「ダメっ！ そんなことして落として壊したら、大変っ！」

「何がかな？」

唐突に大人の声がして、ハナハナはぎくっとしました。
その途端。

ぱりーん。

リックが時計を床に落としてしまいました。時計はガラスが割れ、中の、砂のようなきらきらしたものが床に散らばりました。

「おおっ」

ハナハナの側を、声の人が通り過ぎました。トーベルさんでした。

トーベルさんは床に散らばった、中身とガラスの上に畳み込みました。

そのまま、暫く動きません。

気詰まりな沈黙が続きました。

ハナハナも、落としたリックも一ツもマックも、誰も喋る事も出来ません。

大変な事をしてしまったのです。さつとすぐにトーベルさんは物凄く怒るだろう。ヒ、

ハナハナは内心どきどきしていました。

でも、トーベルさんは中々何も言いません。

その2 銀の水時計（4）

「…………あの…………」

どうしていいか分からず、ハナハナが口を開きました。

「あの、私達……」

「ごめんなさいっ！」

我慢出来なくなつた子ねずみ兄弟が、ハナハナが何か言う前に大きな声で謝りました。

「壊すつもりじゃなかつたんです。ただその……すつ」「きれいだつたから、よく見たくて……」

「僕も」

「ぼ、僕も」

漸く、トーベルさんが立ち上がりました。

その顔を見て、ハナハナはちょっとびっくりしました。

お姉さんのミイミから、トーベルさんはハイエルフという、人間によく似た妖精だとい

う事は教えて貰つっていました。でもピエロのお化粧をしていないトーベルさんは、それはとても美しい青年でした。

トーベルさんは、綺麗な青い目でハナハナ達四人を一人ずつじつと見ました。ハナハナは、何だか恥ずかしいようなこそばゆいような気分になつて、思わず俯きました。

みんなをじつくり見てから、トーベルさんはやつと口を利きました。

「…………さて、どうしたものかな」

そう言つと、机の上にあつたガラスのベルを取り、ちりりん、と鳴らしました。

すぐに、部屋の外から声がしました。

それは、さつきハナハナ達にトーベルさんのテントを教えてくれた熊のおじさんでした。

「済まないけど、急いでパツセルベルの長老殿を呼んで来てくれないか」

「はい」

おじさんは、ちらつとだけハナハナ達を見て、すぐに部屋から出て行きました。

長老さまにお話しする、という事は、これは本当に大変な事をしてしまったのだ。ハナ

ハナは改めて青くなりました。

？？どうしよう。どうしよう…

おろおろしている子供達に、トーベルさんは静かに言いました。

「これは、水時計というものだ。知っているかい？」

ハナハナも、三人の子ねずみも首を横に振ります。リックがおずおずと言いました。

「砂じやないつていうのは、分かつたけど……」

「うん。銀色のものは、特殊な水なんだ。何から採った水か、分かることかい？」

子供達は、再び首を振ります。

トーベルさんは、ちょっと厳しい表情をして言いました。

「これは、妖精の血から水分だけ取り出して作った水なんだ。作るのは大変難しいんだよ。

何せ、一人の妖精の身体中の血を全部抜き取つて、百日以上大鍋でぐつぐつ煮込んで、それを濾さなきやならないんだから

「え……」

ハナハナも子ねずみ達も、恐怖に顔が引き攣りました。

特に時計を壊してしまったリックは、がたがたと震えています。

「どうしようかなあ。この時計が無いと、季節を計る事が出来ない。

次の村や街に行くの

に、季節が分からないと動けないし。

?? そうだ、誰か時計の材料になってくれないか?」

トーベルさんは、リック、ニック、マックの三人を次々に見ました。

小さなマックが、恐くてしゃっくりを始めます。

「と…、と…、時計の、材料つて…、血を抜かれるつてこと?」

お兄ちゃんのリックが、意を決して質問しました。

トーベルさんはこっくり頷きました。

「君達は小さいから、小さな時計しか作れないけど、それでも無いよりはいいからね」

「死んじゃうの…?」

一番田のニックが聞きました。

「ああ、そうだよ。でも悲しむ事は無い。血を抜かれた妖精は、壞れるまでは時計になつてずっと生きていられる。まあ、話したり動いたりは出来ないけどね。それに、大好きな

お菓子も食べられないし、一度とお母さんの顔も見られない。でも

…

そこで、マックがつゝ泣き出しました。リックが慌てて弟を抱きかえます。

「マック、マック」

わあわあと声を上げて泣く子ねずみに、トーベルさんは少し困った顔をしました。

「おっ、おっ、お母さんに会えなーつー、お母さんつー！」

泣きながら、お母さんを繰り返すマックを見ていて、ハナハナは決心しました。

その2 銀の水時計（5）

「私が時計になります。私なら、リック達より大きいから、少し大きな時計が出来るでしょ。だから…」

子ねずみ達にはお母さんがいます。ママおばさんは、大切な大切な子供達の誰一人、時計なんかにしたくない筈。

子ねずみ兄弟だって、お母さんに一度と会えないなんてとっても嫌で、悲しいんです。

けれど、ハナハナなら大丈夫。ハナハナにはお父さんもお母さんもいません。

育ててくれた大好きなお姉さんはいるけれど、リック達を失つまもいません。

「ママは悲しくないかも知れません。

「うん。本当はおんなじくらい悲しいかもしれないけれど。ハナハナは真剣な表情でトーベルさんを見詰めました。

「お願いです。どうか、私を選んで下さい。トーベル先生つ「……参ったなあ」

トーベルさんが、苦笑いしながら金色の頭を搔いた時。

「子供達をあんまり怖がらせるからですわい。トーベル伯爵」ドアの方から長老の声がしました。

ハナハナ達が振り向くと、熊の妖精のおじさん手を引かれて、長老がこちらにやって来ました。

「「きげんよう、パッセルベルの長老殿」

「伯爵もお元気そうで、何よりですわい。？？？といひで、お仕置きはそのくらこにして、

そろそろ子供達を安心させてやつてくれませんかの？」

「…お仕置き？」

ハナハナは目を丸くしました。

と、トーベルさんが青い目を優しく細めて、ハナハナの白い頭をふわり、と撫でました。

「だつて君達と来たら、僕の書斎に勝手に入つて遊んでいたからね」「…ごめんなさい」

少し泣き止んだマックが、小さな声で謝りました。

「あの、お仕置きつて…？」

おずおずと聞いたハナハナに、長老がほつほつと笑いました。

「その水時計の水は、こここの泉の水じゃよ」

「え…？ 妖精の血じゃないの？」

「あつはつは」

トーベルさんが、それまでと打つて変わつて朗らかに笑いました。
「「めん」「めん。そんなものは使ってなによ。長老のおっしゃる通り、水時計の水にはこの泉の水と、少しひねり口の木の皮のエキスを入れるんだ。すぐ出来るから、後で見せてあげるよ」

聞いた途端、子ねずみ三兄弟が揃つて大きく溜め息を付きました。
そのままずるずると

脱力して床に座り込んだ三人に、長老とトーベルさん、それに熊のおじさんはもう一度大笑いしました。

その後、ハナハナと子ねずみ達はトーベルさんと一緒に、泉へ行きました。

トーベルさんは泉の縁に立つと、上着の内ポケットから細い小枝を一本出しました。

右手に小枝を持つと、トーベルさんは屈んで左手で水を掬い、そ

つと小枝に掛けて行きます。

「何をしているの？」

尋ねたハナハナに、長老は「しー」と口に入をし指を当てました。そして、小声で言いました。

「トーベル伯爵は、妖精の中でも一番身分の高い、ハイエルフなんじゃ。ハイエルフは色々な魔法操る事が出来る。あの水時計は、この世界中のあちこちに封印されている魔王の黒い水を監視するための道具で、ハイエルフの魔法でしか作る事が出来ん」

「ふうん」

ハナハナが頷いた時、トーベルさんが立ち上がるました。たっぷり水を掛けた小枝に、今度は外側のポケットから取り出した茶色い小瓶の中身を振り掛けながら、小さく呪文を唱えます。

すると、小枝がぱあつ、と光り出し、見る間に真ん中にぐいのある時計の形に変わりました。

ました。

完全に時計の形が出来上がると、光はすうっと消えました。

トーベルさんはハナハナ達を振り向くと、

「出来たよ」と笑いました。

その時、ぱしゃん、と水面が波打つて、泉からマーフが顔を出しました。

「あ、マーフ」

水の妖精は、ハナハナの呼び掛けにこちらへ来掛けかりましたが、トーベルさんを見付けると、「あ」と声を上げて再び水の底へと姿を隠してしまいました。

「あれ、どうしたんだろ、マーフ」

「今日は、この泉の妖精だね？」

その2 銀の水時計（6）

マーフがこっちへ来なかつたので、何でだろ？と首を捻つたリックに、トーベルさんが聞きました。

「うん」

「あれは、黒い妖精だね」

「でもつ、もう悪い妖精じゃないんですつ。ね、長老さま？」「せつからく泉に落ち着いたのに、またマーフが追い出されるよつた事になつては大変と、

ハナハナは慌てて長老に助けを求める。

でも長老は、ただにっこりと笑つただけでした。

トーベルさんが言いました。

「でも、彼はもう魔王の影響は全く受けていなつだね。……やはりここには『光の子』

が居るからかな。

泉はよくなつたね。やつと命が入つたようだ

「え……？」

何の事が分からず、ハナハナはもう一度長老を見ました。

「マーフが来て、この泉の水は更に良くなつた、という事じや。トーベル伯爵の折り紙がついたのだから、マーフにとつても良いことじやな

「そーなんだ？」

子ねずみ三兄弟も、何だか意味が分からなくてみんなで顔を見合わせます。

ハナハナは、分かつたような分からなつよつた。でも悪い事では無さうなので、取りあえず「うん」と頷きました。

トーベルさんは出来たばかりの水時計を子供達に見せてくれまし

た。

リック、ニック、マックは、今度は絶対落とさないよ!こと、もうと持ちながら三人仲良く眺めていました。

帰り着いた時には、もう西の空が茜色になっていました。
お土産話をする約束していたモモに、ハナハナは今日の出来事を話して聞かせました。

すると。

「ずつるーいっ! モモもトーベルさんに会いたかったーっ! 銀の水時計見たかったー

つ! トーベルさんのお部屋に入りたかったーっ!」

次には絶対一緒に行く、と言い張るモモに、ハナハナはちょっとと困ってしまいました。

「でも本当は入っちゃいけないお部屋だったのよ。だからもう一度とは行かないよ」

「いやーっ、モモも今度行くーっ!」

あんまり駄々をこねるので、モモは最後には//マイ//に怒られてしましました。

べそを搔いたモモを慰めながら、ハナハナは気になる言葉を思い出していました。

??『光の子』って、何だらう?

前にも長老にそう言われました。

『光の子』。

言葉から好い事を言われているのだろうと、ハナハナは勝手に思っていましたが、本当にそうなんでしょうか?

お姉さんは、その事知っているのかな?

今度ちゃんと聞いてみようと、ハナハナは泣き疲れて自分に寄り掛かり、半分寝こけているモモの頭を撫でながら、決心しました。

その2 銀の水時計 完

その2 銀の水時計（6）（後書き）

「その2 銀の水時計」は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

今回初登場したトーベルさんは、また別のお話でも登場します。

次は「その3 命の水」です。

大工の頭領、シマリスの妖精ボッヘルさんは、隣村へ嫁ぐ娘さん
のことと、跡継ぎのこととで、現在頭を悩ませています。

そんなボッヘルさんに、一大事が……！

どうぞ、『期待下さい』。

その3 命の水（1）

シマリスの妖精ボッヘルさんは、その仕事は大工さんです。

ボッヘルさんのお父さんも、そのお父さんも大工さんで、パッセルベルの村で、家を作つたり橋を作つたりして来ました。

でもボッヘルさんは跡継ぎがいません。子供は娘さんが一人だけ。ミントさんというその娘さんは、近々隣村の同じシマリスの妖精の若者と結婚します。

嬉しい事の筈なのですが、ここにのところボッヘルさんは何故か元気がありません。

長老の家はトネリコの木の一番上、三つ又になつた枝の根元に作られています。建つてから百年にはなるかもしない家は、ここにのところよく雨漏りがしていました。

「こりやもう寿命かのう」

雨が上がった翌日。長老は孫娘の一一ニヤを呼んで言いました。「ボッヘルさんに、手が空いたら見に来てくれと、言ひに行つてくれるか」

一一ニヤが行くと、ボッヘルさんはすぐに長老の家へとやつてきました。屋根へ上がり、様子を見ました。

「どうだね？」

「こりやあ、屋根の板だけじゃあなくて、屋根裏の支えの木もダメですわ」

「そうか。じゃあついでに屋根裏も直して貰おうかのう」

ボッヘルさんは早速、仲間の大工さん達と家の中と外を調べて回り

ます。

その結果。

「長老さま、申し上げにくいんですか…」

「なんじやね?」

「床下の支えも腐っていました」

長老は翌日、引っ越しすることになりました。

話を聞いた村の人達が、大勢手伝いにやってきました。

もちろん、ハナハナもミイミと一緒に手伝いにきました。

「おおハナハナ。手伝いに来てくれたのか。ありがとうございます」
食器を片付ける一一ニヤを手伝っていたハナハナに、長老が言いました。

「はい。お引っ越し大変ですね」

「つむ。暫く一一ニヤの両親の、わしの息子の家に同居じやよ」「空き部屋があるから」と、一一ニヤは嬉しそうに言いました。

一一ニヤの家は、北の枝の、上から一番目です。大きな家で、お手伝いさんも来ています。

大好きなおじいさんと少しの間でも一緒に暮らせるので「わしつきしている」一一ニヤに、ハナハナも嬉しくなつてにっこり笑いました。

その間にも、村の人達はせつせと仕事をこなします。

しばらくすると、南の大枝の旅芸一座の団員さん達も手伝いに来ました。

「毎年、ここの人達にはお世話になつてているからね」
トーベルさんも白いシャツを腕まくりをして、重い木箱をひょいと抱き上げました。

そうやって女人達が荷造りした品物を、男達がどんどんと運び出します。遅れて手伝いに来たミイミのだんな様ティーヴも、団員さんや村のみんなと一緒に木箱を抱いで下の

枝へと降りて行きました。

引っ越しは、みんなの手伝いで半日で終わりました。

お皿を少し過ぎた頃、マーマおばさんが子ねずみ達を手伝わせて、
サンドイッチとお茶

を運んできました。

「さあさあ、みんなお腹が空いたでしょ。食べて下さーいな

「さて、これからが大変だね、ボッヘルさん

木こりの木ねずみルーラさんが、隣に座つたボッヘルさんに言いました。

「解体して、使える柱は残そうと思うんだがね

「そうかい。なら新しいのを何本切り出すか、早いとこ調べてしまおう」

ハナハナは、そんな話をしているおじさん達に、紅茶のお代わり

を注いで上げました。

と、ルーラさんがボッヘルさんに言いました。

「ときに、ボッヘルさん、跡継ぎはどうなさるんだい？」

ボッヘルさんはちょっと困った顔になつて、ふつむ、と唸りました。

「隣村の親戚の子を養子にしないかと言われてるんだが……。ひとつも、本人が大工は嫌だ

と言つていてね。どうしたもんかと畠で思案しているよ

「婿どのは、どうなんだい？」

「トックドは絨毯織りの仕事をしてこる。筋はいこよつだが、今は兄貴のところで使われて

いるんだ。……あの子に大工は、どうだかね……

「そうかい」

ルーラさんはティーカップを持ち上げて、一口お茶を飲みました。

そして、側で話を聞いていたハナハナに、

「難しいね

と笑いました。

引っ越しも無事に終わり、これから家は建て直しです。

その3 命の水(2)

ボツヘさんは仲間の大工さん達と、家の解体に掛かりました。トネリコの木の皮で葺いた屋根を取り外し、壁も床も剥がします。

ぱりぱりべりべりといつう凄い音に、興味津々の子供達が現場を見にやって来ます。

「危ないから、寄っちゃダメだぞ」

大工さん達は、下の枝から面白面白に見ている子供達に注意しました。

「楽しそうだね」

ハナハナと一緒に見ていた木ねずみのリックが言いました。

「僕、大きくなつたら大工さんになろうかな」

「えつ？ 木ねずみさんって、大工になれるの？」

一一ニヤが不審そうにリックを見ます。

「ボツヘさんも、他の大工さんも、みんなシマリスさんだよ？」

「そーだね……ダメなのかなあ？」

「ダメなんじやない？」

リックの第二ツクが言います。

「ボツヘさんに聞いてみれば？」

ハナハナが言ったのに、みんなは「そりだよね」と頷きました。

何日かして解体は終わり、ボツヘさんは使える柱と使えない柱を見分けて、ルーラさん

と相談したようです。

朝。

ハナハナがいつものようにマーブルの泉に水を汲みに行くと、近くの森から斧を使う音が

していました。

「大変だね、長老さまのお家の修理」

マーフは、いつも朝座つていてる間に腰掛けて、ハナハナに言いました。

「うん」

「今日はルーラさん達が、柱の木を切つてゐみたいだね」

「朝早くからやつてゐの?」

「そつみたいだよ」

マーフは微笑みました。

「みんながいい家を作らうとしているね。楽しみだね」

「うん」

「みんなが出来るんだろ?」

マーフと話して、何だかハナハナは自分の家の事のよつとわくわくしてきました。

そして何日か経つて。

一度壊された長老の家は、柱と屋根の梁が出来て、ちよつと家らしくなつてきました。

その日、屋根の板を張る仕事をしていたボックさんの所に、ミントさんのお嬢さんがやつてきました。

トッドさんとミントお嬢さんは、ミントさんがその日回りつの親戚にじ挨拶に行くのを迎えに來たのです。

出かける前にボックさんに挨拶して行くつて、トッドさんはミントさんと連れ立つて長

老の家へやつて來ました。

「お父さん、これから行つて來ます」

屋根の上のホツヘさんとミントさんが言いました。

飽きもせずに大工さんの働くのを見に來たハナハナは、ミントさんがいつもと違つた綺

麗なピンクのドレスを着ているのを、驚いて眺めっていました。

「そその無いようにな」

「は」

ミントさんはぱべりと頭を下げると、トッドさんと一緒に下へと降りて行きます。

娘の姿が小さくなるのを、ボツヘさんは屋根から首を伸ばして見ていました。

ハナハナも、ボツヘさんが仕事の手を止めて首だけミントさんを追い掛けるのを見ていました。

ました。

と、その時。

ボツヘさんがバランスを崩しました。あつと言ひ間に、じんじんと屋根を転がって、下へ落ちます。

長老の家は三叉にあって、入り口の反対側はもう枝がありません。すぐ下の枝までは十数メートル。

「ボツヘさんっ！」

仲間の大工さん達も、ハナハナ達も慌てて下の枝へと走りました。ボツヘさんは、すぐ下の枝も通過して、更にその下の枝で止まつていました。

ハナハナ達子供が追い付くと、大人達は右往左往していました。

「いけねえっ、全身を強く打つてるっ」

「誰か長老を呼んで来てくれっ！」

どうなつたのか、子供達が側へ行こうとする、

「子供は来るんじやねえっ！」

若い大工さんに怒られました。

仕方なく、ハナハナ達は近くの枝に上がつて様子を眺めました。高い枝の上から見ると、大人達がボツヘさんを真ん中に、輪になつて集まっています。

その3 命の水（3）

「ボツヘさん、大丈夫かなあ」

「すいぶん、落ちたもんねえ」

「……あ、ミントさん達戻つて來た」

リックが指差したのでそちらを見ると、ミントさんとトッシュさん
が急いで上がつて来る

ところでした。

「おいつ、娘さんが來たぞ！」

「通してやれつ！」

「行つてみよう」

ハナハナは思い切つて、現場の枝に降りました。

「寄つちゃいけないつて、言われたよつ」

「大丈夫つ」

ハナハナと子ねずみ三人、それとモモと近所の子供達は、ミント
さん達のために大人が

開けた隙間からすると中へ潜り込みました。
人の輪の中で、ボツヘさんは倒れていきました。

「お父さんつ！」

目を瞑つたまま動かないボツヘさんの側に、ミントさんは泣きな
がら座り込みました。

「どうしてつ！」

肩を掴んで揺すりつとしましたミントさんを、仲間の大工さんが止め
ます。

「揺すつちゃだめだつ。今長老を呼びにやつてるから」

ミントさんは手を放しました。そして、顔を両手で覆います。

「どうして、足なんか滑らせたの？ いつもなら大丈夫なのに……」

「そりや嬢ちゃん、親方あ、あなたの嫁入りが気になつてたのさ。
早くにおかみさんを亡

くしてゐる親方は、人一倍、嬢ちゃん大事だからよ。無事に嬢さんの家族に気に入られるかどうか、片親だつて、いじめられやしないか、心配でしょ「うがなかつたんだよ」

年輩のシマリスの大工さんが言いました。

「だから、ここんどこずっと心ここにあらず、でさ。ときどきほいつと手を止めたりしてたもんよなあ」

ミントさんが、ボツくさんの身体に縋ります。

「そんなことつ。大丈夫に決まつてゐるのに……」

「分かつてゐるんだよ。それでも気になるのが親つてもんだ」

「そうそう。幾つになつても子供は子供。嫁に行く、婿になるつても、嬉しい反面、心配なんだよ、親つて奴は」

そういうもんなんだ、と、大人に混じつて聞きながらハナハナは思いました。

お嫁に行つて幸せになれるのか、そういう心配を、お父さんやお母さんはするものなんだ。

羨ましいな、と思いました。

だつて、ハナハナにはお父さんお母さんはいません。

もし居たら、ハナハナがお嫁に行く時、ボツくさんみみたいに心配するのかな。

ハナハナがそんな事を考えていた時。

「おおいつ、長老さまがおいでになつたぞーつ！」

上の枝から声がしました。

見上げると、若い逞しい猿の妖精の大工さんが、長老をおんぶして掛け降りて来ます。

その後ろに、トーベルさんが付いて来ます。

あつという間に、大工さんとトーベルさんははみんなの居る枝へ

と降りて来ました。

大工さんの背から降りた長老は、急いで輪の中へとやつて来ました。

「ボツヘさんが足を滑らしたとな！」

「はい。上の三叉枝から、ここまでは逆さまに」

長老はミントさん達の反対側へ行き、屈んでボツヘさんの様子を看ます。動かない手を

取つて調べ、胸に耳を当てて心臓の音を確認していました。

「ううむ。まだ生きておる」

「ほんとですかっ！」

みんなの顔がぱつと明るくなりました。

しかし、長老は難しい顔で先を続けました。

「じゃが、このままでは危険じや。一刻も早くしかるべき処置をせんと」

「『王の葉』は、今の季節じゃ生えてないしなあ」

大工さんが残念そうに言いました。

「『命の水』があれば一発で解決なんだけどね」

トーベルさんの言葉に、長老が、

「おお、そうじやつた」と顔を上げました。

「伯爵、お持ちではないのかな？」

「残念ながら。去年うちの団員が興行中に大怪我をして、それで使い切つてしまつたので

すよ。後は何処かで分けて貰うしか……」

「それは、何処にあるのですかっ？」

訊いたのは、トッドさんでした。

「取りに行く必要があるのなら、僕が行きますっ！ 教えて下さい

「長老さまっ！」

「私も行きますっ！」

ミントさんも言いました。

長老は、一人の必死な顔を交互に見ました。

「うむ……。隣村の村長が持つておったのだが、この間話した時は、今は切らしてしまつていいと云つた。あとで、あるとすれば、山向ひの緑龍平野の真ん中の街リー・リストの長老のところじや。……じやが、あそこから分けて貰つても戻るまでは、ボツヘヤんは保たんじやろつ」

その3 命の水（4）

「じゃあ……」

トッドさんが、言葉を詰まらせます。ミントさんが再び顔を手で覆いました。

「何とかなんないのかよつ、長老さまつ」

「お願いですつ、他の方法は無いのですかつ？」

それまで輪の中で黙つて様子を見ていたミィミィが言いました。

ハナハナも釣られて、

「他のお薬は無いんですか？」

「そうじやのひ……」

長老は考え込みました。その時。

「あのう」

人の輪の外から、マーフの声がしました。

みんなが一斉に振り向きます。

と、枝の上十センチ程の所に、マーフが浮いていました。

「長老さま、『命の水』なら、多分私は作れます」

「なんとつ！」

長老は驚いて細い目を大きく開けました。

「あれは上級の魔導師でも難しい薬じやよ。確かに、水の妖精の中でも魔力の強い者は作

れるという話じやが……。あんたは、その……」

「長老さまがご心配になるのも、分かります。私は、何と言つても過去は魔王の手下です。

一度魔の洗礼を受けた者が、聖なる魔法で作る『命の水』を作れるのか。……正直申し上

げれば、私にも分かりません。でも、一刻を争うのなら、全力を賭してやります」

「長老殿」

トーベルさんが言いました。

「彼に任せてみませんか？ 私が見ると、彼は元は水の妖精の上位者のようです。魔

王の魔力から離れて久しいでしょうし、力が戻つていれば難無く作れるでしょう」

長老は目を閉じてしばらく考えた後に、言いました。

「分かった。マーフに頼もう」

マーフはぱつと顔を輝かせて、

「ありがとうございます」

と深々と頭を下げました。

「では早速作ります。ハナハナとリック、ニック、マック、それに他の子供達、手伝つて

くれますか？」

「え？ 私達が？」

ハナハナはびっくりしました。ボッヘさんを治す大切な薬を作るのに、自分達が手伝え
るなんて。

「お願いします」

マーフはにっこり笑いました。

ハナハナは緊張とわくわくが一緒くたになつた気分で、「はい」と答えました。

ハナハナ達は、泉に戻つたマーフを追つて下へ駆け降りました。その後を、大人達の何人かが続きました。

泉に行くと、マーフは泉の真ん中にふわり、と浮いていました。

「ハナハナ、泉に手を入れていて下さい。他の子供達も、ハナハナと一緒に泉に手を入れて下さい」

「こお？」

ハナハナは屈んでひしゃくと水に手を浸けました。子ねずみ人とモモ、近所の子供達もそれに習います。

みんなが手を入れたのを見届けると、マーフは目を閉じて小さな声で呪文を唱え始めました。

するとすぐに、マーフの身体が真っ白な眩い光に包まれました。きらきら輝く白い光はマーフの身体をくるくると回しながら、下の泉に吸い込まれて行きます。

やがて、マーフの身体を覆っていた光が全部水の方へと移りました。

光は水の中で固まって、きらきらと輝いています。

マーフは目を開けて光の様子を確かめると、素早く右手の人さし指を下へ向けました。

「ハナハナ、両手で水を掬つて下さー」

「……こお?」

言われた通り、ハナハナは水を手で掬いました。すると、手の中の水が光り始めました。

「あ……」

「それが、『命の水』です」

「えつ、でもこれどうやって上まで持つていけば……?」

手で掬つた水では、ボツヘさんか倒れている上の枝まで運ぶ間に零れて無くなってしま

います。

と、見ていた大人の中からマーフおばさんが言いました。

「私、お鍋を取つて来ます」

「それじゃダメよつ」

その3 命の水（5）

他の女の人が言いました。

「コップがいいわつ。私の家は近くだから、コップ、持つて来るわ
ねつ」

「いえ」

マー夫が首を振りました。

「何も要りません。ハナハナ、手の中の水を、ボツヘさんに届けと
祈りながら上に放り投

げて下さい」

「えつ？ 放つちゃつていいの？」

「はい。トーベルさんが受け取つてくれます」

マー夫が強く言つたので、ハナハナは言われた通りにしおつと思いました。

ボツヘさんに届け。

そう強く念じながら、ハナハナは両手を勢い良く上へ振りました。
すると。

水が、まるで生きているもののように細い糸になつて、上へと昇
つて行きます。

ハナハナ達は後で聞いたのですが、上へと昇つた『命の水』は、
トーベルさんが魔法で

作った小瓶に収め、すぐにボツヘさんに振り掛けました。

ボツヘさんは、『命の水』を振り掛けられると、たちまち意識を
取り戻しました。

ハナハナ達が急いで上に上がつた時には、ミントさんと抱き合つ
て泣いていました。

「おとうさんつ！ よかつたつ！」

「おお、ミントつ！」

喜ぶボツヘさん父子の側に立つていたトッドさんが、不意に大き

な声で言いました。

「お父さんっ！ 僕を弟子にして下をこつ！」

村の人も、長老も、旅芸の団員さん達も、みんなトッシュさんを見ました。

「絨毯織りの仕事は、嫌いじゃありません。子供の頃からやついて……。でも兄さんよ

りも上手くはなれないんです。だから、僕は兄さんとは違つ仕事をずっとしたかった。

お願いです。お父さんの仕事を、教えて下をこつ！」

深々と頭を下げるトッシュさんに、ボツくさんは言いました。

「うちに婿に来るという事になるが、それでいいんだね？」

「はいっ！」

「トッシュさんは、きつぱり返事をしました。

ボツくさんはにっこり笑うと、

「分かつた。君を弟子にしよう。ただし、わしは厳しきだ。でも自分で言い出したんだから

ら、逃げ出すのは許さんからな」「はいっ、よろしくお願ひしますっ！」

もう一度頭を下げたトッシュさんに、周りで様子を見ていた人達からわっと拍手が送られました。

「よかつたねえっ、ボツくさんっ！」

「いい跡継ぎが出来たじゃねえかっ！」

「ミントちゃんも、お父さんと離れなくてよくなつてっ！」

はい、と頷いたミントさんは、またうつすらと泣いていました。嬉しく泣きするボツくさん一家に、ハナハナもつにもりに泣きしてしまいました。

トッドさんは大工見習いとしてボッヘルさんの所に弟子入りしました。

最初の仕事は、もちろん長老の家造りです。
木を運んだり、削ったり、慣れない仕事ですがトッドさんは大工仲間のみんなに励ます

れて一生懸命働いています。

ボッヘルさんは、そんなトッドさんを本当の鳥居のよう見守っています。

ハナハナ達は、相変わらず大工さんの働くのが面白くて現場に見に行っていました。

近くの細い枝に並んで座りながら、リックが溜め息をつきました。
「いいなあ、トッドさん。やつぱり僕も大工さんになりたいなあ」
羨ましそうに足をふらふらさせて言つので、ハナハナは言いました。

「だから、木ねずみさんは大工さんになれるの？」

「……わかんない」

「やつぱりダメなんじゃないの？」

モモに言われて、リックはしょぼんと下を向きました。

その様子があんまり情けなかつたので、逆にハナハナは可笑しくなつて吹き出してしまいました。

いました。

「何が可笑しいんだよつ」

「あはは。『じめん』『めん』。でも、本当にダメかどうか分からんなら、思い切つてボッヘルさんに聞いてみたら？」

「あ、そつか」

何で今まで気が付かなかつたんだろうと、リックは自分の頭をこつんと叩くと、小枝から飛び下りました。

「ボッヘルおじさん」

一日散に建てかけの長老の家へ駆け寄つて行きます。

その後ろ姿を見ながら、ハナハナは、

「夢が違うといいね」

と心から呟きました。

その3 命の水 完

その3 命の水(5)（後書き）

いかかでしたでしょうか？

次は「その4 キッパとルウ」です。
ハナハナと同じ、子猫の妖精キッパは、お母さんが病氣のために、
遊びたいのも我慢して働いています。
働き先は、薬師の、妖魔のモルガナ婆さんのところです。

そこで、キッパは父親について重大なことを教えてもらいました……

小さな子供たちのお話です。ご期待下さい。

その4 キッパとルウ（1）

北の中枝に、キッパとルウという、猫の妖精の兄弟が住んでいます。

お兄さんのキッパは今年で10歳。ハナハナと同じ年です。

弟のルウは8歳。

一人はお母さんの二二イと一緒に暮らしていました。

キッパとルウも、他の男の子達と一緒に遊びに行きたい年頃です。

でも二人はそんなこ

とをしていられない事情がありました。

お母さんの二二イは病気がちで、ずっと寝たり起きたりです。なので、一人は家の用事をすべてやらなければなりません。

それに、一人にはお父さんがいません。

二二イは、お父さんのキールについて子供達には、「お父さんは遠い国へお仕事に出掛けているの」と教えています。

でも、キッパは本当の事を知っています。

キールは、魔王が倒れた後もあちこちで悪い事をしていた魔王の配下の妖魔に、殺されたのです。

それを教えてくれたのは、西の下枝に住んでいる、蛇の妖魔モルガナでした。

魔王が力を振るっていた時代でも、妖魔が全てその配下になつた訳ではありませんでした。モルガナ婆さんの種族は何故か魔王には従わず、各地の村や集落を他の妖精達と守りました。

そういう意味ではいい人なんですが、やっぱり妖魔は妖魔、他

の妖精達のように優しくはありません。

皮肉屋で偏屈なモルガナ婆さんは、あまり村の人達から好かれてはいません。

でも大変腕のいい薬師なので、村にはなくてはならない人です。

キッパがモルガナ婆さんからお父さんの話を聞いたのは、去年の春でした。

お母さんが働けないので、兄弟はあちこちでお手伝いの仕事を貢い、家計の足しにしています。

モルガナ婆さんは二二イの主治医でもあり、お手伝いは薬代を割り引いてもらっている分でもありました。

婆さんは結構人使いが荒く、その時は弟のルウは薬を煮込む鍋を搔き回す仕事、キッパは婆さんに付いて谷底の荒れ地へ香草を取りに行く仕事を命じられました。

谷底の荒れ地とは、パッセルベルと隣村のパッセルトーンの丁度中間にある場所です。

パッセルベルからは約2キロ、ちょっと遠いので、子供達だけで来たりはしません。

荒れ地は、名前の通り荒れた土地で、周囲は森の木が密生しているのに、何故かそこだけは生えていません。

まるで円形脱毛症のような場所です。でもそれだけで、恐いところではありません。

キッパは荒れ地へ来るのは、その時が初めてでした。

荒れ地の草は皆背が低く、中には春半ばだというのに枯れている

ような、茶色の草もあります。

大きな石が「じるじる」して、その間から香草の黄色の花が顔を出していました。

上半身は人間の姿、下半身は大蛇というモルガナ婆さんは、荒れ地に着くと、

「やれやれ」と、寸胴の腰に手を当てて溜め息をつきました。

「今時分は、ここにしか摘める香草は生えてないからね、仕方ないんだけど。……ここは

あんまり来たい場所じゃないね」

いつもは、聞き返すと怒鳴られるので、キッパはモルガナ婆さんの独り言は無視しています。

でも、この時の独り言は、何故かとっても気になりました。

「……どうして？」

怒鳴られるの覚悟で尋ねた子猫に、婆さんは予想に反して静かな声で言いました。

「ここは昔、パツセルベルの若者と、魔王の手下の残党だった、一つ目の巨人の妖魔が戦つた場所さ。あなたのお父さんのキールも勇敢に戦つたんだよ。……死んじまつたがね」

「？？え？ 嘘だよ？ お母さんはお父さんは遠い国に働きに行つてるって？」

「それは、おまえ達を安心させるためさ。あたしは目の前でキールがここで巨人に殺られるのを見てるんだ。？？信じないかえ？」

モルガナ婆さんは、いい人ではありませんが嘘は付きません。キッパはとてもショックでした。

お父さんは死んでいる。

病気のお母さんにその事を訊く事もできず、キッパはその後ずつ

と一人でその重大な事
実を抱え込んでいました。

そんな、大変な思いをしているキッパとルウですが、たまには普通の子供と同じく一日遊べる日もあります。

二人が好きな遊びは、ブランコ。

パッセルベルの子供達の好きな遊びは色々あります。

女の子は花摘みやままごと遊び、男の子は魚釣りや竹とんぼ、剣士ごっこ。

でも、子供達みんなが一番好きなのは、ブランコです。

その4 キッパとルウ（2）

ブランコは南の大枝の反対側、北側の若い枝に作られていますが、地面からは何と5メートル以上。落ちたら大変です。

でも大丈夫。下はマーフの泉なので誰も怪我なんかしません。ただ、晚秋から初春までは寒くて、泉の水が冷たく落ちると死んでしまう危険があるため、ブランコは取り外されています。

冬もやれたらいいのに、と子供達は言いますが、大人達は絶対に許可してはくれません。

久し振りに遊べる時間が出来たキッパとルウは、ブランコが無いのは分かっていますが、

北の若い枝付近に行つてみました。

と、そこに何と、誰かが掛けたブランコが残っています。

「このブランコ、村長の家の物置きにしまつてあるはずだよな？誰が持つて来たんだ？」

「……今つて、やつちやいけないんだよね。兄ちゃん」

ルウは、さも乗りたそうな顔でブランコを見上げて言いました。

「うん……」

キッパも、乗りたいのを我慢してブランコを見上げます。

「でも、誰かが掛けて、乗つたんだよね？」

「兄ちゃん」と、ルウが、キッパの服の袖を引っ張りました。弟だけでも乗せてやりたい。ふと、キッパは思いました。泉の水は冷たいけれど、落ちなければ大丈夫じゃないのか？うんと勢い良く漕がなければ、危険じゃないかもしれない。そうだ、少し揺らすだけなら。

それに、今は喧嘩相手の木ねずみ兄弟も居ません。

両親のこともあります、ちょっとひねっていて態度の大きいキッパを、

リック達は嫌つていつ
も喧嘩を仕掛けます。

でもキッパの方が大きいので、殴り合いになるとどうしてもリック
達は負けます。

だから、キッパの嫌な事をたくさん言つて、遊び場から追い出そ
うとするのです。

それに他の子供達も、貧しくていつも同じ格好をしているキッパ
達をあまり好きではありませんでした。

自分達を嫌いな村の子達も、今ならブランコには近付かない。
そう考えて、キッパはルウに言いました。

「ちょっとだけ、乗るつか？」

「え？ いいの？」

「大きく揺らさなければ、きっと大丈夫だ」

「うんっ！」

兄の言つ事を素直に信じて、ルウは嬉しそうにブランコに飛び乗
りました。

「すこーしすつ漕いで、あまり揺れが大きくならないようこ。

「ルウ、楽しい？」

「うんっ！」

ぶらあんぶらあんと揺れるブランコの木の腰掛けの上に立つて、
ルウは笑顔でキッパに

答えました。

「兄ちゃんも乗るつよつ！」

「うん、そうだな」

兄と二人乗りしようと、ルウが少し揺れる幅を小さくしようと
した時。

「あーっ！ ブランコ乗つてるつ、いけないんだつ！」

魚釣りを止めて上へ上がりて来たリック達三兄弟が、彼等を見付
けて言いました。

「長老さまや大人の人達が、あつたかくなるまで危ないからダメって言つてるのにっ！」

「何でブラン口乗つてるんだよつ！」

「ぶうぶう怒る木ねずみ達に、キッパは後ろ頭の毛を逆立てて言い返します。

「つるせえなつ！ 僕ら乗りたいから乗つてるんだつ、つべこべ言うなつ！」

「なんだとつ！ 約束破りのくせして威張るなつ！」

リックが大きなキッパを睨み上げ、キッパは小さなリックを睨み下ろします。

どつちも引きません。

「ちびの癖につ、うるせえつてんだつ！」

「嘘つきキッパつ！ 親無しのくせにつ！」

「おまえん家だつて父ちゃんいなじやねえかつ！」

「俺んちの父ちゃんは緑龍平野の港町で働いてんだつ！ ちゃんと年に1回帰つて来るつ。

おまえんちは全然、帰つて来ないじやないかつ！」「

「きつと死んじやつてるんだつ！」

マックが兄を加勢して言つた言葉に、キッパはぎくつとしました。

「な……、何でつ！ 死んでなんかねえよつ！ 僕の父ちゃんは死んでないつ！」

「だつたら何で帰つて来ないんだよつ？」

「やつぱり死んじやつてるんだつ！..」

ニックも離し立てます。

「やーいつ、やつぱり親無しなんだつ！」

「違つて言つてんだろつ！」

キッパは真つ赤になつて怒りました。大きな拳で、リックに殴り掛かります。

すばしこいリックは、それをひよいと避けました。

後ろの若い枝に飛び乗ると、

「嘘つたらキッパツ！ 父ちゃん死んでるのこ生きてる」と嘘付いて
るーー」

その4 キッパとルウ（3）

「嘘つかつ、嘘つかつー！」

「おっ、俺はつ、嘘なんか、ついて、ないつ！」

キッパは泣きそうになりながら、怒鳴りました。

拳を振り回し、子ねずみ達を追い回しました。

小さなマックが、逃げ回りながらぴょん、とブランコの方の綱に飛び乗りました。

その途端。

降りずに様子を見ていたルウがバランスを崩し、あつといつ間にブランコから落ちました。

「きやあつ！」

「ルウつ！」

普通、子猫の妖精は身軽なので、落つても怪我をしたりはないものです。

でもルウは、不意の事だったので安全な体制が取れなかつたのでしょうか。

小さな灰色の身体は、一度下の若い枝にぶつかり、それから泉に落ちました。

キッパは慌てて下へと駆け降りました。

その後を、真っ青になった木ねずみ兄弟が追います。

泉に降りて行くと、下から見ていたマーフが、丁度ルウを抱いて岸へ上げたところでした。

「ルウつ！」

抱き着こうとしたキッパを、マーフが止めます。

「ダメです。どうやら首の骨を折っています。動かしたら危ない

「どうすれば……」

泣きそうな顔でキッパが言つた時。

「おや、こんなところで大勢で、何をしているんだえ？」

薬草を摘んで森から戻つて来たモルガナ婆さんが、子供達に声を掛けました。

キッパは振り向くと、大声で言いました。

「ルウがつ！ ブランコから落ちて……つ！」

「おやおや」

婆さんは持つていた籠の籠をその場に下ろすと、くねくねと泉に近付いて来ました。

マーフにルウの身体を下へ降ろすように囁つと、ゆつぐつと様子をみました。

「ああこりや……。私の仕事じゃないね」

「どうしてつ！ だつてお婆さんは薬師でしょ、うつ？」

モルガナ婆さんの冷たい言い方に、リックが思わず噛み付きました。

「治し方、知らないのつ？」

「バカお言いでないよ、子ねずみが」

婆さんはじりり、ヒリックを睨みました。金色の、縦虹彩の目を見つめて、リックは背中がぞつとして黙りました。

「私は病を治すのが専門だ。こういった怪我は『命の水』が一番早い。長老がお持ちだり

うから、さつと呼んで来た方がいいね」

「ぼ、僕が行くつ」

マックが、ルウを落つことした責任を感じて言いました。
けれどモルガナ婆さんは、

「あんたが走つたつて、遅いよ」

小馬鹿にしたように言つと、婆さんはすつと尻尾を上げました。

モルガナ婆さんの蛇の尻尾の先には、がらがらと音がする殻がついています。

それを、大きく振りました。

途端。耳をつんざくような音がして、子供達は思わず自分の耳を両手で被いました。

「これで、すぐに誰かが来るだろ?」マーフ「はい」

「その子を自宅まで運んでやつとくれ。その方が長老の家から近い。それから子ねずみ共」

リック、ニック、マックはモルガナ婆さんを見ました。

「誰かが来たら、怪我人はニニイの家の子だと言いなさい。いいね?」

三人はこくこくと頷きました。

マーフは泉からふわりと浮き上がると、ルウを抱いたまま木の上まで飛んで行きました。

「ルウつ!」

キッパはマーフを追い掛け、木を駆け上がつて行きます。

「やれやれ、厄介な事に巻き込まれちましたね」

モルガナ婆さんは文句を言いつつ、置いた籠を手に取ると、キッパを追うようにくねくねと木を昇つて行きました。

マーフはキッパ達の家に着くと、ニニイの世話をしに来て二二イミに事情を話し急いでベッドヘルウを寝かせました。

「二二イに言った方がいいわね」
ニニイがそう言つて子供部屋を出て行つとした時。

二二イが部屋の扉を開けました。

「何があつたの?」

体調がすぐれず寝ていた二二イでしたが、ただ事ではない気配を察して起きてきたので

その4 キッパとルウ（4）

「二二一イ、落ち着いて聞いてね。ルウが……」
ミイミがみなまで言い終わる前に、二二一イはベッドでぐつたりしている我が子を見付けてしましました。

「ルウつ、ルウつ！ 一体どうしたのつ？」

二二一イは半狂乱になつてベッドに駆け寄るつとします。それを優しく押さえて、マーフは言いました。

「すぐに長老さまが来て下さります。『命の水』があれば、大丈夫です」

「助かるのつ？ 助かるわよねつ？」

「はい」とマーフが言った時。

ドアが開いて、長老と村の人達がやつてきました。

二二一イは入つて来た長老に縋つて泣きました。

「ああ、どうかこの子を助けて下さいつ！ お願ひしますつ！」

「うむ、分かつてあるよ」

長老は二二一イの肩をぽんぽんと叩くと、ルウの寝ているベッドへと向かいました。

そして、上着のポケットに入れた小瓶を取り出し、一滴、一滴、ルウの額に振り掛けます。

と。

それまで真っ青だつたルウの顔色が、みるみるバラ色に変わりました。

長老は顔色の良くなつたルウの頬に手を当てて、ふむ、と唸りました。

「怪我は、もう大丈夫じゃ。じゃが??」

「ルウつー！」

長老が先を話さうとした時、キッパが部屋の中に飛び込んで来ました。

ベッドに駆け寄ると、弟を覗き込みます。

「母さんつ、ルウはつ？」

「大丈夫よ、でも今長老さまが……」

キッパは、傍らの長老を睨み上げました。

「ルウは、もう大丈夫なんですねつ？」

「うむ。怪我は今、『命の水』で治したがの。ただ……」

「ただ？」

「落ちたショックじやうつ。眠り病になつたよハジヤ」

「眠り、病」

それは、子供の妖精にたまに起つる病氣です。何か強いショックを受けた時、びっくり

した魂が身体の奥に小さく丸まつて引っ込んでしまい、そのために身体が起きなくなつてしまします。

ルウは、普通猫の妖精なら高いところから落ちても大丈夫なのですが、自分が予期しながら

い格好で、しかも予想外の場所に枝があつてそれにぶつかつてしまつたので、魂がびっくりしてしまつたようです。

眠り病と聞いて、ニニイはふらふらとルウのベッドへと寄りました。

まるで幽霊のような様子で、ぱつぱつと息子を見下ろしています。

「ニニイ」心配したミマミが、彼女の寝巻きの肩にそつとカーディガンを掛けました。

「もう、用覚めないの？」

「ニニイは呴きました。

「ルウはもう、治らないの？……治す方法は無いんですか？」

一変して、ニニイはきつと長老を睨みました。

「長老さまっ！ 教えて下さいっ！ ルウが助かるなら私、どんなことでも致しますっ！」

「一一一イツ」

「母ちゃんっ、無茶だよっ。母さんだって病気じやないかっ！」

「そうよ一一一イ。無茶をしたらいけないわっ。まずあなたが病気を治さなければ」

「そんなんっ！ でもルウがっ！」

「助かる方法はあるよ？」

嗄れた声が、その時玄関の方から聞こえて来ました。

中には入らず玄関から様子を窺つていた村人達を押し分け入つて来たのは、モルガナ

婆さんでした。

婆さんは、驚いて見ているキッパ達をひと渡り見回すと、ビックリしょ、と手近の椅子に腰掛けました。

「眠り病は、身体の芯に魂が引っ込んでしまう病気だ。だから呼び戻してやれば治るのさ！」

「呼び戻し……」

一一一イが呟きます。

それを聞いた長老が、はつとして一一一イを見ました。

「いかんよ、一一一イ。その身体で『呼び戻し』の術など、無茶すぎるぞい」

それを聞いて、ミィミもはっとしました。

「ダメよ一一一イっ！ あの術は大変に体力を使うわ。今のあなたには無理よっ！」

「……でも、それしか無いのなら……」

一一一イは決心した表情でルウを見下ろします。
その肩を、マーフが掴みました。

その4 キッパとルウ（5）

「いけません。みなさんが心配しているの」
「やらせておやり」

モルガナ婆さんが言いました。

「いいんだよ、やらせておやり。それが、二二イへのはなむけってもんだ」

「どうしてそんなことをつー！」

ミヤミはきつ、とモルガナ婆さんを睨みました。

「はなむけなんてつ。まるで二二イが今にも……」

「あたしはねえ、二二イの主治医として言つてるんだ。この人はもう長くない。自分でも

知つてるんだよ」

キッパは驚いて母親を見上げます。

二二イは長男の顔を、微笑んで見返し頷きました。

「母ちゃん……つー！」

「……ごめんね、キッパ。お母さん、おまえ達に何にもしてやれなかつた。でも……。だ

からせめて、ルウだけは……」

「母さんつー！ 嫌だよつー！ 死んじゃ 嫌だつー！」

「そうよ二二イつー！ いくら魔の毒に冒されていても、まだ二二イが死ぬなんて……つー！」

「魔の毒つて？」

キッパは、不安そうにミヤミに聞き返しました。

ミヤミは、しまつたという表情でキッパを見、それから長老を見ました。

「……魔の毒とは、魔王の武器全てに塗られておつた毒じや。9年

前このパッセルベルを

襲つた一つ目の巨人が持つっていた槍が、魔王から貰つたものだつた

のじゃ」

「あなたの父さんが、その時の戦いで死んだつていう話を、前に聞かせたね？」

モルガナ婆さんがいました。

キッパは黙つて頷きました。その事で、キッパはずつと悩んでいたのですから。

「一つ目の巨人と戦つた若者達の中に、実はニニイも居たんだ。魔法で随分勇敢に戦つてたんだが、ひよいとした拍子に、槍の先で肩を突かれてしまった。それで転んだ所へ、更に巨人が襲つて来てね。その時、ニニイを身を壓して庇つたのが、旦那のキールだつた。

キールは巨人とニニイの間に飛び込んだ。それで、槍がキールの腹に刺さつてしまつたんだ」

「そんな……」

聞いてくるうちに涙が溢れてきたキッパは、首を振つて下を向きました。

その肩に、ニニイがそつと手を置きます。

「父さんは、立派な戦士だつたの。母さんがあの時、油断さえしなければ……。ごめんね、

キッパ」

「母さん……」

そんなことない、と言い掛けた言葉は、でも涙に詰まつて出て来ません。

ニニイはもう一度息子に優しい目で頷くと、ルウのベッドへふらふらと寄りました。

「父さんの最後の言葉はね、キッパとルウを頼む、だつたの。だから、私は、命に替えても、ルウを助ける

一一イは静かに跪くと、両手の指を組んで祈るよつて皿を開きました。

と、一一イの身体から真っ白な光が溢れ出しました。光はきらきら輝きながら、ルウの方へと流れて行きます。

見る間に、一一イの光がルウを包みました。

「母さんっ！」

キッパが一一イの方へ行いつと身を乗り出します。それを、マーフがはつしと抱き止めました。

きらきら輝く光は、やがてすうつと消えて行きました。
その途端。

一一イがばたりと床に倒れました。

「一一イっ！」

「母さんっ！」

キッパとミヤミ、それに長老が側に寄りました。長老が、一一イの身体を静かに抱き上げました。

「命を、使い切つてしまつた。」

キッパは呆然と一一イを見ました。ミヤミは、泣き出しました。
その時。

「うーん……」

ベッドで、ルウが唸りました。キッパは弾かれたように弟の顔を見ました。

ルウは、うつすら目を開けると、兄をぼんやり見上げて言いました。

「兄ちゃん？」

ルウは、母の最後の命を受け取つて、目を覚ましたのでした。

そのいきさつをハナハナが聞いたのは、ミイミが帰つて来てからでした。

ミイミが手伝いに出ていたので、ハナハナはその日は一日モモ達のお守でした。

「そつか。大変だつたね、キッパ」

夕食の片付けを手伝いながら、ハナハナはちょっと涙ぐみました。

「そうね……。それで、明日はニニイのお葬式なのよ。ハナハナもお手伝いに行ってね」

ミイミに言われ、ハナハナは「うん」と大きく頷きました。

その4 キッパトルウ（6）

翌日、一一イのお葬式が村の人の手で行われました。

お葬式、と言つても、妖精にはお墓はありません。何故なら、妖精達は死ぬと一時間も

しないうちに身体は光になつて消えてしまうからです。

妖精達にとつてお葬式は、身体から離れた魂を慰めるための儀式でした。

一一イが使つていたベッドを祭壇にして、たくさんの春の花を飾りました。

もちろん、花を摘んで来たのは村の女の子達です。

男の子達は大人と一緒に、家具を動かして大勢の人が入れるようになりました。

ミイミ達奥さんは、家から持ち寄つた食べ物で、祭壇のお供えと、みんなが少しずつ食べる料理を作りました。

普通は祭壇に、生前その人が大事にしていたものなどを飾るのですが、今回、旅芸一座のトーベルさんが特別に一一イの似顔絵を描いてくれました。

器用なトーベルさんは、キッパトルウの話だけで、一一イにそつくりな似顔絵を描いてくれました。

それをボツヘさんが急いでしらえした額縁に入れ、祭壇に飾りました。額の周りにはトネリコの白い花をたくさん飾りました。

「一一イは、トネリコの花が昔からよく似合つたわ」

ミイミが、似顔絵のちょっと笑つた感じの一一イを見ながら、また涙ぐみました。

お葬式も終わり掛けた午後。

帰ろうとしたトーベルさんをキッパが呼び止めました。

「あのっ」

「何だい？」

「俺達を、旅芸の一座に入れて下せ」
いきなり言い出したキッパに、トーベルさんはもじりん、長老も、
ハナハナ達も驚きました。

「どうしてまた？」トーベルさんは、キッパの皿の皿をにじやがん
で訊きました。

「俺達、母さんが死んじゃったんで、もう他に身寄りがありません。
もうここにも居られないし……。だから、旅芸の一座に入つて、色々なところに行
つてみたいんです」

「なるほどね」

トーベルさんはにっこり笑いました。

「でも、一座の仕事は大変だよ？ 入つたら毎日、水汲みと掃除だ
よ？ それもテント全部

「それでもいいです」

今度はルウが言いました。

「今までだつて、モルガナさんとの手伝いとか、大変な仕事一杯
しました」

「おやおや」

傍で聞いていたモルガナ婆さんが、心外という表情で言いました。

「あたしんとこの仕事の、何処が大変だつたって言うのかえ？ あ
んなに優しい仕事ばかりさせてやつたのに」

「そつかねえ？ モルガナ婆さん的人使いは、俺らでも有名だぜ？」
言つたのは、ボツヘさんの同僚の大工の若いシマリスの妖精でした。

彼の言葉に、周囲の人達も「そだそだ」と離します。

モルガナ婆さんは「バカお言い不得よ」と眉を釣り上げましたが、その声は酷く優しいものでした。

みんなのやり取りを見ていたトーベルさんは、あははと笑いました。

「それはさておき、キッパ、ルウ、本当に一座で働きたいんだね？」

念を押されて、兄弟は「はいっ」と大声で返事をしました。
「ふうむ、決心は固いようだね。??どうです？ 長老殿。本当に私がこの子達を預かってもよろしいか？」

長老は「ふむ」と唸ると、モルガナ婆さんを見ました。
すると婆さんは、これまで見た事がない優しい顔で笑いました。
「いいんじやないのかえ？ 確かに、猫の妖精はパッセルベルに居た方がいいに決まつて

いるけれど、この子達はまだ若いのだし。旅させるのもひとつ勉強だよ。何より伯爵が

連れて行きなさるんなら、安心だしねえ」

「……そうじやな。ふむ。??といふ事で、伯爵、すまんが二人をお預かり下され」

「分かりました。では責任を持つて引き受けましょう」

キッパとルウは、旅芸一座に入れると聞いて、ぱあっと顔を輝かせました。

「よかつたね」

ハナハナはキッパにお茶を持って行つて、言いました。
「でも、キッパ達がいなくなると、寂しくなっちゃうね」
「……ハナハナは、俺らによくしてくれたし。ありがとうなううん、とハナハナは首を振りました。

「友達なら、当然よ」

キッパは照れたように笑いました。ハナハナも微笑みました。

そして、春の終わりに。

旅芸一座は次の街に移動することになり、興行を終えました。
ハナハナと子ねずみ三兄弟は、一座が行ってしまう前にと思って
急いで南の大枝へ降り
てきました。

その4 キッパとルウ（7）

大枝の上では、すっかりテントが片付けられていきました。玉乗りの玉も空中ブランコの大道具も、みんな大きな荷馬車の中に収められて、何にもありません。

少し前から今まで住んでいた家を引き払ってテントに移っていたキッパとルウも、もうすっかり荷造りして旅支度を整えていました。

トーベルさんが長老に挨拶に行つているといふことで、一座の人達は荷物番をしながら

帰りを待つていました。そこへ、ハナハナ達は行きました。

「キッパ」

荷馬車の後ろに居たキッパとルウを見付けて、ハナハナが声を掛けました。

「よお

「いよいよ、出発だね」

「ああ。??なんだ、小ちびねずみみつも一緒によ」

ハナハナの後から来たリック達兄弟を見付けて、キッパはいつも

の調子で悪口を言いま

した。

「なんだとつ！ でぐのぼーバカ猫つ！」

「言つたなつ！」

「もうつ、キッパもリックも喧嘩しないのつ。リック、そんなことで来たんじやないでし

よ？」

ハナハナが止めると、リックはふて腐れた顔で「うん」と頷きました。

「キッパ、弟のマックがおまえとルウに謝りたいって

言つと、リックは一番後ろに隠れるように立つてゐる末っ子を見ました。

マックは兄に見られて、もじもじと後ずさりしました。それを、2番目のニックが腕を掴んで前へ押しやります。

「ほり、ちゃんと自分で言え」

「ウル」、
「ウル」

た。そして、

「おめでたる事」

「あの時……、僕がルウをブランコから落とすなかつたら、二二一

から、絶対キツパトル

うに謝らなくちゃって、僕……」

ぐすぐすと鼻を鳴らし始めた子ねずみの肩に、ハト

手を置きました。

「？？ああ

ギッパはがりがりと頭を撞きました。

物と戦つた時に毒が身

体に入つて、もう助からなかつたんだ。だから、おまえのせいじゃ

ヘリテージ、セラピ、セラピ

「キッパ」

ハナハナには、キッパが精一杯悲しいのを堪えてしゃべっている

のが分かりました。

ハナハナは、思わずキッパの手を握りました。

「キッパって、大人だね」

「よせやい」

キッパはちょっと赤くなりました。

「他所の街へ行つても、元氣でね」

「おう」

じゃあな、と、キッパがルウを促して、荷物番に戻らうとしました。

「おい、キッパ」

リックが呼び止めました。

「なんだよ、まだ喧嘩してえのか？」

「ちげーよつ。 ??これ」

リックは、だぶだぶの胸当て付きズボンのポケットから小さな木彫りを出しました。

それは、猫の妖精の人形でした。よく見ると、ビニとなくニニイに似ています。

「これ……？」

「トーベルさんに習つて彫つた。おまえにやる」

キッパはリックの手から人形を受け取ると、じっと見詰めました。そして不意に後ろを向くと、片手で顔を「じーじー」と擦りました。

「兄ちゃん……」

ルウが、ぐすつ、と鼻を啜りました。

キッパはうん、と頷くと、くるりとリックに向き直りました。

「有り難く、貰つといてやるよ」

強がつて言つた目が真つ赤だったのを、ハナハナは見ました。

「今度こそじやあな」

そう言つと、キッパはルウの手を取つて、荷馬車の方へ戻つて行きました。

「行こう」

リックはハナハナと弟達にそう言つて、歩き出しました。でも、

南の大枝の根元まで来た時、リックはふと足を止めて振り返りました。

「キッパつ！」

リックが大声で呼ぶと、キッパとルウが荷馬車の陰から出て来ました。

「もう一度とパツセルベル戻つて来んなつ！」

「うるせえつ！ だーれがバカねずみの居る村なんかに戻つて来るかつ！」

「もうつ、二人ともつ！」

ハナハナは怒りました。でもキッパとリックには聞こえていません。

普段の喧嘩の時のように、お互に「べーつ」と舌を出しましたが、キッパもリックも、

すぐに手を上げて振り合いました。

「たまには、手紙寄せよつ！」

「おまえもつ、返事出せよつ！」

キッパは再び馬車の陰に隠れました。リックはゆっくり手を下ろすと、ほつと大きく息をつきました。

「さあ、帰ろう」

弟達の背中を叩き、ハナハナにっこり笑い掛けました。

ハナハナは家に帰つてその話をミヤミにしました。

「ほんと、男の子つてわかんない」

ハナハナはぷつと膨れて言いました。

「だつて、友達と離れるのが悲しいならそう言えばいいのに。なんで素直に言えないの？」

ミヤミはつふふと笑いました。

「やうねえ。……そつぱればティーグにもそんな喧嘩仲間が居たわ。
ステインキーって言

う、イタチの妖精の子だつた」

ミヤミは、さやえんどうの筋を剥きながら、懐かしそうに言つて
した。

「へええ。イタチの妖精つて、珍しいね？」

「ええ。緑龍渓谷には少ないわね。ステインキーも一歳くらいま
でパッセルベルにお父さ
んと住んでいて、で、お父さんのお仕事の都合で遠い街へ行つてし
まつたのよ」

「ふうん。でやつぱりティーグもリックとキッパみたいな事したの
？」

「やつてたわよ

ミヤミはまたくすつと笑いました。

「やつぱり派手に『ベーツ』って叫んで。でもほんとに別れる時
にはお互い抱き合つて

泣いてたの

「ふうん」

ハナハナも、さやえんどうの筋剥きを始めました。

「やつぱり、男の子つてわかんない」

口を尖らせたハナハナに、ミヤミは「そうね」と微笑みました。

その4 キッパトルウ（7）（後書き）

その4 キッパトルウは、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は、ちょっと息抜き。

パツセルベル村の、ご近所案内です。
いろんな村人（村妖精？）がいます。

その5 ハトセトラー（一）（前書き）

ここでちょっと、ひと休み。

パッセルベルの住人の一部を、ご紹介します。

パツセルベルの村は全部で27丁目まで。

1丁目はトネリコの梢に近い枝で、そこは長老の家だけがありま
す。代々の長老が住ん

ていた家は現在改築中近く完成予定です

——ヤの父サウル

は長老の息子で村長さん。でもみんなが何かと長老を頼つてしまつ
ので、自分は存在感が
薄いと、日々嘆いています。

——やの姫をマト——やは
サウルとはお見合い結婚です

何人は何とトロヘ川

ました。

赤龍山脈の村では、マラーーニャの一家しかもつ猫の妖精は居なくなつてしまつていて、

た。

そのせいで、二二一やは母方の祖父母には一度しか会った事がありません。

手紙のやり取りは頻繁にしています。
でも綺麗な絵葉書が来たり

「ううと、一處おし

ハナハナの家は4丁目。ここには、他に3軒あります。



オットーさんはあなたがまの妖精で、鍛冶屋さん。仕事場はもつと下の枝で、こっちは自宅です。奥さんのネルさんとの間には子供がいません。

そのせいが、ハナハナやミィミーの一人の子供達、モモとフレイをとっても可愛がってくれます。

もう一軒はネービルさんといつ、おばあさんの猫の妖精が一人で暮らしています。

ネービルさんは足が悪いので、時々ミィミーや他の奥さん達が家事のお手伝いに行っています。

ネービルさんは近所の奥さん達が来るとたいそう喜んで、「行く度に、お茶をじちそうしてくれます。そのせいで、ネービルさんの家は奥さん達のちょっとしたサロンになっています。

＼＼＼＼＼

パッセルベルの子供達は、週に一、二回村長の家に勉強に行きます。教わるのは、主に

読み書きと算数です。

特に算数は、将来人間の住む街で働くのを希望している子供にはとっても重要です。

これが出来なければ、お給料がちゃんと貰えませんから。子供達を教えるのは、村長のサウルとふくろうの妖精のアルベルトさんです。

アルベルトさんはふくろうの妖精としてはまだ若い三十三歳です。でも頭が凄く良くて、

人間の学校へ入り先生の資格まで取りました。

優しくて、教え方も上手です。子供達は『若先生』と呼んで、親しんでいます。

子供達が勉強を教わる曜日は、その子の家の都合もあるのでもちまちです。

教室は月曜日から土曜日まで、毎日午前九時から十一時半までやつていて、子供達は都合のついた日にやつて来ます。

アルベルトさんも村長も、読み書きも算数もどちらも教えられますが、どちらかというと子供達は、若先生に算数を教わる方が、優しいので好きです。

いえ、村長が優しく無い、というのではないのですが……

＼＼＼＼＼

その5 ハトセアリマー(2)

リック、ニック、マックの三兄弟のお父さんは、緑龍山脈からずつと南のベラスという港町で働いています。

船乗りで、港の中で大きな船から荷物を受け取って港まで運搬する仕事をしています。

人間の街であるベラスでは、妖精達は人間に化けて、自分達の本当の姿を隠します。なので、手紙に時々添えられる絵にも、お父さんは木ねずみではなく人間の格好で描かれています。

その他、街や海の風景の絵も入つていています。

今回入っていたのは、細長い塔に大きな羽が横に四枚くつついた、不思議な形の建物の絵でした。

「これ、何だと思う?」

リックに絵を見せられて、ハナハナも思わず首を捻つてしましました。

「お家の飾り? にしては、ずいぶんおつきいね」

「これ、動くの?」とマック。

「わあかつたつ!」

ニックが大声で言いました。あまり大きな声だったので、周りのトネリコの若葉がざわざわ動きました。

「物干竿だつ。これ、回しながら洗濯物乾かすんだつ!」

「ちがーうつ」

お兄ちゃんリックが偉そうに胸を反らします。

「これはあ、風車つていうんだ。風の力でこの大きな羽をぐるぐる

回すんだ」

「……それだけ？」

「……うん」

実は、風車は風の力を利用して水を汲んだり穀物を粉に挽いたりするものですが、リックはそこまでは知りませんでした。

ただ回るだけなら面白くないなあ、とハナハナは思いましたが、男の子達は違つたよう

です。

「すっげえっ！ これ回るんだつ！」

「おつきいんだよねえ、こんなのが本当に風で回るの？」

木ねずみの弟達は夢中です。絵に見入つていたマックが、ふと言いました。

「ねえ兄ちゃん、風車作れない？」

「えつ？ 無理だよこんなでつかいもの」

「作れるよ。兄ちゃん器用だから」

「無理だつてつ！」 でもそう言いながら、リックはちょっと作つてみたい気持ちになつて

いました。

そうだ、ボックへの親方に聞けば、作り方が分かるかもしねれない。

今度聞いてみよう、と、リックは心密かに決心しました。

その5 ハトセトラー(2) (後書き)

その5 ハトセトラーは、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

今回登場した住人以外にも、これからもつといろんな妖精たちが
お話に出てきます。

そして。

次は、リックの一大決心、です。
わんぱく小僧のリックですが、お母さんは恐い。
そんなリックが、ある決意をお母さんに打ち明けます。
でも、お母さんは大反対！
さて、リックの決心は実るでしょうか？

お楽しみに。

その6 リックの一大決心（1）

長老の家の改築は順調に進み、秋までには完成の目処がよつやく立ちました。

解体した時は見た目より更に痛みが酷く、どうじょうかと大工のボツヘさん、木こりの

ルーラさん、長老が何度も話し合っていました。
都合三回、ボツヘさんが図面を引き直し、やつとのことでみんなの了解が採れたのは、

春も半ばになつてから。夏の大雨が来る前に、何とか屋根までは作らなければなりません。

図面が決まってから毎日、ボツヘさんは仲間の人達と、朝から晩までノミを振るいました。

た。

そんな忙しいボツヘさんのところにリックが弟子のお願いに行つたのは、喧嘩友達のキッパが村から出て行つて少しした頃でした。

「大工になりたいって？」

ボツヘさんは木を加工する手を止めて、小さな子ねずみをまじまじと見ました。リック

はどきどきしながら、ボツヘさんの次の言葉を待ちました。

「……やつ言や、前に『木ねずみは大工になれるか』って聞いて来たな？」

「……はい」

その時は、仕事と種族は関係ないと、ボツヘさんはリックに教えました。

ただ、郵便屋さんのような空を飛べなければ出来ない仕事は別で

すが。

「僕、本気でなりたいんですつ。ですから、親方のお弟子にして下さいつ！」

リックはもう一度深々と頭を下げました。ボックさんは困つたよううに、ふ～む、と唸りました。

「坊主、幾つになつた？」

「十歳ですつ！」

「ちつと早いねえ」

「早いつて……？」

ボックさんは、作業台の側の椅子代わりにしている切り株に腰を下ろしました。

「普通、弟子にするのは十一歳の誕生日を過ぎたらだ。??父さん母さんの了解は、貰つてゐるのか？」

リックはびきつとしました。まだお母さんに向ひも言つていません。

「……いいえ

「それじゃあ、ダメだな」

よつこらしょ、と、ボックさんは立ち上がりました。

「弟子には取れないよ」

「母さんがいつて言つたら、大丈夫ですかつ？」

リックは必死に聞きました。

「ああ、簡単に返事をすると、ボックさんはリックに背を向けて仕事を再開しました。

「それで、どうしたの？」

洗濯干しを手伝いながら、ハナハナはリックに聞きました。

ボックさんにお願いに行つた翌日。

村長の家で勉強をして來た帰りに、リックはしょんぼりした様子で一人でハナハナの家へ來たのです。

お天氣は上昇、五人分のたくさん洗濯物はトネリゴの枝一杯に干されて、はたはたと風にはためいています。

「ママおばさん」、大工さんになりたいってボツへさんと話した事、言つたの？」

洗濯物の間から顔を出したハナハナに、リックは俯けていた顔をますます俯けて

「うん」と言いました。

「それで？」

「……ダメだつて

「まあ」

「母さんは、父さんが船乗りなのに、なんで俺が大工になるんだつて……」

遠い港町で働いているリック達三兄弟のお父さんを、奥さんのママおばさんはとつても尊敬して感謝しています。

だから、息子達、それも長男のリックには、父親と同じ職についてもらいたいのです。

リックは、ミヤミの家の物干し場の近くの枝に腰掛け、はあ、と大きく溜め息をつきました。

した。

「それに、将来のこと決めるのは、まだ早いつて……」

「そつか……」

「僕、船乗りも好きだけど、大工の方がもつとやつてみたいんだ」ハナハナはモモのシャツをぱんぱんつ、と叩き、ぱつと枝に引っ掛けました。

「ねえ、お母さんに、それちゃんと話してみたひー？」

「言つたよ」リックはきつ、と顔を上げました。

「けど、全然聞いてくれないんだ。絶対ダメだつて、そればっかり」

「私が、話してみましょうか？」

子供達の話を、それまで黙つて聞いていたミイミが言いました。
「リックは、どうしても大工さんになりたいのでしょうか？」
「うん……」

その6 リックの一大決心（2）

リックは、歯切れ悪く頷きました。でも、少しして、思い直した
ようにわざとばかりと言った
ました。

「うん。でも俺、もう一回母さんに自分で話す。それでダメだった
ら、ミィミおばさんには
応援頼みます」

そう、とミィミは笑いました。

ハナハナも「頑張つて」と言いました。

「じゃ、俺早速言つて来るつ！」

リックは勢い良く枝から降りると、自分の家へ向かつて走り出しました。

「上手く話せるといいね」

勢い良く走つて行くリックを見ながら言つたハナハナに、ミィミ
は「そうね」と微笑み
ました。

自分の家の前まで全速力で走つたリックは、玄関の前で止まると
大きく深呼吸しました。

「よしつ」気合を入れて、扉を開けました。

「ただいまっ！」

パツセルベルの住人の家は、たいがい玄関ドアを開けるとすぐ台
所です。板張りの部屋
の真ん中に、これも近くの森の木を使って作つた食卓が置かれています。

リックの家は五人家族なので、食卓も大きめ。その前に、お母さん
のマーマおばさんと、

第一人が座つてこました。

「マー・マおばさんは入つて來たリックを振り返つて、あひ、と眉毛を逆立てました。

「ただいまじやないでしょ。もつお腹ですよ。何処に行つてたの？」

「あ……」怒られて、リックは慌てて台所の柱に掛かっている時計を見ました。針は、十

一時少し前です。

「村長さんのところの勉強が終わつて、まつすぐ帰つて來ると思つたら。第一人に道具を持たせて、何処かへ一人で遊びに行つてしまつなんて。母さんは、そんな無責任な子におまえを育てた覚えはあつませんっ」

「……ごめんなさい」

走つて來た勢いは何処へやら、リックはまじょぽんとして謝りました。

「マー・マおばさんは溜め息をつくと、「とにかく、お腹にします。お座りなさい」

リックは、手を洗つて自分の席に座りました。

待たされていた弟達が、ちらつと兄の顔を見ます。

マー・マおばさんは、食卓にお皿のメニューを並べながらリックに

聞きました。

「で、何処へ行つていたの？」

「……ハナハナのところへ

「何で？」

「ボッヘおじさん弟子になりたって話をしに」

「リックおばさんは、オートミールをよそう手を止めました。

「その話なら、この間したわよね？ 母さんは反対だって」

「……どうして？」リックは、俯いたまま聞き返しました。

「どうして……。この間も言つたでしょ、母さんは、リックに

はなるべくなら父さん

の跡を継いで船乗りになつてもいいたいつて。それより、おまえはまだ十歳だし、将来の

事を決めるのは早いつて

「それは、分かつてゐるけど……」

リックはもじもじ言いました。

「分かつてゐななら、」の話はお終い。もじもよつと先になつたら、父さんとも話して港で

船乗りの勉強をしなければならなこなび、おまえはまだ十歳だし、

今はまだ考えなくとも

いいでしょう

決めるのは早いと言ひながら、マーマがおもてさせ、将来何としろもリックを船乗りにする積もりです。

「……どうしても、船乗りじやなきやうけないの？」

リックは食い下がりました。今抵抗しなければ、どんな母の言いなりになつてしまひます。

「僕は、どうしても大工になりたいつ。船乗りはやだつ

「リックつー」マーマおばさんは、怒つてばんつ、と机を叩きました。

リックとマックがびつくりして、つまみ食いしていいた手を引っ込めました。

「おまえはつ、父さんの仕事が嫌だつて言つのつ？ 父さんは、遠い港でおまえ達を大き

くするために一生懸命働いてらつしゃるのよつ。それを……

「父さんを嫌だつて言つてゐる說じや無いよつー」

リックは立ち上がりました。

「父さんが船乗りで働いているのは、大好きだし尊敬してゐる。でも、僕がなりたいのは船

乗りじやないつ。僕は、家やものを作つたりする仕事がしたいんだ
つ

「おまえは長男でしょ？ 長男は父親の仕事を継ぐのですつ
「何でだよつ！ 僕には船乗りなんて、きっと無理だよつ！..」

「リックつ！」

「船乗りには僕がなるよ

不意に、ニックが一人の話に割つて入りました。

その6 リックの大決心（3）

「ねえ母さん、何で長男じやなきや父さんの仕事を継げないの？
僕、船乗りになりたい。

僕じゃだめなの？」

「ママおばさんもリックも、びっくりしてリックの顔を見ました。
「だつて、ニシク…」

「無理して言つてゐな、止めろよ？」

「無理じやねえよ」ニシクはふて腐れたように言いました。

「だつて、父さんも母さんも、兄ちゃんばっかりにそんな話して…
…。僕やマックには何

にも聞かないじやないか。僕は船乗りになりたい。父さんと一緒に
仕事したい。ずっと、

そう思つてた」

ママおばさんは、言葉がありません。

リックはじつと、ひとつ違いの弟を見ました。

と、一番下のマックが言いました。

「リック兄ちゃんは器用だもん。釣り竿とか竹とんぼとか、みんな
作ってくれるし。作る

の好きなんだから大工さんに向いてるよ？ ねえ、母さん」

ママおばさんは、詰めていた息をはあ、と吐き出しました。

「……分かったわ。今度父さんに手紙で話してみます。ただし、父
さんの返事が来るまで

は、ボックくんくお弟子にして下せ、とここのお預けです
「やつたつー」リックはぱっと顔を明るくしました。

びつしてもやつたこと言えれば、子供想いの父はダメとはこゝませ
ん。

「これで、ボックくんがいと言えれば晴れて大工見習いです。

「ありがと、母さん」

リックはつわづわと笑って、椅子に座り直しました。

「お礼なら、ニックに言いなさい。ほんと、あんた達はお兄ちゃん想いね」

ママおばさん、一人の小さな息子にこり笑いました。ニックとマックは顔を見合わせて笑い、そしてリックを見ました。

「ありがとな」

「頑張つてね、兄ちゃん」

「さあさあ、本当にお皿にしました。リック、みんなの分のスプ

ーンを取つて」

リックは「はい」と立ち上がり、流し台の引き出しからスプーンを出しました。

「あ、僕も手伝つ

ニックは椅子から飛び下りて、母の手からサラダボールを受け取り配ります。

「じゃ僕もつ

マックも椅子から降りハムの皿を取りました。

「まあまあ、今日はみんないい子だこと」

ママおばさんは、いつもはお手伝いなど何処吹く風の息子達の孝行振りに大仰に驚き、

三兄弟は盛大に吹き出しました。

父さんの返事を待つように言われましたが、リックは結局我慢出来ませんでした。

翌日には、ボックさんの仕事場にすつ飛んで行って、母の許可が採れたと言いました。

ですが。

「でもなあ、君はまだ十歳だからなあ」

泣い顔のボックさんに、リックは言いました。

「でも親方、この間、母さんの許可を貰つたら、お弟子にしてくれるつて言いましたつ」

「ああ、確かに言つたけどな……」

ボツヘさんにしてみれば、リックが粘つてこんなに早く親の許可を取り付けるとは、思つてもみなかつたのです。

「前にも言つたが、弟子はたいがい、十一歳からだ。あと一年、我慢出来ないか？」

リックはむつ、と膨れました。

だつて、親方はこの間、確かに母さんの許可を取ればいいって、言つてたじやないか。

心の中で文句を言つて、でもリックは辛抱強く聞き返しました。

「……じゃあ、一年経つたら、絶対お弟子にしてれますかつ？」

さつ、と睨み上げた小さな木ねずみを、ボツヘさんはじつと見返しました。

リックは、何故か「」で田を反らしたらお終いな気がして、ボツヘさんの田を見据えました。

した。

睨み合つて、数秒。ボツヘさんはふつと、微笑みました。

「分かつたよ。けじな、おまえはまだ十歳だ。これから先もしかしたら、大工よりもつと

やりたい仕事が出て来るかもしけん。だから、今は本格的な弟子にはせん」

「え？ じゃあ……？」

やつぱりダメなのかと、リックは顔を歪ませました。今にも泣きそうな子ねずみに、ボツヘさんは思わず吹き出しました。

その6 リックの大決心（4）

「違う。ダメとは言つたらんよ。ただ、そうだな、今のところは見習いの見習いって事だ」

「本当ですか？」

リックは、嬉しいよりもびっくりして、目を見張つて聞き返しました。

ボックさんは大きく頷いて、言いました。

「ああ。とにかく、決まりもあるから十一歳までは本格的な見習いには出来ん。何より坊

主の身体がまだ小さ過ぎるしな。でも、簡単な手伝いならやらせられるから、そうだな、

週に一、二回、ここへ来て手伝いなさい」

「はいっ！」 ありがとうござります、と、リックは大声でお礼を言つて、深く頭を下げました。

もう嬉しくて、仕方ありません。リックはボックさんの仕事場を後にするとき、一目散に家へ飛んで帰りました。

「母さんっ！ 親方が弟子してくれたよっ！」

玄関を開けるなり、約束を破つて頼みに行つた事も忘れて、リックは大声で言いました。

丁度居間で縫い物をしていたマーマおばさんは、息子の声に驚いて食堂へと出て来ました。

「まあ、おまえ、父さんの返事の前に頼みに行つてはいけないつていつたのにっ」

「あ……」 その時になつて、リックは漸く約束を破つた事を思い出しました。

「『めんなさい』……」

急にしゅんとなつたリックに、マーマおばさんは言いました。
「しょうがないわね。でも、ボッくさんはいっておつしゃつたの
ね？」

「……うそ。でも、十一歳までは正式に見習いには出来ないって。
簡単な手伝いならさせ

られるから、週一、一回仕事場において……」

マーマおばさんは、それを聞いてボッく親方の優しい配慮を改
て感じました。更に、

それでも大工になりたいといつ息子の強い気持ちも、改めて認識し
ました。

「……分かりました。おやりなさい。その代わり、母さんの反対を
押し切つてやるのだか

ら、途中で止めるなんて許しませんよ。分かったわね？」

リックは顔を輝かせて、大きく「うんっ！」と頷きました。

「ありがとう、母さんっ」

「父さんには、母さんから言つておきます」

リックはもう一度お母さんに「ありがとう」と言いました。

と、居間で一人の話を聞いていた弟達が、食堂に飛び出して来ま
した。

「よかつたね、兄ちゃんっ！」

「おめでとうっ！」

マックがリックに飛びきました。リックは小さな弟の身体をぎ
ゅっと抱いて、

「ありがとう」と、強く言いました。

「でもこれからだ。僕、絶対一人前の大工になるっ。頑張るよ」

「うんっ」

「応援してつから、兄貴」

一番田のリックに初めて『兄貴』と呼ばれて、リックはちょっと
照れくさそうに笑いま

した。

「じゃあ、決まつたんだ?」

村長の家からの帰り道。

ちょっと寄り道した三丁目の小枝の腰掛けのところで、ハナハナはリックから大工見習いの許可が降りた話を聞きました。

「うんっ。だから今週からもう、手伝いに行くんだ」
すっかり濃くなつたトネリコの若葉が、晚春の風にさわさわとそよぐ中、リックは得意満面に胸を張りました。

ハナハナは、座つてもまだ自分より頭半分ちびのリックを見下ろしながら、にっこり笑いました。

「おめでとう。これから大変かもしれないけど、頑張ってね」

「おうっ。僕は絶対大工になるつ。キッパになんか負けねえんだつ」
その言葉で、ハナハナはどつしてリックが大工という『仕事』にこだわつたのか、漸く解りました。

リックは、喧嘩仲間のキッパに、負けたく無かつたのです。

キッパは旅芸一座の一員として、この村を出て行きました。一員となつた、ということ

は、キッパは『仕事』をするために一座に加わつたという事です。

そう言えば別れる時には既に、軽い荷物の運搬や荷造りを任せられて、弟のルウと共に忙しくテントの外で働いていました。

もつとも、キッパとルウはお母さんの眞合がずっと悪かつたのでそれ以前から働いては

いましたが、リックが『仕事』を意識したのは、多分キッパが旅芸

一座に入つてからでし
ょう。

荷造りをしているキッパの姿を見て、リックは働くといつ行為を
初めて自分の事として
考えたのです。

嬉しそうに話すリックを見ながら、ふと、ハナハナは考えました。

自分は、将来何をしたいのだろう……？

その6 リックの大決心（5）

もちろん、ハナハナは女の子ですから、男の子達のように色々な仕事の選択がある訳ではありません。

それに、ある程度の歳になつたら、お嫁に行かなければならないでしょう。

それまで、というより、それでも、自分に出来る仕事つてあるかしら？

漠然とそんな事を考えていたハナハナに、リックが言いました。

「僕、絶対風車を作るんだっ」

「え……？」唐突に言われて、ハナハナは一瞬、それが何だか解りませんでした。

ぽかんとしたハナハナに、リックが「ほら」と言いました。

「」の間見せたる？ 父さんが手紙と一緒に送つて来た絵

「ああ、あの……」

大きな四枚の羽を横に付けた、不思議な建物。

「あれを、パツセルベルにも作りたいんだっ。仕事を早く覚えて、絶対風車を作るっ」

「でもあれって、大工さんが作るものなの？」

大工さんはお家を作るものだと、ハナハナは思つています。風車は大工さんの仕事ではないのでは。

ハナハナにそう言われて、リックはつーん、と腕組みして唸りました。

「でも、一応建物だし……。建物なら、大工が作るんじゃないのかなあ」

「でも、風で回るのよね？ 回る仕掛けも、大工さんが作るの？」

「…………？」リックは黙つて考え込んでしまいました。

ハナハナも解らなくて、黙りました。

家に帰つて、ハナハナはその話をミィミーにしました。

「そうねえ、どうなかしら?」

食卓に座つてモモの上着を縫いながら、ミィミーは首を傾げました。

「私も、パッセルベルを出た事がないから、風車を見た事が無いわ。だから、誰が作つて

だるのか知らないけど……」

「そつかー。そうだよね。村の人で風車を見た事ある人つて、そんなにいないよね」

「そうね、多分。……ああ、アルベルトさんなら知つてるかも知れないわね」

ハナハナ達の先生、ふくろうの妖精アルベルトさんは、昔人間の街で暮らしていました。

それに、色々な事をとてもよく知つてるので、もしかしたら風車についても知つていい

るかもしれません。

「そうだよねつ、アルベルト先生なら知つてるかもしれない。リックに言つてあげようつ

と

お姉さんありがとう、と言つと、ハナハナは足下に放り出していった鞄を置きに、自分の部屋へと向かいました。

その背へ、ミィミーが言いました。

「もうすぐお昼だから、モモとフレイを呼んで来て

「はあい」

ハナハナは鞄を部屋の入り口に置き、急いで外へと出ました。

お日さまはトネリコの木の真上、風がそよそよ枝と葉っぱを揺らしています。

お昼を食べたらリックに会いに行こうと思ひながら、ハナハナは元氣に裏で遊んでいる

モモと、フレイを呼びに行きました。

その6 リックの一大決心 完

その6 リックの一大決心（5）（後書き）

その6 リックの一大決心は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

この次のお話は、「ウエディング・ドレス」です。

大工の親方ボッシュさんの一人娘、ミントさんの結婚式が、
予定より大幅に繰り上がってしまいました。
ドレスを縫つてあげるマークおばさんは大慌て！
さて、どうなりますか・・・？

お楽しみに！

その7 ウェディング・ドレス(1)

長老の家があと少しで完成といつ頃。

木ねずみ三兄弟のおかあさん、マイマイおばさん、マイマイお母さんと、娘へやつてきました。

午前中の仕事が一通り終わり、マイの家の奥さん達もまつと一息つく時間です。

マイのお手伝いしていたハナハナも、お姉さんと一緒にお茶を飲んでいました。

「どうしましょう、困ったわ」

家へ入つて勧めた椅子に座るなり、マイおばさんは言いました。

「昨日ミントちゃんがウェディング・ドレスを頼みたって家に来たのよ」

パッセルベルでは昔から、先輩主婦が新婦のウェディング・ドレスを縫う習わしこなつています。

結婚する娘さんは、村の中で一番お裁縫の上手な主婦に頼んで、自分のドレスを作つて貰うのです。

マイおばさんはパッセルベルで一番の裁縫上手です。これまでお嫁に行つた女の子達は、みんなマイおばさんにウェディング・ドレスを縫つて貰いました。

「でもねえ、お式の日取りがもつ迫つてゐるのよ」

「何時なの?」

マイおばさんは驚きながら、マイおばさんとお茶とお菓子を出しました。

おばさんはお礼を言つて紅茶のカップを手に取りました。

「それが、長老のお宅が完成したらつてことなの。で、ボツくさん

にさつき聞いたら、お

宅はもう来週には出来上がるつて

「まあ、それは大変」

「完成記念にお式をつて貰つたのは、長老もなんですつて。ボッシュさんもかなり慌てて

たわ」

「そうよねえ。そんなに急じやね」

上手どころのは、作るのが早いところのあります。でもそのマーマおばさんが『時間

が無い』と慌ててつては、よっぽど時間が無いんだな、と、ハナハナは思いました。

溜め息をつく二人を交互に見て、ハナハナも一緒に溜め息をつきました。

「とにかく途方に暮れてしまつて。それで、ミヤミヤに知恵を借りに来たの」

「私に?」ミヤミヤは、綺麗な手をくくると動かしました。

「私の知恵なんて……。そうだわ、ネービルさんに聞いてみましょう。」こういう時は先輩

のお知恵をお借りするのが一番よ

「そうね。ああやつぱつミヤミヤを尋ねてよかつたわ」

「ハナハナ」ミヤミヤは、黙つて大人の話を聞いていた小さな妹に言いました。

「私はこれからネービルさんのところへマークさんと行つて来ます。すぐ帰つて来るけれど、お家の事よろしくね」

「はい!」ハナハナは元気に返事をしました。

二人を窓から見送つて、ハナハナは食卓に戻ると、食器棚の上の時計を見上げました。

時計の針は、ちょうど九時。

おつとつしてくるけれど、おしゃべりが大好きなネービルさんに捕まつたら、多分お昼

まで帰れないかな、と、ハナハナはお茶を飲みながら予想しました。

お昼ご飯の支度を、ミヤミに代わってしておこうかな、と、ハナハナは思いました。

「でも、もう一杯、お茶を飲んでから」

ハナハナは空になつた自分のティー・カップにお茶を注いで、もうちょっとと待つてみよう、と座り直しました。

ミヤミとママおばさんは、ハナハナの予想に反して、お昼前にネービルさんの家から帰つてきました。

戸口で話している一人は、先ほどの心配そうな様子とは変わつて、何やら上機嫌でした。

「それじゃ夕方に」

ママおばさんはそう言つて、こつこつ笑つて帰りました。

「ねえ、どうなつたの？」

気になつて訊いたハナハナに、ミヤミはふわりと笑いました。

「ハナハナ。あなたにもお手伝いしてもらいます。忙しくなるわよ？」

何だか楽しそうなミヤミ、ハナハナもうきつきしてきました。

「はいっ」にこにこと返事をしたハナハナの頭をそつと撫でて、ミヤミはお昼ご飯を作りに台所へと向かいました。

それから、本当に忙しくなりました。

その日の夕食後に、ミヤミとママおばさんが声を掛けた女人達がネービルさんの家に集まり緊急会議になりました。

議題はもちろん、ミントさんのウエディング・ドレス製作です。

今回は時間が無いので、
ちょっと異例ですが、一人の人全部作るのではなく、みんなで協
力して作る事になりました。

そこでネービルさんが勧めたのは、セパレーツ型のドレスでした。
これならみんなが分
けて縫う事が可能です。

ミントさんも呼ばれて、早速採寸しました。

後は布は誰が何処で仕入れるか、誰がどのバーツを縫うか、みん
なで話して決めました。

その結果。

スカートは//マーメイド。ニーイヤとハナハナもお手伝い
します。

その7 ウェディング・ドレス(2)

プラウスベストはネルさん。そしてチューリック風の上着はマーマおばさんに縫つて貰うことになりました。

ベルのレースはネービルさんが担当します。

さて。

翌日には早速、買い出し班が出動しました。布は、パッセルベルでは売つていません。隣村のパッセルトーンの布屋さんまで行きます。

買い出し班はネルさんとマーマおばさん、それにマーマナハナと一緒にヤモツいて行きました。

「久し振りだね。隣村に行くの」

「ねつ」

パッセルトーンまでは約5キロ。ピクニック気分の一人を、ミヤミは諭します。

「お遊びに行くんじゃないのよ? ミントさんの大事なドレスの生地を買うために行くんです」

はあい、と返事する一人を見るミヤミの田も、でもとつても楽しそうです。

トネリコの木からマーフの泉の脇を抜け、谷底への道を歩きます。今は夏の花があちこちに咲いていて、特にコリは、そこそこいい匂いを振りまいています。

ハナハナと一々一々ヤはコリを一輪ずつ摘もつと、大人達の前へ走つて出ました。

「何だねばたばとみつともない。女の子ががさつに走るんじやあないよ」

谷底の、背の高い草の陰からいきなり声がして、一人はびっくりして足を止めました。

ひょいと現れたのは、薬草採りに来ていた、モルガナ婆さんでした。

「あらモルガナさん、『精』が出ますね」

ママおばさんが話しかけると、モルガナ婆さんはふん、と鼻を

鳴らしました。

「薬草は商道具だからね。といひであんた達、ミントのドレスの生地を買いに行くんだ

ろ?」

ミイミが「ええ」と頷くと、モルガナ婆さんはスカートのポケットからハンカチを一枚、

出しました。

「これを持つて、パッセルトーンの『一』っていう猫の妖精の生地屋のところへお行き。

『モルガナ婆さんが、フリルに使うレース糸を欲しがつてます』って言うんだよ」

「え? それって…?」

ネルさんが驚いて聞き返しました。モルガナ婆さんは、金色の縦虹彩の目でぎろり、と

あなぐまの妖精の氣のいい女性を睨みました。

「あたしが、ドレスを飾るレースを編んでやるよ。なに、材料が揃えば一日もあれば出来

る。上がつたら教えるから、糸を買つて来ておくれ」

受け取つたハンカチのレースの見事さに、ママおばさんは感激しました。

「ありがとうございます、モルガナさん。これで素敵なドレスが出来ます」

みんなはモルガナ婆さんにお礼をいい、谷底を後にパッセルトンへと急ぎました。

ユリを摘み損なったハナハナとニーニャはちょっとびり残念でしたが、代わりにドレスに

素敵なレースが使えるとなつてわくわくしてきました。

「きっと素敵になるねつ」

「そうだね」

お昼少し前に、みんなはパッセルトーン村に着きました。ここはパッセルベルとは違い、

幾つかの大きなトチの木が林立していて、上に住んでいる住民は木の間に橋をかけて行き来しています。

みんなは一番西の木に上りました。

そこは、露天のお店が大半の枝を占める、『パートのよつなどころでした。

大勢の人が買い物に来ています。妖精達は人間と違い、自分の体重を変えられるので、枝に大人数が乗つても折れる事はありません。

でも、すれ違うのが大変なくらいの人混みで、さすがにトチの枝もしなっています。

「すつごい人手だね」

ハナハナは目を丸くして言いました。

「前に来た時も一杯人が居たけど、何だかあの時よりも多いみたい」

ニーニャも、声を上ずらせます。

二人はきょろきょろと、通路を挟んで両脇に並ぶ露天を見回しました。

「うつちよ」先を歩いていいるママおばさんが、遅れがちな子供一
人に声を掛けました。

人混みを分けてみんながやつて来たのは、色々な布の並んだ大きな露天のお店でした。

露天と言つても、テント張りというだけで、中はちゃんとした商店です。奥行きもあり、

奥には高級そうな綺麗な布がたくさん並べられていました。

「こんにちは」ママおばさんが声を掛けると、中から店主らしい女人人が出て来ました。

「あら、ママさんいらっしゃい」

でつぱり太つた猫の妖精の女人は、赤茶の毛並みに埋まつた小さな縁の目を細めてにっこり笑いました。

その7 ウェディング・ドレス(3)

「今日はどんななじ用?」

「ウェディング・ドレスの生地が見たいのだけれど」

「ああ、それなら丁度いいのがあるわ。つい昨日、緑龍平野のリーリスからいい絹が入ったの」

ママおばさんは、早速その絹を見せて貰いました。

それは、大繭という特殊なかいじで、緑龍平野の桑だけしか食べないという不思議な虫

から採れる糸です。

大繭の糸は初めから少し金色をしていて、織物にすると表面がきらきらと金色に輝きます。

「いいわねえ」

ママおばさんとネルさんは、手に取つてうつとりと言いました。

「これなら、いいドレスが出来るけど……。高いでしょ?」

「そうねえ、普通のドレス生地の三倍、かな」

店主の言葉に、みんなはがっかりしました。

「それじゃ、無理ねえ」

「あ、でも、ママさんなら特別にうんと割り引きしますよ。ただし……」

もう一着、この生地でドレスを作つて欲しいと、店主は言いました。

「近頃ではドレスを上手に縫える人が減つて来ててね、だから生地も中々売れないの。な

ので、いいドレスをママさんを作つて貰つて、うちで貸し出してようかと思ってね」

「まあ、それはいいわね。是非作らせて頂くわ。でも、頼まれてる

ドレスが懲るなので…

…」

店主は、ミントさんの結婚式が終わってからでいいと言つてくれました。

みんなは大繭の縫地を買つと、次にレースの糸を買いにモルガナ婆さんが言つていたラーラの店へ行きました。

ラーラの店は、大繭の生地の店から更に枝先へ行つたところにありました。

そこは小さなお店でした。中へ入ると、キルト用の小さく切られた布が、幾つもの小引き出しにびつしりと入れられていました。

マーマおばさんは、所狭しと並んだ引き出しの間に置かれた椅子にちょこんと腰掛けた、

年老いた猫の妖精の女性に話し掛けました。

「あの、ラーラさん？」

お婆さん妖精は、顔を上げました。

「はいな。私はラーラですが？」

「パッセルベルのモルガナさんのご紹介でこちらに参りました」

「まあまあ」

ラーラお婆さんは、白髪の混じつた灰色の長い毛並みの顔を上げて、みんなを見ました。

「モルガナさんは、お元気ですか？」

「はい。……お知り合いなのですか？」

ミイミが聞くと、ラーラお婆さんは「はいな」と頷きました。

「私がまだ若い頃に、母が大変お世話になりましたね。もう亡くなりましたが、モルガナ

さんのお薬でずいぶん楽に逝つてくれました」

「そう、だつたんですか」

「の方は、蛇の妖魔といふこともあつて、周囲からはあまりいい

様には見られませんが、

根はとっても優しい方です。母のことも、それはそれは親身に診て下さいました」

ハナハナとニーニャは、むつきモルガナ婆さんがマーマおばさんに手渡したレースのハンカチを思い出しました。

「おばさん」ハナハナは、小声でマーマおばさんにハンカチの事を伝えました。

「ああそうだつたわ」

マーマおばさんは、モルガナ婆さんから預かつたハンカチを、ラーラお婆さんに見せました。

「まあまあ、このハンカチは……」

ラーラお婆さんは、本当に驚いたという声を上げました。

「これを、モルガナさんが？」

「はい。ラーラさんに見せて、ドレスのレースにする糸を売つて貰つて来るよつに」と

ラーラお婆さんは、手にしたハンカチを大事そうに撫でました。

「そうですか……。そう、モルガナさんが……。実はね、このレースは、私の姉の結婚式

にモルガナさんが作つて下さつたドレス用のレースの余りでござれたるものなんです。私が、

モルガナさんにお礼にと渡しました。

ところが、そのお式があつた一週間後に、村で一人の若い妖精が亡くなつたんです。毒

草を食べての自殺でした。……でも、当時の村の人々は、妖精が自殺なんて考えられない、

きっと誰かが毒を食べさせたのだと騒ぎました。毒を扱うのに慣れていた薬師のモルガナ

さんが、まつ先に疑われました。蛇の妖魔ですし、当時はまだ魔王

が生きていた時代でし

たから、モルガナさんがいくら無実だと言つても、誰も信用しなかつたんです。

それでとうとう、モルガナさんはパッセルトーンを出て行くことになりました。もちろん

ん、私と姉は最後までモルガナさんがそんなことをする人だとは思つていませんでしたから、見送りに行きました。その時、このハンカチを渡したのです

「そうだったのですか……」

その7 ウェディング・ドレス(4)

初めて聞いたモルガナ婆さんの昔の話に、大人達も、ハナハナと二二ニヤも驚きました。

と同時に、ちよつとモルガナ婆さんが氣の毒になりました。

ラーラお婆さんは話を続けました。

「その後で、若い人は自殺だつたと解りました。遺書が、見つかつたんです。村長さんらはモルガナさんに済まないとおっしゃつてました。……まあ、言つても後の祭りだつたん

ですけどねえ」

ラーラお婆さんはしみじみ言つて、またハンカチを撫でました。ややあつて、思い出したように顔を上げました。

「ああそつそつ。みんなさんはこんな昔話を聞きたくいらしたんじゃがないわよね。レース用

の糸ね。はいはい、今お出しちますね」

どつこいしょ、と椅子から立ち上がると、お婆さんは奥の引き出しを引っ張りました。

大きな引き出しで、中には玉に巻かれた細い糸が、何十個も入っていました。

いかにも重そうな引き出しをひきひきとつて来ようつとつてくるお婆さんに、ハナハナと

二二ニヤは慌てて手を出しました。

「お婆さん、私達が持ちます」

「あらあ、ありがと」

一人は、お婆さんが出した引き出しをマーマおばさん達の前へ置きました。

「綺麗ね」

「あ、この色なら置つた生地でひつわ

「偶然だわ。さつき私達、他のお店で大繭の生地を買つたんです」

「それは、大繭の糸ですよ。大繭は糸が細いので、とっても綺麗なレースが出来ます」

「マークおばさんは、そこの店主と貸し出し用のドレスを作る約束をしたことを、ラーラお婆さんに話しました。

ラーラお婆さんはそこの店主もよく知つており、それならと糸を大変安く譲つてくれました。

した。

とてもいい材料が安い値段で手に入り、ついでにとつてもいいお話を聞く事が出来て、みんなは優しい気持ちで帰り道を歩きました。

パッセルベルへ戻ると、みんなは早速仕事に取りかかりました。ハナハナはモルガナ婆さんにレース糸を届けに行きました。

西の下枝に着くと、婆さんの家からつん、と薬草を煎じるにおりがしました。

「ここにちは」ハナハナはドアをノックして開けました。婆さんは台所のかまどの前に立

つて大鍋を掻き回しているところでした。

「あの、レース糸、買つて来ました」

「そうかい。ありがとうよ」

そこへ置いて、と、モルガナ婆さんは木杓子で食卓を指しました。

ハナハナは籠の籠に入つたレース糸を卓へ置きました。

「それじゃ、」帰ります、と言い掛けた時。

「……ラーラは、元気だったかい?」

「あ、はい」ハナハナは少しどきどきしました。

実はマーマおばさんやリーハニ達と話しかつて、「ハーラお婆さんから聞いた話はモルガナ

婆さんには内緒にしよつ、といつ事になつていだのです。

??下手に話したら、昔の事を聞いたのがばれちゃうな。

これ以上何か聞かれる前に帰つて、もう一度ハナハナが「帰ります」と言つと、モル

ガナ婆さんがくるりとこちらを向きました。

「ラーラから、パッセルトーンでの話を聞いたんだね?」

ハナハナは、咄嗟に「いいえ」と言いました。

モルガナ婆さんは金色の目を細めて、ハナハナを見ました。

「いいよ、嘘付かなくても。……まあ、色々あつたけど、今は単に

昔の話。もう魔王もい

ないし、私やなんにも気にしてないよ

「……ごめんなさい」

モルガナ婆さんは、謝ったハナハナに一瞬きょとんとしました。

それから大声で笑い出

しました。

「あつはつは。おかしな子だねえ。じつしてあんたが謝るのさ。ま、いいか。??どれ、

糸を見てみよつか」

婆さんは食卓の籠から糸玉を一個、取り出しました。

「大繭だね。いい糸だ。ネービルさんもこれでベールを作るんだろ? なら私もうんとい

い飾りレースを作らなきやね」

一日後には出来上がるから、またおいで、と、モルガナ婆さんは言いました。

ハナハナはもう一度ペニンと頭を下げて、モルガナ婆さんの家を出ました。

家へ帰つて、ハナハナはその話を『イヤ』しました。
「そう……。モルガナさん、気にしてないつて言ったの」

その7 ウェディング・ドレス(5)

「うん

ミイミは夕食の下拵えをしながら、こいつハナハナに笑い掛けました。

「ほんと、ラーラさんちが言つた通り、モルガナさんはいい人ね」「ちょっと、恐いけどね」

肩を竦めるハナハナに、ミイミはあははと笑いました。

その晩、ミイミはティーヴに訳を言つて、次の日から一日間、ハナハナと一緒に村長の家へ泊まり込みました。

スカート部分を担当するのミイミはマーラーヤの一人なので、どちらかの家で一緒にやらなければなりません。

それに村長の家は部屋が大きいので、長いスカート生地を広げたりするのに場所がいいのです。

朝早くから、ミイミとハナハナは村長の家へ行きました。着くなり早速マーマおばさんが引いた図面を、裏地はマーラーヤが、表はミイミが裁断して縫い始めました。

二二ニヤとハナハナは、仮縫いのための針に糸を通したり、待ち針を抜いたり揃えたりする役目です。

こんなに大変な仕事のお手伝いは初めての上に、夜も友達と一緒に居られるというので、

ハナハナも二二ニヤもつきつきわくわくしていました。

10時になつた頃、仕事をしている奥さん達のために、村長のサウルがお茶やお菓子を持

つて来てくれました。

勉強を教わつている時は、ちょっと恐い先生の村長がここに立つながらお茶を運んで来

てくれるのに、ハナハナはなんだか妙な気分になりました。

お匂い飯と夕食は、ミントさんとお友達のリリイさんが作りに来てくれました。

「すみません、私のために……」

お匂い飯と一緒に食べる時、ミントさんはいつも済まなれでミーミとマリー ヤ

に言いました。

「いいのよ。パッセルベルでは先輩主婦が新婦のドレスを縫つのは昔からのことなのだか

り

ミーミはやう言つて笑いました。マリー ヤも、

「やうやう。これは先輩からの激励と、これからミントちゃんの幸せを祈るつて意味があるんだからね」

ミーミとマリー ヤは頑張つて、一日間で表裏のかなりのところを仕上げました。

「さて、じゃあ全部縫つてしまつ前に、モルガナさんのレースを合わせてみないとね」

翌日、ハナハナはマリー ヤと一緒にモルガナ婆さんの家へレースを受け取りに行きました。

た。

家の前まで来ると、またつん、と薬草を煮るにおいがしました。

「ここにちは」ハナハナはドアをノックして、声を掛けました。中からモルガナ婆さんの

声で、「お入り」返つて来ました。

ハナハナとマリー ヤは、そつとドアを開けて家の中へ入りました。モルガナ婆さんは、一日前と同じようにかまどの前に立っていました。

した。かまどには、大

きな鍋が掛けられていて、中身がぐつぐつ音を立てています。

モルガナ婆さんは、鍋を搔き回していた木杓子をかまどの脇の調理台に置くと、一人を

振り返りました。

「レースを取りに来たんだる。出来てるよ」

婆さんは前掛けで手を拭きながら、長い胴体をくねくねくねらせて隣の部屋へ入つて行きました。

ハナハナとニーニャは、どうしていいか分からず、じつと息を殺

して薬臭い台所で待つ

ていました。

モルガナ婆さんは、すぐに台所へ戻つて来ました。

「ほら」渡されたのは、ハナハナが一日前大繭の糸玉を入れて持つて来た籠籠でした。

ピンクの小花模様の、大判のハンカチが掛けられた籠籠を、ハナハナは手に取りました。

「あの……、中見てもいいですか？」

聞いたハナハナに、モルガナ婆さんは素つ氣無く「ああ」と、頷きました。

「ニーニヤとハナハナは、こわごわ、ハンカチを外しました。

そこには、大繭のつやつやした糸で出来た、素晴らしい綺麗なレースが、きちんと畳まれて入つていました。

「うわあ……」思わず感動の声を上げたハナハナ達に、モルガナ婆さんは言いました。

「スカートとベストに付けて、少し余ると思うよ。余つたらブーケの飾りにでも使いなさいと、ミヤミヤとマリマリニヤに言つとくれ」「はい」

一人は笑顔で挨拶し、婆さんの家を出ようとしました。すると、婆さんが一人を呼び止めました。

「その柄は、昔ラーラの姉さんのウェディング・ドレスにも使った柄だ。豆の花とポピー。」

どちらも幸福の象徴だよ」

私には縁が無かったけどね、と呟いた婆さんの声を、ハナハナはそつと胸に仕舞つて玄関を出ました。

モルガナ婆さんのレースは、それは見事にドレスを飾りました。偶然にも、ネービルさんが作ったベールも同じ花の柄で、仕上がつたドレスを着たミントさんは、とつても嬉しそうでした。

そして。

長老の家が完成した一日後、トッドさんとミントさんの結婚式が、完成した長老の家で行われました。

村中の人が集まって、一人をお祝しました。もちろん、ハナハナとニーニヤも出席しました。

「とつても綺麗なお嫁さんね」

ニーニヤは、飲み物を運ぶお手伝いをしながら、すれ違ったハナハナに言いました。

ハナハナは、おつまみを乗せたトレーを持って頷きました。

「私達も、お嫁に行く時にはみんなにドレス作つてもらえるのかな」「きつと作つてもらえるよ。そうだ、今からママおばさんに頼んでおこうよ」

一人は話し合つて、ふふ、と笑いました。

夏は真っ盛り。トネリコの木の葉はますます緑を濃くしていきます。きいちご酒で真っ赤な顔になつた村長が、同じく真っ赤な顔のボツヘさんにお祝を言つ

ています。ボツヘさんは、もう泣きそうな顔で頷いていました。大きな声で歌を歌う人、それに手拍子をする人。みんな嬉しそうです。

そんな様子を、モルガナ婆さんが少し離れた所から、ぶどう酒を飲みながら見ていました。

に、ハナハナは気が付きました。

声を掛けようかと思いましたが、レースを取りに行つた時の婆さんの咳きが、ふつと思

い出されました。

きっと、モルガナ婆さんは今はまだ一人でいたいんだ。

そつとしておいてあげようと、ハナハナは木陰でくつろぐ婆さんから静かに目を逸らしました。

その7 ウエディング・ドレス 完

その7 ウェディング・ドレス(5) (後書き)

その7 ウェディング・ドレスはこれで終わりです。
いかがでしたでしょうか?

次は、その8 風車小屋 です。

どうしても風車作りを諦め切れないリックは、ボツへ親方に
直談判!

さて、どうなりますことか?

お楽しみに。

その8 風車小屋（1）

長老の家が完成したのは、夏もそろそろ終わりに近付いた頃です。パツセルベルの村では珍しい一階建ての家は、長老の希望で1階は村の集会所になります。

した。

もちろん、最初に使つたのはボッヘルさんの娘ミントちゃんと大工見習いのトツドさんの結婚式でした。

その前日に、ボッヘルさん達大工さんと長老と村長の家族だけで、簡単な完成式をやりました。

結婚式のために用意したワインと果実のジュースをちよつとだけ貰い、マラーニヤが作つたオードブルで乾杯しました。木ねずみ三兄弟の長男リックも、ボッヘル親方の許しが出て出席しました。

「いやー、やつと完成したのぉ」

長老は嬉しそうに、ワイングラスを片手に部屋中を見回します。ボッヘル親方は得意げに長老に話しました。

「特に、壁の収納棚に工夫を凝らしたんですよ。あれなら人の邪魔にならずに色んなもの

を片付けておけます」

「そうそう。集会所つてんで親方、どうやってみんなが便利で広く使えるか、一生懸命考えていなすつたものな」

大工仲間も、みんな出来上がりに上機嫌です。長老はますます満足な顔で、

「うむ、うむ」と頷きました。

大人達がやつと出来た家を誉めている中、リックは一人で不満でした。

とつても綺麗に出来た家ですが、彼にはどうしてももうひとつ、付けたかつたものがあります。

それは、風車でした。

お父さんの手紙で風車を見て以来、リックはどうしてもそれを自分で作つてみたくて仕方無かつたのです。

難しいのは百も承知しています。だから、ボツへ親方にも相談しました。

でも。

「風車あ？ そんなもの取り付けて、何になるんだ？」

検討さえされずに却下されました。

それもそうです。風車は元々、海辺や水辺の水面より低い場所で水を掻き出したり、ま

たは水の少ない農地で小麦の精製をしたりするのに使われます。森に囲まれたパッセルベルは、農地にする土地がありません。水汲みなどにも風車は使

いますが、マーフの泉があるのにわざわざ地下水を汲む人はいません。

まして、長老の家はトネリコの最頂上。そんなところに風車を作つても、何にもなりません。

せん。

「でも、あつた方がかつこいいと思うんだよな」

葡萄のジュースをなめながら、リックはひとり呟きました。

「どうしたんだい？ 難しい顔をして」

お酒を飲んで歌い騒ぐ大人達から少し離れて立っていたリックに、トッドさんが寄つて

きました。

親方のお弟子の中でも一番若いうちで、リックの面倒もよく見てくれます。

明日はミントさんとの結婚式で忙しいので来なくていいとボッヘ親方に言わっています

たが、兄弟子や仲間の大工さんがお祝に行くのに、一番下の端の自分が私事で行かないと

いうのは失礼だと、完成式に出ました。

それでも明日のことを考えてワインは遠慮したトッドさんは、リックと同じ、葡萄ジュ

ースの入ったカップを持っています。

リックは言いました。

「トッドさん、パッセルベルの家に風車があつたら、やつぱりおかしいですか？」

「ははあ、やつぱりまだその事を考えてたんだ」

ボッヘ親方に風車の話をした時、側にいたトッドさんも聞いていました。

「おかしいっていうよりか……。必要ないからなあ。第一、トネリ

の枝が伸びたら風車

の羽が邪魔になるよ？」

言われて、リックはなるほど、と思いました。

確かに、木の上で暮らすパッセルベルでは大きな風車の羽は邪魔です。

「風車つてさ、山とか遮るものがあんまりない場所に建つてるのがかつこいいんじゃないのかな」

「……そうかも」トッドさんはくすと笑いました。リック

は真面目な顔で頷きます。

その様子に、トッドさんはくすと笑いました。

「それでも、風車を作つてみたいんだ？」

「だつて……」図星を言われて、リックはちょっと恥ずかしくなつて下を向きました。

「まあ、気持ちは分かるけどね。僕も、早く仕事を覚えて、親方みたいにこんな素敵な家を作つてみたいもの。でも、風車は難しいよ、きっと。僕も実物は見たこと無いけど、確か建物はレンガで円形を作るんだつたよね。だとしたら、やっぱりパッセルベルでは無理だよ」

レンガはしつくいなどで止めねばならず、トネリコの枝の上では土台を組む事が難しいのです。

「それに、この辺りの森の木に比べたら、レンガは積むと重くなるし。大きな風車小屋は絶対作れないよ」

その8 風車小屋（2）

「じゃあ、木の風車小屋だつたら大丈夫ですか？」

「え？……うーん、それは親方と話してみるしかないかな。そもそもリック、何処に風車を作りうつと思つてたの？」

リックはちよつと考えて、答えました。

「長老の家の脇の……、空き地に……」

本当は、長老の家の屋根に付けたかったのですが、トッドちゃんと話から、それは無理だとリックにも分かりました。なので、「空き地」と答えたのです。トッドさんは少しひくりしたような顔をして、それから優しく微笑みました。

「そつか。なら長老の」許可も必要だね。……そうだな、今は無理だけど、リックが一人

前になつた頃、もう一度親方に話してみなよ。それまでに、パッセルベルで風車がどんな

利用法があるのか、考えておいで」「らん

どんな利用法、と言われても、リックにはすぐには思い付きません。

ん。

風車は風の力で羽を回し、水を汲んだり粉を挽いたりするもの。他にどんな使い道があるのでしょうか？

リックは、完成式でみんなが楽しくおしゃべりしている間中、ずっと風車の利用法を考えしていました。

翌日の、トッドさんとミントさんの結婚式の最中も、ずっと一人で黙り込んでそのことを考えていました。

「どうしたの？」みんなが集まる賑やかな場でいつも人一倍元気なリックが大人しいのに、ハナハナは不思議に思つて声を掛けました。

「うつわつ！」

普段は着ない、ピンクのワンピースを着たハナハナは、覗き込まれてびっくりして飛び

上がったリックに、くすくすと笑いました。

「なあに、そんなに驚いて」

「ああ、ハナハナ。あ、うん、ちょっと考え方」

「もしかして、風車？」

リックが風車を作りたいと最初に話したのは、弟達とハナハナにでした。

リックは、照れくわそうに「うん」と言いました。

「でも、ボッヘルさんはダメって言われたんでしょう？」

「親方はダメだとは言ってないんだ。ただ、作つても無駄なんじゃないかって……」

「それって、ダメってことなんぢゃないの？」

「うーん……」

リックは、ぽりぽりと薄茶の毛並みの頭を搔きました。

「昨日、トッドさんと話したんだけど、パッセルベルで風車が利用出来るっていうのを考

えれば、親方も話を聞いてくれるかもしれないって

「ふうん？」ハナハナは、持つていたお皿からオードブルをひとつ、摘んで口に入れました。

た。

「だから、何かそういう、風車を使つてする方が便利な仕事がないかなつて……」

「風車つて、お水汲んだりも出来るのよね？」

「あと、小麦や豆を粉にしたりね」

「お水汲みつて、村では毎日下のマーフの泉にまで行かなきゃなら

ないでしょ？ お母ちゃん達は大変だよね」

ハナハナの言葉に、リックははっと氣が付きました。

「そかつ！ 長老や村長さんの家から泉までは遠いもんなつ、風車で泉からここまで水を

汲み上げる事が出来れば……」

「それ、いいアイデアじゃない？」

「ありがとつ、ハナハナつ。これで親方に許可貰えるかもしれない」

「

リックは早速、ボツくさんのところへ飛んで行きました。

ボツくさんは丁度、結婚式の場所を貸してくれたお礼を長老に言つているところでした。

「本当に、この度はありがとう」やれこました

「なんの、わしはみんなにこの家を利用してもうおつと思つてな」

「親方つ！」リックに大声で呼ばれ、ボツくさんは何事かと振り向きました。

「何だ？ どうした？」

「風車の利用の仕方、思い付きましたつ！」

「風車あ？」こんな時に、なんだ、とボツくさんは呆れました。

「あのなリック、今は忙しいんだ。その話は後で……」

「いやいやボツくさん、面白そうな話じやないか？」

長老が、助け舟を出してくれました。リックはぱつと顔を輝かせ、話しひ出しました。

「あのつ、風車つて粉を挽いたり水を汲んだりするんですけど、村の水汲みつて大変でし

よ、だから、風車の力でトネリコの上まで水を汲み上げたらどうかなつて」

一瞬、長老とボツくさんは顔を見合わせました。リックは、何か変なことを言つたかな、と不安になりました。

と、長老がにっこり笑いました。

「リック、考えはよいがの、水は溜めるとかなり重くなる。このト
ネリコの枝が、溜めた

水の重みで折れはせんかの？」

その8 風車小屋（3）

リックは「あ」と思いました。

確かに、水はたくさん溜めると重くなります。トネリコの木がい
くら丈夫でも、水を溜
めておく程ではないでしょう。

また考え込んでしまったリックに、ボッシュさんは小さく溜め息を
付きました。

「まあ、どうしても作りたての模型
を作つてじりん。それ
がよく出来たら、考えてみよつ」

親方の提案に、「はいっ」と、リックは顔を上げました。

結婚式から三日後。

リックは親方に言われた模型作りに夢中になつていきました。
外遊びもせずに工作をしているお兄ちゃんを、応援している弟達
は静かに見守つていま
した。

「すつごい真面目に作つてゐる」

良く晴れた午前中、ミヤミの家の裏の物干し場へ来たニックとマ
ックは、兄の近況をハ
ナハナに報告しました。

「設計図とかもちゃんと引いて、木切れをいっぱい親方のところから
貰つて来て、いろんな
長さに切つて貼つて……。兄ちゃん夢中で作つてゐる」

「そり。そんなに頑張つてるんだ。楽しみだね」

モモのHプロンを枝に掛けながら、ハナハナはにっこり笑いまし
た。

「うんっ」リックとマックも、白慢げににっこり笑いました。
「頑張ってる兄ちゃんは、僕達の誇りだから」

「そうだね」

「リックが言った時、表の方からそのリックの声がしました。
「おおいつ、ハナハナっ！」

「あ、兄ちゃんだつ」

「うわさをすれば、ね

ばたばたと、リックが走つて物干し場へやつてきました。

「出来たっ」

「え、模型完成したの？」ハナハナは洗濯物を干す手を止めて、リックの側へ寄りました。

「うんっ。??ほらっ」

リックは、大事に持つて来たものを、近くの平らな枝の切り口の上に乗せました。

それは、ハナハナが両手にもつて丁度いいくらいの大きさの風車小屋でした。

小屋は普通の家の形で、ちゃんと窓も扉もあります。

「うわあ、よく出来てる」

「ほんとだ」

子供達が輪になつているのに気が付いて、マイミも寄つて来ました。

「あらリック、風車の模型、出来たのね」

「うんっ。でね、羽が回るようにしたんだ。……ほらね」

リックは指で風車の羽を軽く突きました。言つた通り、羽はくるつと軽く回りました。

「すつごい」

「大したものねえ」

「やつぱり兄ちゃんだつ」

マックが嬉しそうに言いました。

「これを实物にしたら、すつごいかつこいいね

ハナハナは、模型に顔を近付けて言いました。リックは「うーん」と頭を搔きました。

「でも、まだ親方に見せてないし……。何に使うか決まってないし」

「風車って、粉を挽くのに使うのよね?」「ミイミが言いました。

「野菜とかの皮向きに使えないかな?」

「それは無理でしょ。でも、潰したりするのには使えるかも」

「そつかつ!」

リックはぴょんつ、と飛び跳ねました。

「粉にするんじゃなくつても、野菜潰したりするのに使えるんだつ」親方に言つて来る、とリックは駆け出して行きました。

「あ、風車小屋つ!」

ハナハナは、呼び止めて忘れ物を指差しました。

「僕が持つてくつ!」マックがさつと模型を抱え、兄の後を追つて駆け出しました。

「じゃまた後でつ!」

その後を、ニックが追い掛けて行きました。

「……忙しいね」あつという間に三人居なくなつて、ハナハナは呆然として言いました。

「許可が出ればいいわね」

ミイミはくすつと笑いました。

その8 風車小屋（4）

ハナハナの家を飛び出したリックと弟達は、全速力でボツへ親方の仕事場へ向かいました。

ボツへ親方は、自宅のある枝と同じじように仕事場を作っていました。

いつも開いている仕事場の玄関に、三兄弟は息を切らしながら入りました。

「親方つ！」

「お、どうしたリック」

親方は、丁度25丁目のムササビの妖精から頼まれた家の図面を引いているところでした。

「あのつ、風車小屋なんですけどつ」

「うん？」

「じゃがいもとか、パンの実を潰すのに使えるんじゃないかなって」

「ほお？」ボツへ親方は、仕事の手を止めリックを見ました。

リックの後ろにいたマックが、小さな声で「兄ちゃん」と呼び掛けました。

「模型つ」

「あ、そだつ」

リックは慌ててマックから模型を受け取り、親方に見せました。

「おお、よく出来たじゃないか」

ボツへ親方は模型を手に取ると、側の丸木のテーブルに乗せました。

た。

「こうして見ると、木の風車小屋も悪くないな。で、野菜を潰すのに使うんだつて？」

「あ、はい。中に臼を取り付けて、杵を風車の力で動かせば簡単に野菜を潰せるかなつて」

「あ、はい。中に臼を取り付けて、杵を風車の力で動かせば簡単に野菜を潰せるかなつて」

「ふつむ……。ナビそれだけじゃあ、利用価値は低いかなあ」

「……ダメ、ですか？」

またもやの親方のダメ出しに、リックはもつ泣きやうな声で聞きました。

「……いや。まあ、おまえがこんなに熱心にやつてるんだ、ひとつ長老と相談してみよう」

「やつたあつー！」リックは元より、ニックとマックもその場でぴょんぴょん跳ねて喜びました。

親方が長老に相談すると、「面白いかもしかんの」とこいつ返事でした。

親方の許しも貰い、長老も隣に立ててことと許可を出してくれて、いよいよリックは風

車小屋作りに乗り出しました。

ただし、

「あんまり大きいのはダメだぞ。そりだな、おまえ達がしゃがんで入つてやつとくらじのからだな」

というのも、大きな材木はまだリックの手には負えないからです。

親方にそう言つ渡されてちよつと悔しいリックでしたがそれは仕方ありません。

図面はボツへ親方が、仕事の合間を見て引いてくれました。練習になるからと、監督にトッドさんが付きました。

リックは木の釘の打ち方や、木材の簡単な組み方をトッドさんに習いながら、作業を進めました。毎日毎日、弟達と一緒に長老の家の隣の空き地に通い、一生懸命材木にかんな

を掛けたりのこで切つたりしました。

始めてから一週間。

ある程度小屋の方も出来上がり、親方が用意した小さな臼と杵、それに風車の力を杵に伝える心棒が、取り付けられました。

「あとは本体の風車だね」

帰り道、毎日兄の作業を見ていた弟達は、嬉しそうに言いました。

「うーん……」

「どうしたの？ あと少しじゃない」

あんまり気が乗らない風のリックの返事に、ニックとマックは兄の顔を覗きました。

「ちょっとな、困ったことがあるんだ」

「なに？」

「風車の羽つて、木の骨組みの上に布を被せて風を受けるみたいであるんだ。その、布

がさ、無いんだ」

あ、そっか、と弟達は顔を見合わせました。

「結構、おつきな布が要るよね？」

「どうするの？」

「うーん……。一応親方に相談してみるけどさ……」

困った顔をしたまま、リックは家に戻りました。

「ただいま」

家に着くと、珍しいことにママおばさんは何処かに出掛けてしまだ戻つていませんでした。

た。

「おかあさん、何処行つたのかな？」

マックが、隣の部屋へ見に行きました。

「珍しいね、こんな時間に出かけるなんて」

「そうだね、ヒックが言った時、

その8 風車小屋（5）

「兄ちゃんっ！ リック兄ちゃんっ！ ちょっと来てっ！」

隣室からマックが大声で一人を呼びました。

何事かと、兄一人は隣室へ向かいました。

マックはママおばさんのベッドの下から、なにやら白い布を引つぱり出していました。

「この布、すっごくでっかいよっ！」

「こらマックっ、それはお母さんが何か頼まれて作る時やつだろ？」

「でも、お母さん頼まれものの洋服の生地は、そっちのタンスにいつも終うよ、これは

余ったのじゃないの？」

マックの言葉に、リックとリックは顔を見合わせました。

「でも……、これ、ずいぶんおつきいし」

「これから何か作るんじゃないの？」

「違うよきっと。元々もつと大きくて、余ったんだよっ！」

「……そつかなあ」何だかとつても綺麗な布を、リックはマックから受け取りました。

「すごく光ってる」

「これで風車の羽の布を作つたら、すっごく綺麗だと思つんだけど」

三人は、大きな布をじつと見詰めました。

リックが、言いました。

「これだけあるんだから……。ちょっとくらい貰つても大丈夫かな

？」

「うん……、多分」とリック。

「絶対大丈夫だよっ！」マックは大きく頷きました。

「そうだよね、と二人の言葉に納得して、リックは布を大きく広げました。

「マー・マーおばさん」の裁縫箱を探し、中から布鋸を取り出すと、「ちよつと貰うつね」と言つて、四分の一程を鋸で切り取りました。

「足りる?」

心配そうに聞いたマックに、「多分ね」とリックはにっこり笑了。

布も見付けて、風車小屋はいよいよ完成です。

リックはマー・マーおばさんのベッド下から失敬した布を、ボツヘ親方の工房の隅でちくちくと縫いました。

縫い物は、お母さんの見ていいせいか、リックは結構得意です。「ずいぶん綺麗な布を持つて来たなあ」

作業を覗きに来たトッドさんは、布を見るなり言いました。

「何かこれ、どつかで見た事ある布だね?」

「そうですか?」

「うん。このとつても光沢のある感じって……。ああそうだ、ミントが結婚式に着たドレ

スつ!」

「え?」

それで初めて、リックはその生地がウェディング・ドレスのものであるのに気が着きました。

「立派な生地だものねえ。これつて、もしかしたら、もう一着分なんじやないのかな?」

「だとしたら……」かなりまずい、とリックが青くなつた時。

「リックつ!」

マー・マーおばさんが工房の前に現れました。

「おつ、お母さん……」

「あんたつたらつー、ドレス用の布を切つてしまつたんですつてつ

？」

「マークおばさんは工房へ入つて来て、リックの持つている布を見るなり真っ赤な顔になりました。

「なんて事をしたの？！ これは、パッセルトーンの生地屋さんに頼まれて作るドレス

用のものなのよ？！ それを、あんたつて子はあつー…」

「じつ、『めんなさい』！」

「『めんなさい』も何もありません！ ……ああああ、こんな変な大きさに切つてしま

つてつ！ これじゃあもつ、ドレスに出来ないじゃないの？！ 「おばさんは厳しい顔で、大蘭の大事な絹地をそつと持ち上げました。

「もう……。これがいくらするものだと思つてゐの？！ これはねえ、あんたの作った粗末な風車小屋なんかの部品にするような布じやないの？！ ひとつも高価なものなのよ

！ それを……」

「じめつ、『めんなさい』！」

何時に無くす『』い剣幕のお母さん、これは本当に大変なことをしてしまつたと、リックは改めて思いました。

「僕……、どうしたら……」

半泣きになりながら、リックはお母さんとお母さんとトッグさんを見ました。

「マークさん」

トッグさんが言いました。

「それは、ミントのウーティング・ドレスと同じ生地ですよね？」

それを、もう一着作る
予定だつたんですか？」

L

ええ、実はこの大蔵の生地を安くしてもらひ乍れば、その生地屋さんが貸し出し用

うひひ、これじやもうひ

「弁償したら、いくらくらい？」

「ああ、これ……。アラビア語の話しが出来ませんよ。」されど、

もの

111

儀な若者につっこり笑

二〇六

ング・ドレスは頼まれ

祝として送るのよ。だ

「心に寄りあなたは寝ぼけたでいいの」
言つて、マーマおばあさんはリックを見ました。泣きじゃくつて、

について、微笑みました。

「……しちゃつたことは、仕方ないわね。しょうがない、生地屋さ

んに謝つて、なんとか

方法を考えてみましょう」

「「J……、『じめ、んなざ』……」涙と鼻水ぐしゃぐしゃになりながら、リックはまた謝りました。

翌日、リックはママおばさんと共にパシヤルトーンの生地屋を尋ねました。

訳を話して謝ると、生地屋の赤猫の妖精の店主は分かってくれ、快く新しい布を出して

くれました。

切つてしまつた布の方は、改めて売り物の服を一着作ることで話が決まりました。

「それから、これは私からリックくんへのお祝」

そう言って、店主は少し古ぼけた厚地の麻布を一反、奥から出しました。

「実はこれ、だいぶ以前に炭屋の田那さんから注文されたんですけど、生地が良すぎて高いって、納品を断られてしまつたものなの。ずっとあつても売れないし、風車の羽にならぴつたりだと思うから」

「いいんですか？ こんなに？」

驚くママおばさんとリックに、店主はこり笑いました。

「いいのよ。その代わり、と言つては何だけど、これから少し出来た服を置くつと思うの。

前にも言つたけど、最近の若い娘さんは仕立物が下手だから、生地が売れないと。その出

来合いの服の仕立てを定期的にママさんに頼みたいのよ

「まあ、ありがとうございます。是非やらせて頂きます」

「仕立て代なんかは、後で話しえにましょう
マークおばさんとリックは改めて店主に礼を言へ、お店を出ました。

パッセルトーンの生地屋から貰つた麻布は、とても丈夫で風車の羽にぴったりでした。

完成した風車小屋は、大人が一人やつと入れる大きさでしたが、杆は風車の力で ちゃん と動きました。

「すつ」、「じゃがいもがみるみる潰れてくつ」

窓から田の中身を覗いたニックとマックは、お兄ちゃんの初仕事の出来栄えに「コココ」です。

「いいねこれ。お豆とか、たくさん潰さないといけない時に便利」「じゃがいもをふかして持つてきたハナハナも、とん、とん、とん つくり動きながら中身

を潰して行く杆の動きに、にっこりしました。

「やつたねリック。上出来だね」

「まあね」リックはトネリコの梢を吹き抜ける風にゅつたり回る風車を見ながら、えつへん、と胸を張りました。

「でも、ほんとは親方の図面がいいからなんだ。羽がよく回るところに工夫してあつて、さすがだよ」

「お、よく回つてゐな」

リックが誉めた所へ、ボツへ親方と長老がやつて来ました。

「中々いい出来じゃないか。初めてにしちゃ立派なもんだ」

「いえつ、親方の図面のお陰と、トッドさんの助言のお陰です」

真面目に答えたリックに、ボツへ親方はあつはつは、と大声で笑

いました。

「なあに、リックが強情に言い続けなけりや出来無かつた代物だ。
うん、中々いい腕して

いる

「ほんとに。こりゃ面白いもんだわい」

風車の羽を見上げ、長老も、目を細めて微笑みました。
照れくさうに鼻を頭を搔くと、リックは

「ありがとうございます」と一人にお礼を言いました。
「これからももっと勉強して、いい大工になるんじやよ」

「はいっ

ややあって、朝の仕事がひと段落したお母さん達がやつてきました。

風車小屋の窓から杵の動きを覗いて、みんな感心していました。

「これならパンの粉も挽けるかもねえ」

「それなら、村でパンが焼けるかもねえ」

「あら、それいいわね」

口々に風車を讃めるお母さん達に、リックも第一人も得意氣でした。

「そう言えば、ママおばさんのドレスも出来上がったんだって?」

ハナハナが聞くと、リックは「うん」と頷きました。

「タベ縫い上がつて、今日パッセルトーンに持つてつた。すっごく
いい出来だつて」

「そう、よかつたね」

少し強い風が吹いて来て、風車が少しだけ早く回りました。

ハナハナは、ごとんごとんという杵の音を聞きながら、リックは
きっといい大工さんにな
なるね、と微笑みました。

その8 風車小屋（6）（後書き）

その8 風車小屋は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は『わがままヒマ』。

パッセルベルの子猫の妖精の中でも、お嬢様気質で
わがままなヒマ。
ハナハナは、ヒマが苦手です。
さて、どんなことが起きますか……？

お楽しみに！

その9 わがままHマ（一）（前書き）

今回は、新しい友達、子猫の妖精Hマの登場です。
でも、このHマ、ちょっと困ったさんで、ハナハナも手を焼いてい
ます。
さてさて……

その9 わがままHマ（一）

パッセルベルのトネリコ枝3丁目に、Hマといつ子猫の妖精が両親と一緒に住んでいます。

Hマは9歳、銀色の毛がふわふわした、とっても可愛い女の子です。

お母さんのナニイも娘の可愛いのが自慢で、周囲の人もそう言います。でもそりやつて

誉められる事が、ちょっとHマをわがままな子にしています。

こつものように洗濯物を干していくHマとハナハナの側で、その日は珍しくモモがお

人形遊びをしていました。

「……そうしたら、うさちゃんが遊びにきました。『まあモモちゃん、今日はとつても可

愛いわね』『まあありがとう、うさちゃん』」

モモが持っているお人形は、ふたつともHマが作つてあげたものです。そのうちひとつは、モモに似せて、クリーム色の毛をした子猫の妖精の人形でした。

「モモはそのお人形、大好きね？」

靴下を干す手を止めて、ハナハナはモモの仕種に笑いました。

モモは大きく「うんっ」と頷き、子猫の人形を抱き締めました。

「モモね、モーちゃんがお人形の中でいちばん好きっ」「モーちゃん？」

「うん。モモの妹だから、モーちゃん」

なるほどね、とハナハナはまた笑いました。

「ハナハナ、悪いけど薪の側にあるあのもうひと箒、こっちへ運んでくれる?」

ミイミに頼まれて、ハナハナは「はい」と洗濯箒を取りに行きました。

「あつ、モモもお手伝いする?」

モモがふたつの人形を座つていた枝に置いて、ハナハナの後を追い掛けで來た時。

「こにちは~」

可愛い声と共に、エマが家の横からひょっこり顔を出しました。

「まあエマ、いらっしゃい」

ミイミが微笑みました。それに対して、エマはスカートの裾をちよつと揃んで膝を折る、

人間の女の子がするお辞儀をしてみせました。

とっても可愛い笑顔でしたが、ハナハナは少し嫌な気分になりました。

エマが大人にはいい子振るのは、パッセルベルの子供達はみんな知つてゐる事です。

??何しに來たのかなあ。

ハナハナがそんな気分でいるのもお構いなく、エマはどんどん裏庭に入つて來ました。

見ると、左腕に大きめのバスケットを下げています。

「あのね、昨日父様がお仕事からお帰りになつて、エマにお土産をたくさん下さつたの。

人間の街の珍しいおもちゃなんかがあるから、ハナハナとモモにも見せたくって」

「あらそう」どうせ自慢したいだけなのは分かつてゐるんだ、などと思ひながら、ハナハナはわざとこり笑いました。

エマはさつきまでモモがお人形遊びをしていた枝へ、さつさと座りました。

モモが大事に置いておいたふたつの人形を乱暴に横へ退かすと、自分が下っていたバスケットを、そこへどん、と置きました。

「あー……！」

モモは怒った顔をして、小枝の方へ退かされた自分のお人形を取りに行きました。

ハナハナは洗濯籠をミイミの側へ運ぶと、モモのところへ行きました。

「大丈夫？」

「うん」お人形を抱えたモモは、ハナハナに頭をそつと撫でられ悔しそうな顔で頷きました。

そんな二人の様子など全く田に入っていないエマは、いそいそとバスケットの中から自慢のおもちゃを出して並べています。

「ねえっ、これ可愛いでしょ？ ガラスのネックレス。こつちは指輪。この小さいのは粘土のうさぎのお人形。とってもきれいでしょ？」

「……そうだね」

得意になつて説明するエマに、ハナハナは気の無い返事をしました。

「それからこれはね……」

「私、まだお姉さんのお手伝いが残つてるから」

ハナハナはモモの肩をぽんと叩いて、ミイミのところへ戻りました。

モモは、どうしようかな、と一瞬迷いましたが、エマのおもちゃにも興味があつて、その場に残りました。

「ふうん、母様のいない子は大変ね」

ハナハナは瞬間、エマをひっぱたきたい気持ちになりました。く

るつと口を変えて歩

き出そうとする妹を、『ハハ』が止めました。

「ダメよハナハナ。喧嘩はダメ。笑って『やつね』って言つておきなさい」

ハナハナは姉の言葉に怒りをどうやら堪えました。
と、モモが言いました。

その9 わがままエマ(2)

「なんでそんなこといつの？ お姉ちゃんは一生懸命お母さんのお手伝いしてるのよ」

「あら、ハナハナはモモのお姉さんじゃないでしょ？ お母さんの妹だから、モモにはおばさんよ？ そんなことも知らないの？」

「知ってるよつ！」

エマは、膨れつ面になつたモモをふふん、と笑いました。

「うそ。知らないからお姉ちゃんつて呼ぶんでしょ。母様がいつも言つてるわ。この村の

子はみんなおおらかで天真爛漫だつて。でも、天真爛漫つて、別の言い方するとバカつて

ことだつて」

「お姉ちゃんもモモも、バカじやないもんつ！」

怒つて興奮したモモは、右手に持つていた子猫のモーちゃんのお人形を振り回しました。

エマは、それに目が行きました。

「あつ、ねえつ、そのお人形、見せてつ！」

エマはさつと立ち上ると、自分より小さなモモからお人形を取り上げました。

「可愛いっ！ これどうしたの？ パッセルトーンで買ったの？」

人が怒つている事なんか関係なく、エマは自分の興味を引いたお人形に夢中です。

さつきまで口喧嘩していた筈なのにいきなりお人形を讐められて、モモは何がなんだか

分からなくてぽかんとしました。
わがままお嬢様エマは、答えなんかどうでもよく、気に入つたもの撫で回しています。

そして。

「ねえっ、これちょうどいいっ！」

「……え？」

「このお人形、Hマにちょうどいいっ」

モモは、何を言つてゐるだといつ表情になりました。

「だつて、それ、モモのだよっ？」

「だからちょうどいいつー！」

「やだ」

「なんで？ ちょうどいいよ」

「やだ」

「じゃあ、Hマのこのおもちゃ、全部上げるか？」

Hマは、持つて来たおもちゃとバスケットを指差しました。

「いらない、そんなもの」

「どうして？ 人間の街の珍しいおもちゃよ？ こんなお人形より
よっぽどいいものよ？」

漸くお手伝いが終わり洗濯籠を家へ入れようとしていたハナハナ
は、Hマのその言葉を
聞いてむつとしました。

やだ以外言い返せない姪の側へ行くと、ハナハナはHマに言つて
した。

「そんなに珍しくつていいものなら、Hマが持つてればいいでしょ
？ モモのお人形なん
か欲しがらないで」

Hマは初めて怒つた顔になり、言い返しました。

「違うのっ。Hマはこんなのたくさん持つてゐるもの、これくらいモ
モに上げたつてどうつ

てことないのよ。でも、モモは持つてないでしょ？ お人形と取
り替えて上げるつて言

つてゐんだから、貰つておきなさいつて言つたの

「やだつ！ そのお人形はモモのつ！」

モモは我慢し切れなくなつて、エマの持つてゐるお人形を掴みました。

「返してつ！」

「ダメつ！ これはエマが貰つたのよつ！ 離してつ！」

「あげてないつ！」

「貰つたのつ！」

二人はお人形を、力任せに引つ張り合いました。小さな子猫の妖精のお人形は行つたり

来たり、エマのモモの間でぶらぶらしています。

このままでは壊れてしまします。

「エマつ！ モモのお人形を離してつ！」

見兼ねて、ハナハナはエマの手を叩きました。

「痛いつ！」

エマは顔を顰めてお人形を離しました。しかし数秒遅く、二人に引つ張られたお人形は、右手がもげてしましました。

「あーつ！ モーちゃんが……つ！」

モモは、腕が取れてしまつたお人形を見て半分泣き顔になりました。

一方エマは、

「いたあいつ！ ハナハナがぶつたあつ！」

わあん、と大袈裟に泣き出すと、自分のおもちゃを終いもせずに走つて出て行つてしま

いました。

「どうしたの？」

先に家に籠を入れに行つていたエマが、エマが走つ去るのを窓から見ていて裏庭に戻

つてきました。

「モモとエマが、お人形を取り合つて……」

「おかあさんつ！」

その9 わがままHマ(ω)

お母さんの顔を見てほつとしたモモは、お人形を持ったままHマに抱き着いて泣き出しました。

「まあまあ、喧嘩しちゃったのね？」

「モモが悪いんじやないよ、お姉さん」

ハナハナはHマにいきさつを話しました。

「……それで、ハナハナがHマを叩いたのね？」

「うん。いけないと思つたんだけ……、あのままじやお人形が壊れちゃうと思つて……」

「そつ。でもね、人を叩くことはよくないわ。ハナハナは分かつてるからいいけど、今度は絶対ダメよ？」

「はい、じめんなさい」

「謝る相手が違うわ。Hマに謝らなきゃ

そう言つと、Hマはモモを抱き上げました。

「とにかく家へ戻りましょ。Hマのところには、それから行きましょうか」

ところが、ハナハナ達が家へ入つて間もなく、マーマおばさんが来てしました。

「ミイミ、この間のワッフルの作り方、教えてもらいたいんだけど久し振りに旦那さんが帰つて来たというので、マーマおばさんは美味しかったミイミの

ワッフルをふるまつて上げたくなつたのです。

用事があるから後で、という訳には行かなくなつたHマは、

「ごめんねハナハナ、一人で行ける？」

ハナハナは、「うん」と頷きました。

元はと言えば自分が捲いた種です。エマの家へは、なるべくなら行きたくありませんが、

覚悟を決めて、椅子から立ち上がりました。

「じゃあ、行つて来ます」

ハナハナが玄関から出ようとした時、突然扉を叩く音がしました。

「ミヤミさんっ？ ミヤミさんっ！」

エマのお母さんのナーナの声です。ミヤミはハナハナに奥に戻るよつに言つと、ドアを開けました。

「こんにちは」

「こんにちはじゃないでしょうっ？」

ナーナは挨拶もせずに、いきなり家中へ入つて来ました。

「あなたは、一体子供達にどういうしつけをなさつてるのっ？」

強く言つと、夏だというのに肩に掛けたレースのショールの方端を引き上げました。

「ハナハナが、エマちゃんを叩いてしまつた事かしら？」

「そうよつ！ エマは痛い痛いつて、それはもう可哀想なくらいに泣いて帰つて來たのよ

「つ！ あんな可愛い子を、どうして叩いたり出来るのっ！」

「それはっ！」部屋の奥に居たハナハナは、ナーナの言い方にかつとなつて言い返しました

た。

「エマがモモのお人形を無理矢理取ろうとしたからよつ！」

「そんなはずありませんっ！」

ナーナは、猫というより狐の妖魔のような鋭い目つきで、ハナハナを睨みました。

「エマはとつてもおつとりした子なんです。人のものを欲しがるなんてそんなはしたない事、する子じゃありませんっ！ それに、エマには宅の主人が、

「うん」と頷きました。

この村のどの子よりた

あくさんおもちゃ やお洋服を「えています」

「でもつ、ヒマはモモのお人形が可愛いから欲しいって、無理矢理
引っ張つて取るうとし

たのよつ！」

「あり得ないわつ！」

「ナニイイミイミが静かに言つました。

「確かにハナハナがエマを呪いたのはいけないこと、謝ります。でも、エマがモモのお人形を欲しがつて引っ張つたのも事実よ。それは、ヒマとモモの両方が悪いわ

「どうしてうちの子が悪いの？ 大体、ハナハナはリック達いたずら兄弟やら、ニニイの子供達とも仲が良かつたんでしょう？ そんなどもの、乱暴な筈だわ」

それにはママおばさんが怒りました。

「ちょっとナニイツ！ うちの子供達の何処がいたずら小僧の乱暴者だつていうのつ？」

ナニイは小柄なママおばさんを、横柄な態度で見下ろしました。
「あつちこつちでいたずらをしでかして、村中迷惑してるのはみんな知つてると思うけど

？ もしママが「存じないなら、それは親としては全く田が届いてない」ということねえ

「言わせておけば…つ！ あなたの家のわがまま娘の方が、よっぽど村の人達に迷惑掛けてるんじやあないのつ！」

「まつ！ あんな大人しくて可愛いエマの、何処がわがままだつていうのよつ！」

その9 わがままHマ（4）

「自分のおもちゃだけじゃ足りなくて、人のものまで無理に取らうとするの、何処がわがままじゃな」って言つの？」

「あなたのところの悪ガキじゃあないのよー。Hマはそんなことしませんっ！」

放つておくと何処までも言つて慕うつた勢いの一人を、Hマが止めました。

「二人ともっ、じんなとこいで言つ合つしても仕方ないでしょ」
「だつて悔しいじゃな」

マーマおばさんは涙声で言いました。

「うちの子達、そりや確かに少し腕白だけど、そんな、人に嫌われるような事はしてないわつ、それを……」

「それが分かつてな」
「うつむきのHマはそれこそ虫も殺さないおつとりなのに、

それをわがままで迷惑な娘のよつて言つなんつー。それより、そもそもはミミ、あなた

たの妹がうちのエマを殴つたのが原因じゃあないの？」

「それは、だから申し訳ないと……」

「いいえつ、そんな誤り方じゃあ納得出来ませんっ！」

ナニイは、今にも火を吹きそつた形相でミミを見詰めました。

「私、ここでこんな侮蔑的な言葉を浴びせられるなんて思つてもみませんでしたわつ！」

それも含めて、もう絶対にあなた達を許せませんっ！ じつは、長老に全て申し上

げて、妖精の長からあなた達をきつづけつーくお叱り頂きました

！

怪氣炎を上げるだけあげて捲し立てる、ナニイは入って来た時
同様、挨拶もしないで
ミイミの家を出て行きました。

乱暴にドアが閉められるのを、ミイミとマーマおばさん、それに
ハナハナは呆気に取ら
れて見送りました。

「で、これからどうしたらいいの？」

こじれてしまったエマとハナハナとの問題を、なんとかするのが
先です。

ハナハナに聞かれて、ミイミは「そうね」と、ちょっと考える仕
種をしました。

「まずは、ナニイがああ言つてゐし、いつもおじいも長老に一応事の次第
を話しておきましょ

か？」

「そうね、それがいいわ」

ワツフルどこのではなくなったマーマおばさんは、お昼が済んだ
ら長老を訪ねることを
ミイミと約束して、家へ帰りました。

「さて、それまで時間もあるし。とにかくお昼ご飯を作つて食べて
しまいましょ」

ミイミはいつもと変わらない様子で、よいしょと椅子から立ち上
がると、台所へ立ちま
した。

玄関扉の近くの籠からじやがいもと玉ねぎを取り、いつもと同じ
に皮を剥き始めます。

こんな大変な事態でも、『飯の支度を変わらず出来るなんて。
普段通りのミイミの後姿に、ハナハナは自分のお姉さんは大した
人だと、改めて尊敬の
眼差しを送りました。

お皿が済んで、ママおばさんが再びママとハナハナの家へやつて来ました。

その少し前まで、お母さんが自分の事でママのお母さんと喧嘩してしまったと知ったモモが、大泣きに泣いていました。

それをハナハナが宥めて、漸くモモはお昼寝に入りました。

モモとフレイが眠つたのを見計りつて、ミミはハナハナを連れママおばさんと一緒に長老の家へ行きました。

新しくなった玄関を叩くと、中からニーニヤが出てきました。三人が中へ入ると、ニーニヤは小声でハナハナに言いました。

「来てるよ、ママとお母さん」

「えっ？ もう？」

ニーニヤは真顔でうつくり頷きました。それからこつと笑いました。

「なんか、いいことしあやつたんだって？」

ハナハナはこいつと答えました。

「ママの事、叩いた」

ニーニヤはうふつ、と笑いました。

「いい気味。あの子ショッショウみんなにわがまま言つて、その前ではいい子ぶつてて、可憐くないもん」

今一階に居るから、と叫びつて、ニーニヤは一階の集会所の椅子を三つ揃え、三人に勧めました。

「……何話してんのかな」

呟いたハナハナに、ママおばさんが、

「どうせ嘘八百よ」

「ママミミが苦笑しながら置めました」

程なくして、一階の長老の部屋の扉が開く音がしました。

女人の甲高い声が一階の廊下をこっちへ近付いて来ます。まだ

興奮したようにしゃべ

り続けているのは、きっとHマのお母さんナーナイでしょう。

果たして、ナーナイとHマ、それに長老が、しゃべりながら階段を

降りて来ました。

その9 わがままHマ(5)

「ですでので長老、何とぞあの人達にきつておっしゃって下さい。もう酷い嘘でうちの子をいじめないよう」

一階に降りたナニイは、そこにハナハナ達が居るのを見た途端、今までしゃべつていた

口を、まるでクルミ割り人形のようじぱぐん、と閉じました。

長老はミヤミとナニイを交互に見ると、静かに言いました。
「まあ、とにかく両方の話を聞かんとな。……ナニイ、悪いがミヤミ達の話が終わるまで、

ここで待つて貰えんかの？」

「あ？？はい」

ナニイは、先程とは打つて変わった大人しさで頷くと、エマと共にニーニヤの用意した

椅子に腰掛けました。

長老は一人が落ち着くのを見計らつて、三人の方へと寄りました。
「さて。ナニイから事のいきさつは粗方聞いた。で、おまえさん方が言いたいのは？」

促されて、えへん、とママおばさんが咳払いをしました。

「お人形を壊したのは、聞いたところエマの方です」

「そんなん！」ナニイがまた、金切り声を上げた。

「まだそんな嘘を言つの？ うちの子は……」

「黙らっしゃいっ」

長老のひと声で、ナニイは黙りました。ハナハナは、長老がこんな大きな声を出したの

を初めて聞いて、びっくりしました。

「あなたの話はさつき聞いた。今はこっちの話を聞いておる。心を落ち着けて、人の話を

聞いておりなされ

ナーナイが、恥じ入つたように俯きました。

お母さんが萎れたよつになつたのを、エマは不安やつて見ています。

「ハナハナ」

突然、長老が声を掛けてきました。

「はい」

「マーマさんの言つ通り、かの？」

「あ、ええと……。はい、大体はそつです」

「大体、とは？」

「うん、と……」

ハナハナは少し考えてから、言いました。

「初めは、エマがモモのお人形を欲しがつて、自分の持つて来たおもちゃと交換してつて

言つてました。でもビービーもモモがやだつて言つて、エマが無理にお人形を取つてしま

つて、それをモモが取り返そつとして引つ張りつこになつて。そのままじやお人形が壊れ

ちやうつて思つて、私がエマの手を叩きました

「めんなさい、と、ハナハナは小さな声で言いました。

長老はふむ、と白い顎鬚を撫でました。

「なるほど。と、いつことせ、エマはモモのお人形が何としても欲しかつたんじやな？」

長老は、な？ とエマを見ました。

「そんなこと……」

お母さんのナーナイが言つ掛けるのを手を挙げて止めると、長老は

「ん？ どうじや？」

と、もう一度エマに問いました。

エマは、長老に嘘や言つて詰は通じないと悟つたようです。ゆつくり俯くと、小さな声で

「はい」と言いました。

人の物を欲しがつた事を認めた娘を、ナーニは驚いた顔で見ました。

「まあエマっ！ どうしてっ？ あんなたくさん父様からお人形も頂いてるでしょ？」

お母さんに詰られて、エマはますます下を向きます。

「なんで、モモちゃんのお人形なんか……」

「だつて……」

「父様が人間の街で、あなたが気に入るだろ？ て、可愛いきれいなお人形、この間も一

杯持つて帰つて下さつたじやない」

「だつてつ！」エマは、我慢出来ないという風に、大声で言いました。

「だつてつ！ モモのお人形は猫の妖精だつたんだものっ！ 私とおんなじ姿をしたお人

形だつたんだものっ！ 人間のお人形じやなかつたんだものっ！」

ハナハナは、それでどうしてエマがみんなのものを欲しがるのか、やつと納得出来ました。

た。

エマのお父さんは、人間の大勢住む大きな街で、ずっと商売をしています。妖精は人間の街の中では必ず、魔法で人間と同じ姿になります。

そうやつて長く人間の姿をしているエマのお父さんは、きっとすつかりそつちの姿に慣

れてしまつて、むしろ本来の猫の妖精の姿の方が不思議に思えるようになつてしまつて、たのでしきう。

だから、娘にも人間のお人形を買つてあげて、それが普通だと思つてしまつたのです。

でも、パツセルベルで暮らしているエマは子猫の妖精の姿です。

人間の子供のお人形は、確かにきれいだけれども、それは自分と同じではありません。

エマは、自分と似た姿のお人形が欲しかったのです。

その9 わがままエマ（6）

それと同時に、他の子供達が持つているような、お父さんお母さんが一生懸命子供達の

事を思つて作つてくれた、手作りのおもちゃが欲しかったのです。モモのお人形は、ミイミがモモに似せて、クリーム色の毛並みが可愛く揃えられています。

した。

エマも、自分に似せた銀のふわふわの毛並みの、子猫のお人形が欲しかつたのです。

「エマ……」

ハナハナは立ち上がると、泣き出していたエマの前へ立ちました。「手を叩いたりして、『ごめんね』

「ハナハナ……」

「あのね、今度一緒にお人形作らない？ ミイミお姉さん、作るの上手だから、一緒に教わろうよ？」

エマは不思議そうな表情でハナハナを見上げました。そして「うん」と泣き笑いの顔で頷きました。

「よかつたの」

長老が、黙つて二人を見ていた大人三人に、にっこり笑いました。

翌日。

村長の家でハナハナ達が勉強していると、ひょいと長老が覗きに来ました。

「あ、長老さま」

気が付いたリックが声を掛けると、長老はにっこり笑つて教室に

なっている居間へ、入つてきました。

「ちょっとといいかの？」アルベルト先生

「文字を教えていたふくろうの妖精のアルベルト先生は、「いいですよ」と長老に教壇を譲りました。

「ありがとう。？？ もて。昨日この村でひょっとした出来事があったのは、知ってるかの？」

長老の言葉に、ハナハナと、お母さんのマーマおばさんから聞いて知っていたリックとニックが顔を見合わせました。

エマは来ていません。彼女はナーナの方針で、パッセルトーンから特別に家庭教師を呼んで家で勉強しているからです。

長老は、話が分からぬ大半の子供が「何だらう？」とざわめくのを、「まあまあ、知らんならよい」と静めました。

「その事は、まあ別にいいんじや。わしが話したいのは、その出来事についてじやないで

な。……なんで、猫の妖精がこの世界にあるか、という事なんじや」ハナハナは、長老の不思議な言葉にどきどきしました。

どうして、この世界に自分達猫の妖精がいるのか？ そんなこと、今まで一度も考えた事はありません。

どうしてだらう？ なんで、私達はここにいるの？

長老は続けました。

「……もつずつと、ずつと大昔の話じや。この世界には他の世界からの出入り口が、幾つも開いておつた。元々、この世界に先に住んでおつたのは、四体

の龍王と人間だけじゃ

つた。そこへ、開いた出入り口から他の世界の人々が、来たりまた出て行つたりしておつた。その中に、わしら猫の妖精や木ねずみやシマリスの妖精達がおつた。

最初、わしらはこういつ外見はしておらなかつた。もつと違つた……、人間から見たら、得体の知れない形をしておつたそうじや。そう、人間が悲鳴を上げるやも知れん、途轍も無く奇妙な

それはどんな姿なんだろう? ハナハナは想像もつかないそれを、一生懸命考えました。

「じやが、それでは人間を怖がらせてしまつ。それで、わしらのご先祖は得意の魔法で、

この猫の妖精の姿に変わつたんじや。これなら、びっくりはされても人間に物凄く怖がら

れたりはせんから。……まあ、魔法で姿を変えられるなら、人間そつくりに変えてもよ

かつたんじやが、それだと仲間同士の見分けがつかなくなるので、猫やシマリスや木ねず

みにした、とも、伝えられたある。して、何代も何代もこの姿を継続していくうちに、いつしかこれが本来の姿になつた。

わしらのご先祖は、そつやつてこの世界へ住み着いた。何でかと言えば、ご先祖がこち

らへ来る直前、『大いなる予言者』がひとつ予言をしたからじや。それは、この世界に

別の場所から魔王がやつて来て、全てを破壊してしまつという「

子供達は、まだざわめきました。

魔王の話は、村の大人達から断片的にですが聞かされて、みんな

大体は知っています。

特に猫の妖精の子供達は、親やその兄弟が魔王と戦つた経験を持つている人が多いので、

みんな緊張してぴん、と耳を立てました。

ハナハナも、ミヤミからお母さんとお父さんが魔王と戦つて死んだと聞いているので、

長老の言葉にはどきつとしました。

「……予言は、一千年前にされたものじゃ。」先祖が住み着いてすぐには、魔王は手下をこ

の世界へ寄越した。先祖はすぐにその魔物達を退治したんじゃ。

じやが、全部手下を殺すのではなく、改心して悪さをしないと誓つた魔物は許して住み着く許可を与えた。それ

が、今日居る妖魔達じゃ。

そのうち、ハイエルフや他の妖精族もやつて来て、皆協力して魔王に対抗することにな

った。ハイエルフが加わった事はとても大きかった。彼等は魔力も武力も、他のどの種族より優れていたからの。

その9 わがままHIM(7)

それから、人間。わしらの「先祖はある程度力を持つている人間にも協力を仰いだ。もちろん龍王にも。

だから、予言から五百年後、本格的に魔王が攻めて来た時には、一致団結して早い時期に魔王を撃退出来た、といふことじや。

長老は、そこで一度口を閉じました。

リックが「はい」と手を挙げました。

「一度撃退したのに、どうして魔王はまたやって来たんですか?」

「ふむ、よい質問じや」長老は微笑みました。

「撃退は出来たのじやが、魔王を殺してしまつ」とは出来んかった。なので、魔王は一度

自分の世界に戻り、再び力をつけてこの世界へやつて來た。それが、この間の戦いじや。

この間の戦いの前、また『大いなる予言者』が予言をした。それは、今度こそ魔王を消滅

させる力を持つた者が、この世界に生まれるといふものだった。予言では、それは猫の妖

精の子供として生まれる、とされた。その事を知った魔王が猫の妖精達を殺そうとしたん

じやが、またしてもハイエルフを主力とするこの世界の者達によつて撃退された。

「じゃ、また追い払われただけなんですか?」
小ねずみのチャーリーが聞きました。

「そう、追い払われただけじや。

魔王は、従つてまたすぐこの世界にやつて來よつ。その時のために、わしら妖精族は自

分達の力を蓄えて強くしておかねばならん。 それには、どんなことをすればよいと思うか

१८

ハナハナ、と長老に聞かれ、ハナハナは考え考え言いました。

「魔法が……、ちゃんと使えるようにしておけ、とか？」

「それもある。では、魔法はどうやって使うのかの？」

小さな子供でも、妖精の子ならちょっとした魔法は使えます。例

えば、お菓子を田に浮

かせたり、飛ばせたり。

けれど、それは『どうせいつてやつてこぬのか、ハナハナ達はは

知りません。

長老は「ちよつと難しいかの」と、ずっと教室の隅で黙つて長老

の話を聞いていたアル

ベルト先生を振り返りました。

先生はにつこり笑うと、

「『心』です。僕達妖精は、心でこうと思つたことを、現実にする

力が生まれながらに備
つつニハミト。ゲニヒ、ラバ雲霧つニシミツニリ、ハシラシミツニリ

れています でも 心が靈 てしまひたり
益んでしまひたりす

ると、その力は弱くて

魔法は使ふなくなりてしまふ。「二つめの魔力。」

——そこの通り、実際には魔法だけでは無くて、自分の命まで危うくなれる。

くなるそれくらい

その心は、ではどんなことをしたら曇つたり歪んだりするのか？」
リックが、弟の顔をちらつと見ました。ニックは兄の顔を見なが

「う、手を挙げました。」

「ほい、ニツク」

「あの、昨日の夜僕ら兄弟で話してたんですけど、もしかしたら、

心が曇るのは、人のも
のを欲しがつたり、恨んだり憎んだりすると、じゃないですか?」

「つむ。その通りじゃ」

長老は、白い鬚を振つて頷きました。

「それで最初の話じゃが……。昨日起きたちよつとした出来事は、まさにその心の曇りに
関係あるんじや。」

ある女の子が、友達のおもちゃをどうしても欲しくなり無理矢理取り上げようとした。

友達は、お母さんが作ってくれた大切なおもちゃを取られたくなくて、とうとうその子と喧嘩でしもうたんじや。

単純に考えれば、無理に友達からおもちゃを取ろうとした子の方が悪いと思えるの？

じゃが、心は違う。

実はどちらもよくないんじや。人の物を欲しがる心も、人に下さいと言われて上げない心も、どうもよくないんじや。おもちゃは、もし取られてしまつても事情を話してお母さんに作つて貰えればそれで済む。じゃが、喧嘩して壊れてしまつた友情という心は、中々直す事は難しい。

妖精族にとって、友情や家族や恋人への愛情は、すぐに自分の命の力となる。これが、わしらが魔王に打ち勝つ唯一の武器じゃ。だから、無闇に喧嘩して一生心に傷を残すような事をしてはいかん。少しでも自分に非があるなら、素直に謝つて、大切な友達を大事にするんじや

「長老はよつこらしょ、と立ち上がりました。

「やれ、長くなつてしまつて、悪い事をしたの。わしの話はこれで終いじや」

みんな、しつかり勉強せいや、と、長老は部屋を出て行きました。ドアを閉める寸前、長老はハナハナに向かって手招きました。ハナハナは何だろう、

と思いながら廊下へ出ました。

「長老さま」静かにドアを閉めて、ハナハナは廊下の窓の下に立つている長老のところへ

行きました。

「さつき、ナニイヒエマに会うて来たんじや」

「……はい」

「今みんなにした話を、エマにも聞かせて来た。ナニイには、欲張りはほどほどにせいと、

言つておいた。二人とも、至極反省しておつた

「そうですか」

神妙な表情のハナハナに、長老はにっこり笑いました。

「これからは、モモも含めて、仲良う遊べるな？」

問われて、ハナハナは満面の笑顔で答えました。

「はいっ」

うんうん、と嬉しそうに長老は頷くと、「ではな」と手を挙げて村長の家を出て行きました。

帰つてから、ハナハナは長老から聞いた話をミミミニしました。フレイのチヨツキの繕いをしながら聞いていたミミミは、ハナハナが話し終えると、

「そうね」と溜め息をつきました。

「確かに、長老のおっしゃる通りよ。でもね、いくら妖精でも人を憎まないのって難しい

わ。だから、そうね……、喧嘩してしまつたらなるべく早く仲直りする方法を探す事が、

一番いいことかもしれないわね」

ふうん、そつか、とハナハナは思いました。

喧嘩はいけない。自分達妖精は、『心』で生きているから。

そこでハナハナはふと、最初にエマが失礼なことを言った時、怒つたハナハナを//ミミ

が止めた時の言葉を思い出しました。

「ねえお姉さん、エマが私にお母さんがいない子は大変って言った時、私がエマをひっぱたこううと思つて怒り掛けたら、『笑つて「やつね」って言つておきなさい』って言つたよ

ね？ あれも、喧嘩しない工夫？」

「そうよ」//ミミは、小さな妹に、まるで女神様のように微笑みました。

「エマが言つた事は、つまらない人が言つつまらない言葉。そんなことをいちいち気に掛けて喧嘩していたんじゃあ、自分の命が縮んでしまつもの。だから、ああいう言葉は聞き流してしまつのが一番なのよ」

「……そつか

隣室でお昼寝していたモモとフレイが、起きて来ました。

ミミはお水を欲しがる下の子を膝に乗せて、カップを支えて水を飲ませてやります。

ハナハナは、モモにお水を汲んでやりながら、やっぱり自分のお姉さんは凄い、とまた

また改めて尊敬の気持ちを強くしました。

その9 わがままHマ（7）（後書き）

その9 わがままHマは、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次のお話は、「赤い帽子青い帽子」です。
ミヤミの幼馴染みのレニアは、リンデンという弟がいます。
猫の妖精には珍しい、画家のリンデンは、しかし姉が嫁いでからは
絵に夢中で家事がろくにできていません。
心配したレニアは、なんとかリンデンにお嫁さんを、ヒリヤミに相
談しますが……

「どうなつましくやが。

お楽しみに。

その10 赤い帽子青い帽子（1）（前書き）

秋が訪れるパツセルベル。

これから寒い季節ですが、なぜかハナハナがあつたかい天使に？

その10 赤い帽子青い帽子（1）

トネリコの枝下丁日に、猫の妖精リンディンさんが住んでいます。今年で23歳のリンディン

さんは一人暮らし。一年前に一緒に暮らしていたお姉さんのレニアさんが、パッセルトー

ンの材木商の若田那のところへお嫁に行きました。

リンディンさんの職業は、妖精の仕事にしてはちょっと珍しい画家です。子供の頃、画家になりたいと言つたリンディンさんの絵を旅芸一座のトーベルさんが見て、以来画家になる応援をしてくれていました。

去年トーベルさんの知り合いの人間の画商に見せたところ、絶対売れると絶賛、すぐに街で買い手がつきました。それから、リンディンさんは画商と手紙でやり取りしながらせつせと注文をこなしています。

しかし、忙しくなり始めたリンディンさん、一人暮らしのせいで、家事がおろそかになりがちです。

ともすれば食事も忘れて絵に没頭するリンディンさんに、レニアさんは心配でならないようです。

「どこかにいい人がいないかしら」

久し振りにパッセルベルへ帰つて来たレニアさんは、幼馴染みのミヤミの家へとやつて来ました。

「もう、リンディンったら、洗濯は籠に入れっぱなしだし、お台所は片付けてないし。一日

中絵ばかりで。しかも使い終わった絵の具のチュークがあちこちに落っこちてるのよ。やんなつちやう

台所で、ミイミが勧めたお茶を飲みながら、レニアさんは溜め息をつきました。

「弟があんなになるんなら、私、お嫁に行かなきやよかつた……」

「あら、それはダメよ。レニア」ミイミが笑いながら言いました。「亡くなつたご両親の代わりに、あなたずっとリンדוןの面倒を見て来たじゃない？ お

陰で結婚するのが遅くなつたんだから。それを一番気にしたのはリンדוןでしょ」

「それは、そうだけど。でも、兄妹の面倒を見てるつて言つたら、ミイミだつて同じでしょ？」

ハナハナは、二人のお茶を煎れ替えながら、そつ言えど、リンדוןさんつてよくマーフの泉の側で絵を描いてるな、と思いました。

お姉さんのレニアさんにそつくりな、薄灰青の毛並みをした青年で、黙々とキャンバスに向かつて筆を動かしている姿は、知的でちょっとかっこよかつたりします。

「誰かいい人、いないかしら」

また、レニアさんが溜め息をつきました。

「いないかつて……。一人いるんじゃないの？ ほら」

ミイミは、手振りでレニアさんに言いました。ハナハナは誰だろう、とちょっと首を捻りました。

「ああ、アマンダね。……うーん、いい娘なんだけどねえ」

アマンダさんは、リンדוןさんの家の隣に住んでいる、猫の妖精の娘さんです。

一昨年一緒に住んでいたおじいさんが亡くなり、今は一人暮らし。

おじいさんの仕事だ

つた帽子作りを引き継いで、作った帽子をパッセルトーンの洋品店に納めています。

とても大人しい人で、しかも容姿も地味。赤茶の毛並みに、いつも焦げ茶のワンピース

ドレスで、出掛ける時は口傘を差して俯いて歩いています。

「アマンダ、いくつになつたのかしら?」ミヤミはお茶うけのクリーを、ぱり、と割り

ました。

「確かに、今年で22歳よ。でもあの娘、大人し過ぎて、ねえ……」「うーん、とレニアさんは難しい顔をしました。

「大人しいのは悪い事じやないわよ。跳ねつ返りよりはいいでしょう? それに、あれで結構気さくよ」

「そりなんだけどねえ……。暗いのが気になつて」

「それは……」ミヤミは、言い掛けて口を噤みました。

ハナハナは、何だろ?、とお姉さんの顔を見ました。

「……まあ、ハナハナも知らない訳じやないから。アマンダの『両親も、レニアや私達の

両親と同じように、魔王と戦つて亡くなつたの。それから、アマンダはおじいさんとずっと二人暮しだつたのよ」

「両親が亡くなつてショックだつたのは、彼女だけじやないんだけどね」

レニアさんが言いました。

「あの娘は、元々内気な子だつたから。『両親の死を聞いて、余計内向的になつちゃつたのね」

「そりなんだ」ハナハナは小さく頷きました。

「でも、リンデンとアマンダのこと、悪い話じゃないと思つけど?」

ミーミの言葉に、レニアさんはまたうーん、と唸りました。

「まあ、確かに。でも、アマンダもなんだけど、リンデンも大人しいから困るのよ。とい

うより、あの子つたら、今は絵に夢中で、きっと女の子の事なんか頭にないわ」

「どうにか、気を向かせるように考えないとねえ」

レニアさんとミーミは、同時に溜め息をつきました。

大人の事情つて難しい、と、ハナハナはお茶を飲みながら思いました。

その10 赤い帽子青い帽子（2）

翌日。

ハナハナはミヤミヤに頬まれ、フードのワトソンさんの奥でここに
けものをしに出掛けま
した。

朝から風が強く、トネリコの枝がわざわざと揺れています。枯れ
た葉が二、三枚飛んで

来て、ハナハナは思わず顔を背けました。

「うつわつ」風にあおられたエプロンを押された時、風上から帽子
が一個、飛んで来ま
した。

咄嗟に、ハナハナはエプロンを離して帽子を押さえました。

ひとつは赤い帽子で、脇に赤い木の実と葉っぱの「サージュ」が飾
られていました。もう

ひとつは青い帽子で、そちらは男物のつば広のものでした。
ハナハナが綺麗な二つの帽子に見惚れないと、風上から帽子の
持ち主が駆けて来ま
した。

「ありがとう」

こり笑つてそう言ったのは、アマンダさんでした。アマンダ
さんは、風に飛ばした

帽子の他に、もう五個くらい、帽子を持つていました。

「はい。……あの、これ全部パッセルトーンまで持つて行くんです
か？」

一人で大変なのは、と、ハナハナは帽子を渡しながら聞きました。
た。

アマンダさんは微笑んだまま、じつくりと頷きました。
「ええそうよ」

「あの、よかつたらお手伝いしましょうか？」

「ありがとう、大丈夫よ。慣れているから」

アマンダさんは、またにつこり笑いました。その笑顔は、まるで

満開の金木犀の花のよ

うでした。

小振りながら艶やかな匂いを放つ、愛らしい金木犀の花。ハナハナがアマンダさんの笑顔に驚いている間に、帽子を受け取つたアマンダさんは、

大きな綿の布で、手早く帽子を包みました。

「じゃあ」

幹の方へ歩いて行くアマンダさんを、ハナハナは黙つて見送りました。

「綺麗なひと……」

ワトソンさんの家への届けものを済ませ家へ帰つたハナハナは、その話をミイミにしました。

した。

「びっくりした。アマンダさんて、ほんとに綺麗な人なのね」

「そお？ そうだったかしら」

「そうだよ、というハナハナに、ミイミは小首を傾げます。

「目立たない容姿の娘だと思ってたけれどね。ハナハナがそう言つのなら、そなのかし

ら」

「うん、とっても綺麗に笑う人よ。それに、優しいし」

「そうね。優しい人ね。……ああ、だからハナハナは綺麗だと思つたのね」

「え？」お姉さんの不思議な言葉に、ハナハナはきょとんとしました。

「優しいと、綺麗なの？」

「そうよ。私達妖精は、心の形がそのままその人の印象になるの。だから、心が綺麗だつ

たり、優しい人は、とっても素敵に見えるのよ

「そなんだ」

「アマンダは、物凄く美人ではないけれど、心が綺麗だから、ハナハナにはとっても美人

に思えたのよ。……いい人ね」

うん、とハナハナは頷きました。

「リングドンさんと、ほんとにお似合いだと思つけどなあ

ハナハナは、よくマーフの泉で絵を描いているリングドンさんを思い出しました。

とてもハンサムなあの絵画をさんとアマンダさんは、とってもいいお嬢さんお嫁さんに

なるように思いました。

「ねえお姉さん、リングドンさんとアマンダさん、何とかくつつかないかなあ？」

「まあハナハナ、くつくなんて、ちょっと乱暴な言い方よ？」

「いめんなさい。でも、」の間レニアさんとお姉さん、話してたでしょ？ アマンダさん

がリングドンさんのお嫁さんになればって」

「そうね……。けど、二人が親しくなる切っ掛けが、ないものねえ

「お隣同士なのに？」ハナハナは首を傾げました。

「アマンダさんがリングドンさんに、お料理のお裾分けをしたり、お庭掃除のお手伝いをしたり、しないのかなあ？」

ハナハナの家のご近所では、みんなよくやつてていることです。

「それをしていてくれれば、話は早いんだけど。アマンダは帽子作りに夢中、リングドンは

絵を描くのに夢中、じゃあね」

小さく溜め息をついて、ニヤニヤお皿の支度をするために立ち上がりました。

「そつかあ……」ハナハナも、姉に釣られて溜め息を漏らしました。

台所の桶に水を汲む姉の後ろ姿を見ながら、ハナハナはふと、ある事を思い付きました。

「ねえお姉さん、ダンスパーティって、どう？」

「え？」いきなりの妹の言葉に、ミイミは思わず振り返りました。ハナハナは、ぴょんと椅子からと飛び下りると、ミイミの隣へ行きました。

「ね？ ダンスパーティ。秋のお月見のパーティって事で、村の人達に協力してもらえば」

「パーティねえ。……うん、いいかも知れないわねっ」

午後早速、みんなに話してみましょう、とミイミは微笑みました。

その10 赤い帽子青い帽子（3）

次の日早速、ミヤミはネービルさんの家の集まりで、奥さん達にその話をしました。マ

「おばさんを始め、マラーニャやネービルさんまで大賛成でした。」
「ああ、ダンスパーティなんて、若い頃を思い出すわ。よく、パッセルトーンの春祭りに、

主人と踊りに行つたのよ」

「ど、ネービルさん。

それを聞いて、ママおばさんが言いました。

「そういえば、パッセルベルでは、何時の間にか春祭りをやらなくなつてましたねえ？」

「魔王との戦いがあつたから。あの頃、みんな戦場へ行つた人達の事を考えて、お祭りなんかは自肅していたでしょ。それがそのままになつたのよ」

「ワトソンさんの奥さんのリーリアさんが、声を落としました。

奥さん達は、みんな表情を曇らせました。

「……でも、もうあれから十年も経つてているのだから、そろそろお祭りもいいでしょ？」

「ね？」

「ママおばさんが、苦笑といつ感じで笑いました。

「そうよね……」

「楽しい事を、子供達にも教えてあげないと」

奥さん達は、また元気を取り戻して頷き合いました。

「でも、春祭りじゃあ随分先よね？」

「秋祭りって事で、どお？」

「お月見ダンスパーティは？」

「ミヤミが、ここだとばかり言いました。

「それ、いいわねつ」奥さん達がみんな賛成しました。

「じゃあ、それで長老にお話しましょつ
掛け合ひ役をミヤミがつて出ました。

ミヤミは、ネーベルさんの家の集まりから帰つてすぐこ、長老の
家へ行きました。

事情を話すと、長老は、

「ふむ、それはよい案じや。春の旅芸一座が居なくなつてから、村
のものには楽しみが無
い。サウルにはわしから言つておくから、ミヤミ達かみさん会で、
話をどんどん進めな
い」

その話を、ミヤミが帰つて聞いたハナハナは、嬉しくて、台所で
小さく跳ねてしまいま
した。

「ダンスパーティつ！」

「さあ大変、どんどん準備しなくつちや」

「何を着て行けばいいの？」

「そつねえ」

一人が楽しそうに話していると、子供部屋からモモがやつて来ま
した。
「ずるーーー、お母さんとお姉ちゃん、一人だけで楽しそうなお話
してる」

「あのねえ、村でダンスパーティーをやるの」

「ダンス、パーティー？」よく意味がわからなくてきょとんとするモ
モに、二人はあははと
笑いました。

さて。

長老の承諾も得たので、ミヤミ達奥さん会は、村中にパーティーの
話を伝えました。

もちろん、リングドンさんとアマンダさんにもその話は伝わりました。

「やっぱり、パーティには踊る人と一緒に行かなきゃならないのよね……」

この間の風の強い日、ハナハナが大事な売り物の帽子拾つてくれたお礼を言つて、アマンダさんがあのミィの家へやってきました。

ちょうどその時、トシドさんの奥さん、新婚のミントさんが遊びに来ていました。

ちょっと話していくば、ところがアマンダの誘いで、アマンダさんは、

「じゃあ、お茶だけ」と台所へ入りました。

話は自然とパーティのことになつ、ミントさんは田那さんと踊るのを楽しみにしている

ことを、嬉しそうに言いました。

「アマンダは、誰か好きな人はいないの？」

「えつ？」

ミィの質問に、アマンダさんは急いで首を振りました。けれど、顔は真っ赤です。

「そんな人、いないわ」

「そう……。だったら、お隣の画家さんと行けば？」

突然ミントさんにリングドンさん这件事を言わされて、アマンダさんはますます真っ赤になりました。

「だって……、リングドンさんは、別に好きな人がいるかもしれないし……。私みたいな、目立たない女じゃ……」

台所の端っこで、自分の椅子を引き寄せて座つていたハナハナは、なるほどと思いましました。

アマンダさんは知らないのです。

その10 赤い帽子青い帽子（4）

自分がどんなに綺麗な心の持ち主なのかを。リンדוןさんがそれを知つていれば、絶対アマンダさんを好きになるはず。

そう、ハナハナが言おつかどうかと思つてると、ミイミが口を開きました。

「そんな事ないわ。あなたはとつても素敵よ。妖精なら、心が綺麗な人は姿も綺麗だつて、

絶対知つてるもの、リンדוןは必ずあなたを誘うわ」

「そう……、かな？」半信半疑なアマンダさんに、ミントさんが力強く頷きました。

「絶対よつ」

二人が帰つてから、ミイミがハナハナに言いました。

「ハナハナは、アマンダさんの応援をしたいような顔、してたものね」

「え？ じゃあお姉さん、私の心を読んだの？」

ミイミが魔法を使ったのかとびっくりしたハナハナに、ミイミはくすつと笑いました。

「顔に描いてあつたのよ。……それにしても、アマンダ、やつぱりリンדוןが気になつてたのね。さて、これからどうやつたら、一人をくつつけられるかしら？」

「あーっ、お姉さんだつて、くつつけるなんて言つてるわ」

自分を注意しといて、とハナハナはわざと頬を膨らませました。

ミイミは肩を竦めてぺろりと舌を出しました。

「けどほんと、どうやつたらあの一人の仲を取り持てるかしらね？」

「お姉さん、帽子は？」

「帽子？」

「うん。男の人に、自分が一番いいと思う帽子を被つてパーティに来てもらひの」

だめかな、と、ハナハナはミミの顔を見ました。

ミミにちよつと考へてから、「うん、そうね」と頷きました。

「そう言えば、パッセルベルの男衆は、みんなお気に入りの帽子を、こじわつて時には被つて来るわ。アマンダがリングドンに帽子を送れば……」

「ね？ いいアイデアでしょ」

「じゃあ、みんなにそれを話してみましょ」

奥さん会で帽子の話をしたところ、では男だけでなく女人達も白慢の帽子を被つて踊る、という事になりました。

そうなると、さあ大変です。女人達は帽子を新調しようと、こそつてパッセルトーン

の洋品店に出掛けました。

パッセルトーンのお店でも、パッセルベルの奥さん達が大挙して帽子やらドレス生地やらを買うので、おおわらわになつてしましました。

特に帽子は、男性用も売れて、お店は急いで職人さん達に発注を掛けました。

当然アマンダさんのところにも、大量の発注が来ました。

パーティまであと一月とちよつと。アマンダさんは自分のドレスを新調するところではなくなつてしましました。

「困ったわね。これじゃ逆効果だわ」

心配して様子を見に行つたママおばさんが、食事もそこそこ元気で針仕事を続けるアマン

ダさんの様子を奥さん達に伝えました。

「みんなで、何とか手伝えないかしら？」

「アマンダに聞いてみるしかないわね」

「発案者のミイミも、責任を感じて言いました。

そもそもの言い出しつペのハナハナも、これは大変な事になつた

と、ミイミと一緒に手

云つもつでアマンダさんの家へ行きました。

しかし。

「大丈夫ですよ。みなさんにじい心配お掛けして、すみません」

アマンダさんは、明らかに寝不足だと分かる疲れた顔で、笑つて申し出を断りました。

「無理しないで。私達に出来る事なら、何でも手伝つんだから」

「やつよ。そもそもパーティの計画をしたのは、私達なんだし」

口々に云つ奥さん達に、アマンダは微笑んで首を振ります。

「ほんと、お気持ちだけで。これは私の仕事ですし、他所様のお手を煩わせる訳にはいきません」

「きません」

やつぱりと断られ、ミイミもマイマイも、他の奥さん達も、手が貸せないもどり

かしさを抱えたまま、家へ戻りました。

でも、ハナハナは一度戻つてから、またアマンダさんの家へ行きました。

「すいません」

戸を叩いたハナハナに、アマンダさんは「じつや」と中から声だけ答えました。

「あの……、ハナハナです。やつぱり向かお手伝いさせて下せ」

戸を開けて、奥の作業室のアマンダさん、ハナハナは言いました。

「やつ、帽子をパーティで、みんなに被つて来てもうおつて言い出したの、私なん

た。

す。みんな、大事にしている「血漿の體子」を持つてゐるからって……。

それが、こんな事になつて、

なつて、「ごめんなさい」

アマンダさんが、ゆっくり作業室から出て来ました。

ハナハナは、怒られるかと思い、身を縮めて待ちました。

けれど、アマンダさんは優しい声で「そう」と言いました。

「いきなり忙しくなったから、どうしてかしらと想つていたけど。

でも、こうこう忙しくなつたから、どうしてかしらと想つていたけど。

は、私、嬉しいの」

その10 赤い帽子青い帽子（5）

「え……？」

「だて、大好きな帽子作り没頭していられるんですもの」
そう言って、アマンダさんは笑いました。でも、その顔は疲れで
力がありません。

「けど、本当に忙しくて大変。……じゃあ、やつぱりハナハナに手
伝つてもらおうかしら

？」

ハナハナは喜んで「はいっ」と返事しました。
初めてアマンダさんの仕事室に入ったハナハナは、びっくりしま
した。

まず目に入ったのが、壁に幾段にも並んだ長い棚でした。棚の上
には色々な型の帽子が、
赤青黄と色分けされて所狭しと並んでいます。

窓際には大きな裁縫用の机、そして、部屋の真ん中に色とりどり
のリボンや造花の乗つ
た作業机がありました。

「ハナハナは、そこへ座つて」

アマンダさんに勧められたのは、作業机の前の椅子でした。ハナ
ハナは赤いリボンが綺
麗に並べられた机の前に、ちょこんと腰掛けました。

「出来た帽子にリボンを巻くの。簡単だから、すぐに出来るわ」
アマンダさんは、赤い帽子を一つ手に取ると、ひとつをハナハナ
に渡しました。

残つたひとつを持つて、「ゆっくりやるから見ててね」と言いま
した。

ハナハナは、アマンダさんが綺麗にリボンを帽子に回していくの
を、真剣に見詰めてい

ました。

そして、今度は自分がリボンを持って、掛けてみました。帽子の生地が固く滑り易いので、最初は苦労しましたが、何度もやり直すうちに綺麗に掛けられるようになりました。

「そり、上手よ」

出来たものを見て、アマンダさんが微笑みました。

ハナハナは、次々に帽子にリボンを掛けに行きました。ぐるりと回して、ちょうど結び。

その後、アマンダさんがリボンを糸で軽く止めます。

一、二時間で、ハナハナはすっかりリボン掛けに慣れました。

「じゃあ、次は造花を付けてみましょう」

アマンダさんのやり方を手本に、ハナハナもリボンの結び田に造花を飾りました。

今は秋の赤い実や、綺麗な紅葉が主役です。それを組み合させて、形よく帽子に飾るの

は、とっても楽しい仕事でした。

時間が経つのも忘れてお手伝いをしていたハナハナは、作業場の棚の隅に置かれた小さな

な置き時計の音で、はっと時間を思い出しました。

「ああ、もう夕方ね。……今日はこれくらいにしてしましょう。ハナハナもお家へ帰らないと」

「あ、はい……」

微笑んで、アマンダさんはハナハナから帽子を受け取りました。

「あの、明日また来ていいですか？」

帰り際、ハナハナが聞くと、アマンダさんは笑って「いいわよ」と言つてくれました。

次の日も、ハナハナは朝のお手伝いが済むと、急いでアマンダさ

んの家へと行きました。

作業室へ入ると、昨日とは違つて、作業台には男物の帽子が並んでいました。

男物にはリボン掛けはありません。

「あの……？」

「ああ、今日は、女物の帽子をパッセルトーンのお店に届けようと思つた。ハナハナも一緒に来る？」

「はいっ」

パッセルトーンには、年に数回//マ//ミと買物に行くへりうりしか、ハナハナは行つた事がありません。

パッセルトーンより全然お店の多いパッセルトーンへ行くのは、とっても楽しみです。

「あ、でも……」遠出をするなり、//マ//ミ買ひにむかなければなりません。それを話すと、アマンダさんは、

「いいわよ。待つてるから言つていいしゃい」と、優しく言つてくれました。

ハナハナは急いでアマンダさんの家を出ました。リンデンさんの家の前を通り過ぎようとした時。

急に家から出て来たリンデンさんとぶつかつてしましました。

「さやあつ！」

「あつ！ ジめんつ！」

転んだハナハナを、リンデンさんすぐに立ち上がりしてくれました。

「ごめんね。大丈夫？ 怪我はないかい？」

「はい」どにも、痛いといひはないので、ハナハナは素直に頷きました。

ヒ。コハチはせせめ、せつとしたよつに水色の皿を覗覗もつた。
「わあ、//マ//のとじゆのハナハナ、だよね~。」

その10 赤い帽子青い帽子（6）

お姉さんのレーラーさんは知っていますが、リンдинさんは全く話をした事の無かった

ハナハナは、リンдинさんが自分の名前を知っているのに驚きました。

さら！」。

「昨日から、アマンダの仕事の手伝いに来ているだろ？アマンダ、ちゃんと食事して

る？」

急がしそうだから、とリンдинさんは頭を搔きました。

ハナハナは、ああそうか、と氣が付きました。

リンдинさんは、アマンダさんが好きなんだ。だから、アマンダさんの事をよく知つて

るんだ。

ハナハナはにっこり笑ついました。

「アマンダさんはお元氣です。今日、出来上がつた帽子を、パッセルトーンのお店に持つて行かれるそうです。私も一緒にいて言われたんですけど、お姉さんがダメって言うんで

す。でも、荷物は一杯あるんです」

「……え？」

「リンдинさん、私の代わりにアマンダさんの荷物を持つてあげて下さい」

お願いします、と、ハナハナは深々と頭を下げました。

リンдинさんは、ハナハナが顔を上げると、ちょっと困ったという表情をしていました。

が、すぐに「分かった」と言いました。

「じゃあ、僕が代わりに行くよ

「ありがとう」^イざこまつ」

ハナハナはお礼を言つと、真直ぐに家へ帰りました。

「お姉さんっ！」家に帰るとすぐに、ハナハナはミミミニ事の次第を話しました。

「ええっ？ じゃあアマンダとリンデン、一緒にパッセルトーンへ行つたの？」

「うん、多分」

「そう。それは良かつたわ。……ハナハナ、『ご苦労さま』

その日の午後、ハナハナはアマンダさんに急に行けなくなつた事を謝りに行きました。

「今日はごめんなさい。急に行けなくなつてしましました」

ハナハナが頭を下げるとい、アマンダさんはくすつ、と笑いました。

「いいわよ。お姉さんに怒られちゃつたら、仕方ないものね」

「……」ハナハナは、アマンダさんがハナハナの嘘を絶対知つていると思いました。

素直に謝つた方がいいのかな、と考えていると、アマンダさんがお茶を出しながら先に口を開きました。

「リンデンが代わりに行つてくれたけど、その方が良かつたわ。思つたより品物の数が多くて重かつたから。もしハナハナだつたら、きつと持てなかつたと思うわ」

「そうですか」ハナハナは、わざとアマンダさんがそつとついているのが分かりました。

た。

でも、それはアマンダさんことつても、とても嬉しい事だったのです。

「それからね」と、アマンダさんは、まるで小さな女の子が秘密を友達に教えるような顔で、言いました。

「パーティに、リンダンと行く事になったの」

「えっ、本当ですか？」

ハナハナは、こつくり頷いたアマンダさん、ちょっと恥ずかしそうな表情に、とても嬉しくなりました。

あと少しだからお手伝いはいと言われアマンダさんの家を後にしたハナハナは、家へ帰るなり、ミイミにその話をしました。

「まあ、じゃあリンダンとアマンダ、上手く行きそつなのね？」

「うん。作戦成功つ」

ハナハナは、ミイミと手を叩きあつて喜びました。

秋は更に深まり、トネリコの葉もすっかり色付いたその日。

パツセルベルの村入みんなが、待ちに待つお月見ダンスパーティーが開かれました。

会場の南の大枝には、奥さん会の面々が持ち寄った、腕によりを掛けた料理が並び、ま

た音楽は、村長が縁龍渓谷一と言われるカールベルの街の楽団を頼みました。

村の人達は奥さん会が呼び掛けた通り、みんなご自慢の帽子を被つてやつて来ました。

踊り始めた人の波を縫つて、アマンダさんがリンダンさんと共にハナハナとミイミのと

ころへやつて来ました。

「遅くなつたんだけれど、これ、お礼です」

綺麗な袋に入ったものを渡されて、ハナハナはびっくりして一人を交互に見ました。

「ええと、私、大したお手伝いは……」

「いいの。貰つてちょうだい。これは、私とリンダンの気持が

その10 赤い帽子青い帽子(7)

ハナハナは困って、ミイミを見ました。ミイミは隣のティーヴをちょっと見ました。

ティーヴは、笑って頷きました。

「いいんじゃないのかい、ハナハナ。気持ちよくもうひとつおきなさい」

「はいっ」

袋の中は、開けてみるとピンク色の造花のついた、可愛い帽子でした。

ハナハナは早速帽子を被つてみました。

長老や魔法自慢の人達がいくつも浮かせた魔法の明かりに、新品の帽子がとてもよく映

えて、ハナハナはますます嬉しくなりました。

「ありがとうございます、アマンダさん」

何度もお礼を言つハナハナに、アマンダさんはちょっと照れくさそうに言いました。

「そんなにいいのよ。ほんとにお礼を言いたいのは、私達の方なんだから」

「そりなんですか？」

「今リンダンが被つてる帽子、これ、私が作ったの」

それを聞いて、ミイミもハナハナも事情が分かりました。

「もしかして、約束したの？ アマンダ」

アマンダさんはリンダンさんの顔を見ました。リンダンさんは幸せそうに微笑むと、

「ええ」とミイミに言いました。

「姉には、明日にでも会つて伝える積もりです」

「おめでとう。リンダン、アマンダっ」

ミイミは自分の事のように喜ぶと、大声で周囲の人達に言いました

た。

「みなさん、聞いて下さって。リンデンとアマンダが結婚の約束をしましたっ」

わっと歓声が上がりました。みんな手にしたぶどう酒のグラスを高く上げて、おめでとうとしました。

その晩のパーティーは、パッセルベルの人々にとつて、一番楽しいパーティーになりました。

飲めや踊れの楽しいひとときにつ、みんな昨日の仕事の疲れを忘れてはしゃぎました。

ハナハナ達子供も、この日ばかりは夜遅くまで起きていても叱らない嬉しさに、みんな友達と騒いだり食べたりしていました。

晴れた夜空には、月見の宴に誘われ満月が、淡い黄色い光を煌々と放っていました。

宴も終わりに近付いた頃、ハナハナは大枝の方で一人きりで寄り添い月を見ているリンデンさんとアマンダさんを見ました。アマンダさんが作ったリンデンさんの青い鳥打ち帽が、一人が何か話す度につばを内側にそつと向けています。

アマンダさんの赤い帽子が、それに答えるように揺れていきました。やがて、赤い帽子は大きく傾いて、リンデンさんの肩へもたれ掛かりました。

それを見て、ハナハナはそつとその場を離れました。

その晩、ハナハナはとっても幸せな気分でベッドへ入りました。

冬の色がちらほらと出て来た頃。

リンデンさんとアマンダさんは結婚式を挙げました。

ドレスは例によつて、マーマおばさんと奥さん念の手作りです。

しかし、帽子型の変わ

つたベールは、アマンダさんが自分で作りました。

雪のよつたトネリコの花を造花にした帽子のベールの綺麗で、
パッセルベルの女の子

達は、みんな素敵、と田を輝かせました。

リンдинさんのお姉さんのレーニアさんは、式の間中おんおん泣いていました。

「こんなに早く、お嫁さんが決まつて。しかも一番いい人が来て
くれて。」

感激して泣くレーニアさんの肩を、ミヤミがずつと抱いていました。
長老が祝辞を言い終え式が終わり、披露パーティになりました。
ハナハナはニーニャやヒーマと一緒に、花嫁さんに花束を渡しました。

「ありがとうございますハナハナ。あなたは私達の幸運の天使よ

「え、そんな……」

照れるハナハナに、二人は微笑み合いました。

そして冬も盛りの季節。

リンдинさんは遠い人間の街で開かれる自分の絵の展覧会のため
に、せつせと絵を描いていました。

遊びに行つたハナハナが見せてもらつたのは、マーフの泉の前に
立つアマンダさんの絵でした。

「前は風景ばかりだつたんだけどね、最近は風景にアマンダを入れて描いてるんだ。と、

いうより、アマンダのバックに好きな風景を入れてる、かな?」

リンдинさんは、嬉しそうに話してくれました。

アマンダさんはお茶を煎ながら、にっこり笑つて旦那様の話を
聞いていました。

「アマンダの帽子のデザインも手伝つてるんだ。季節の花の絵を描いたり。アマンダは造花を作るのも上手なんだよ。あ、ハナハナは知ってるよね？」

ハナハナは、幸せそうな一人と少し話して、それから帰りました。トネリコの木はすっかり葉を散らし、幹や枝にはつらうらと雪が積もっています。

冷たい雪なのに、ハナハナには何故かあたたかな綿のよう見えました。

家へ帰つてミヤミにその話をすると、

「そうね。寒い冬にひとりは辛いけど、リンデンもアマンダも、今年の冬はあつたかいわ

ね」と笑いました。

お昼寝から起きたモモが一人の話を端で聞いていて、「なにはなしてゐるのー？」と興味津々で寄つてきました。

ハナハナはわざと意味ありげに笑つて言いました。

「いいの、大人の話」

「あーつ、ずるーいっ！ お姉ちゃんだつてまだ十歳じゃないつ！ モモが、いつものようにまたぐずぐずと文句を言い始めました。ミヤミが「あとでね」どこまかします。

その様子を見ながら、家族が居るつていいことだな、とハナハナは思いました。

??私も、いつかお姉さんやアマンダさんみたいに、素敵な人や家族と暮らせるかな。

窓の外は、また雪が降り出しました。

きっと、大丈夫だよね、と呴いて、ハナハナはふわり、と微笑みました。

その10 赤い帽子青い帽子（7）（後書き）

その10 赤い帽子青い帽子は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は、ちょっと息抜きの2回目。
『エトセトラ2』です。

今回は、妖精や妖魔の、持つて生まれた能力のお話です。
特別な能力は『星』と呼ばれています。

さて、ハナハナの星は？

お楽しみに！

セの1-1 ハナセアリス(1-1)(前書き)

今回も、ハトセアリスです。

妖精と、持つて生まれた能力『星』のお話です。

その11 ハトラクナ(1)

ミイミの田那様ティーヴは、妖精には珍しい仕事、獵師です。何故珍しいかと言うと、妖精は皆生まれながらに穢れに弱い星を持つています。だから、普通は動物を殺したり、それを食べたりは出来ないです。

しかし稀に、もうひとつ別の星を持つて生まれる者があります。ティーヴもそのひとりで、彼は『死せるものを生かす星』を持っています。

これは、殺したものを自分の糧として生かすのであれば、穢れを免れるというものです。

もちろん、妖精の本性である穢れを嫌う星がありますから、捕つた獲物を食べたりは出来ません。

ティーヴは獲物の毛皮や肉を人間の商人に売り、そのお金で村に必要な品物を買っていきます。

緑龍渓谷の獣の毛皮は上質でとても高く売れるので、ティーヴが獵をして戻ると、村ではたくさん的小麦やじゃがいもが手に入ります。

村長はそれをパッセルトーンで少し売り、妖精のお金を村の資金としてためています。

ティーヴはそのお金をまた少し貯つて、ミイミやハナハナ、そして子供達の暮らしのものに当てています。

／＼＼＼＼

ある日、子供達は長老の家で、妖精の星について聞きました。

「そつさな、妖精が妖精としていられるのは、この穢れに弱いという星を持つておるから

じゃ。人間や妖魔は、この星を持つておらんで、平氣で動物を殺生し食つてしまふ。その

ため、身に穢れが溜まつて重くなるんじや。だから、トネリコの木に住むことが出来ん」

「へえ。じゃあ、なんでモルガナ婆さんはトネリコに住めるの？蛇の妖魔なのに」

リツクの質問に、長老は長い鬚を撫でながら答えました。

「モルガナ婆さんは妖魔じやが、特別な星を持つてあるんじや。それは、『死せるものの

穢れを払つ』という星じや。妖魔の持つ特別な星は総じて強力でな、モルガナ婆さんは」

の星のお陰で、動物を食つ妖魔であつても妖精と同じよう、軽いんじや」

へえ、と子供達はお互の顔を見合わせました。

／＼＼＼＼

「長老さまには、誰がどんな星を持つているか、お分かりになるんですか？」

木ねずみのチャーリーが聞きました。

「いやいや、わしには分からんよ」

長老は笑いました。

「じゃあ、誰がそれをお分かりになるんですか？」

「カールベルにリリア婆さんという猫の妖精の長老がおつてな、その方なら、分かるがな」

「顔を見ただけで分かるの？」

孫娘二二二ヤの質問に、長老は、

「うむ、何でもその妖精が生まれる時に、お告げがあるそつじや。

詳しく述べた訳ではな

いのじやが、天から声が降つて来ると、そんな事を語つておつたの

「お告げがなれば、星は持つてないんだ……」

ぼそりと呟いたリックに、リックが聞きました。

「何の星を持つてゐるつたの？」兄ちゃん

「そりや、『大工』が上手くなる星に決まつてんだろ?」

「ある訳ないじやない、そんな星つ

すかさず言つたエマに、みんな思わず吹き出しました。

＼＼＼＼＼

けど、リックが言つたような、『大工が上手くなる星』のよつた星が本当にあるなら、

「ちょっと自分にもあればいいな」とハナハナは思いました。

「 そ う だ ね 」 私 も 『 お

つたなあ。もう、ビバ

「おど、アーマーがれうせう」『「戦闘が止まらない」

星』を持つてるのかも

۹۷

「どうのめこなー素敵だー」アキラが喜んで叫んでいた。

二人のおしゃべりを聞いていた長老が、「そうかもしけんの」と微笑みました。

「リリア婆さんは、命に関わる星の予言しかせんからの。もしかしたら、それぞれが天か
ら賜つた得意なものの星は、また別にあるのかもしけん。じやがそ
れは、自分で見つけ出

してこそ力を發揮するものなのじや」

生まれながらにあるつ

七
二

首を傾げた二二ニヤに、長老は頷きました。

のじや「人生の意味をどうするか」

のじ
せ

}, }, }, }, }, }

「本当に、私の得意なことって何だと思う?」

家へ戻り、夕御飯の支度を手伝いながらハナハナは「ミミミ」と言いました。

「私、二二ニヤほじお裁縫は不得意じゃないけど、うんと得意つてこともないし。じゃあ

お料理はどうかつて言ひと、それも普通だし。木登りも駆け足も普通。うんと得意なもの

つて、思い付かないなあ」

じゃがいものゆで具合をみながい、「ミミミはそうね、と微笑みました。

「でもね、ハナハナ」

お鍋の中身をざるに上げ、「ミミミは言いました。

「何でもそれなりに出来るつていつのも、ひとつ特技よ？ 普通に暮らしていくためには、これひとつだけ得意つていつのもいいけど、全部やじやい、何とか出来る方が助かる時はあるわ。私もそうだし」

「そつかー。そう言えば、お姉さん、お料理はうんと得意じゃないけど、そこそこおいしいものね」

ゆで上がった小さいもをひとつ摘まみ上げて、ハナハナはぽいつ、と口の中へ放り込みました。

「あつ、言つたなこら。そんなこと言つてつまみ食にする人には、お夕飯食べさせません

よつ？」

ふざけ半分に叱られて、ハナハナは「「めんなさい」と舌を出しました。

その
1
1
エトセトラ
2
完

その11 ハトセトラ2 (2) (後書き)

その11 ハトセトラ2は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は『冬の王』です。

雪の日の外遊びは、ハナハナもモモも大好きです。
けれど、雪と一緒に近付いてくる、小さな女の子の姿をした雪の精
靈は、冷たい手で勝手に触つてくるので大嫌いっ！ な、ハナハナ。
さて、どんな騒動になるのやら……？

お楽しみに。

その12 焰のH(1) (前書き)

パツセルベルにも、本格的な冬がやってきました。
雪を降らすかわいらしい精霊。『雪の精』。

でも、冷たいのが嫌いなハナハナ達妖精の子供は、雪の精に触られるのが大嫌いです。
そして、どうなりますことか?

その12 冬の王(1)

リンゼンさん達の結婚式が済んだ七日後、本格的に雪が降り出しました。

「今年も来たわねえ」

洗濯物を部屋の中に張ったロープに掛けながら、ミヤミは窓の外を見ました。

「今年は、去年より雪の精霊の数が多いのかしら。よく降るわね」窓から見えるトネリコの小枝は、すっかり白いお化粧をしています。

アルベルト先生から借りて来た本から目を上げたハナハナは、むつとした顔で言いました。

「私、雪の精霊大嫌いつ。冷たい手で顔を触つて来たり、勝手に手を掴んだりするんだも」

の

雪の精霊は、冬を迎えた土地に冬の王と共にやって来ます。王がその土地から次へ動くまで、その地域の中を好き勝手に遊び回ります。

人間には見えませんが、妖精であるパッセルベルの人々には、雪の精霊が十歳前後の透き通った少女の姿で見えます。

田を三角にして怒る妹に、ミイミはくすつと笑いました。

「ハナハナに遊んで欲しいのかもね？」

「やあだつ。あんな冷たい子達、いやつ」

雪を降らせる精霊は、もちろん人でも妖精でもありませんから、眠つたり何かを食べたりもしません。

疲れ知らずに飛び回り、雲の上の王の城から降りて来てはまた飛

び上_レがつて戻つて行きます。

季節の精靈達は、どれもそうですが、勝手氣ままに妖精の村や町の中をうろつきます。

「春のお花の精靈は好き。とつてもいい匂いで、時々花びらを蒔いていってくれるもの」

長い髪の、若い娘の姿をした花の精靈達を思い出してにっこり笑つたハナhanaに、

「そうね」とミヤミは微笑みました。

「でも、雪の精靈も可愛いわよ?」

「かわいくない。来るといつもまとわりついて、邪魔だもの」ハナhanaがぱんつ、と大きな本を閉じた時、隣の部屋からモモが入つて来ました。

「おかあさん、お外に遊びに行つてもいい?」

「ダメよ。お外は大雪。出て行つたら、また風邪を引くわ」モモはふうつ、と膨れました。

「えー、だつて昨日もお外に出られなかつたもん」

「昨日も雪がたくさん降つてました。今日もダメです」

ミヤミは洗濯籠を台所の隅に置くと、食卓の上のタオルを置み始めました。ハナhanaも

手伝います。

その側に寄つて來たモモは、ミヤミのエプロンを引つぱりながら、また黙々をこねました。

た。

「行きたいつ。お外行きたいつ」

「ダメですつたら」

「お姉ちゃん、外行きたいの?」

「何時の間にかお昼寝から起きた弟のフレイが、言いました。

「フレイは関係ないの?」

モモは、隣室の入り口に毛布を引き摺つたまま立つてゐる弟を、

きつと睨みました。

「でもおかあさん、ダメって言つてるよ?」

「フレイはダメなの。でも私はいいの?」

「なんで僕はダメなの? 僕も行きたい」

四歳のフレイも一緒に駄々を言い始めました。ミイミは困り顔で、腰に手をあてました。

「しようがないわねえ」

「ちょっとだけならいいんじゃない?」

ハナハナの言葉に、小さな姪と甥は、うんうん、と頷きました。

「ハナハナ……」

ミイミは、横田で妹を睨みました。

モモとフレイは、お母さんに手を合わせてお願ひします。

「お家の前だけ?」

「すぐ帰るから」

「じゃあ、ちよつとよ。これ以上雪の精靈が集まつて来るような

ら、すぐにお家に入り

なさいね?」

子供達はわあい、と歓声を上げると、支度をじて部屋へと戻りました。

「あなたも付いて行つてくれる?」

ミイミは渋い顔でハナハナに言いました。

「モモもフレイも、多分夢中になつて遊んでると、雪の精靈が近くに来ても分からないと

思うから」

「うん、分かつた。……私が言つかけたんだしね」

「やうよ。よろしくね」

はい、と返事をして、ハナハナも本を持って部屋へ戻りました。

その12 冬の王(2)

外は、本当に凄い雪でした。長靴の半分以上まで埋まってしまう程積もつた雪は、冬には葉が無い落葉樹のトネリコの小枝達を重くたわませています。

それでも駆け出す小さい子達の後から出て、扉を後ろ手で閉めたハナハナは、細かい雪が降つて来る空を見上げました。

上方の枝の間から、雪の精靈がふわふわと遊んでいるのが見えます。

「結構いるな……」

心配になつたハナハナの耳に、モモとフレイの嬉しそうな声が聞こえてきました。

「もーつ！ 雪ぶつけたら冷たいでしょっ、フレイはっ！」

「お姉ちゃんだつて、雪掛けたつ！」

口喧嘩しながら、一人はハナハナの目の前で転げ回ります。雪まみれになつてふざける

姉弟に、ハナハナもふふつ、と笑いました。

と、フレイの、手の大きさに合わせた小さな雪玉が、ハナハナの顔を直撃しました。

「きやーつ！」

「わあーつ、当たつたつ！」

「こらあ、やつたなつ！」

ハナハナはすぐに雪玉を作り、フレイに向かつて投げました。雪玉は、逃げ回るフレイのお尻に命中しました。

と、今度はモモが、ハナハナに雪玉を投げてきました。

ハナハナも投げ返し、たちまち一人対一人の雪合戦になりました。

「きやーつ、冷たいつ！」

「それっ！ もっと当てるよっ」

「お姉ちゃん早いーっ！」

騒いでいるうちに、三人はいつの間にか家から少し離れて、幹近くのオットーさんの家

の方まで来ていました。

ハナハナは、フレイの背中にオットーさんの家の黒っぽい壁を見付けて、初めて家から

離れてしまつたのに気がつきました。

「あっ、いけない。お家から離れちゃつた」

ハナハナは慌てて、モモとフレイに声を掛けました。

「戻るよっ、こっちおいでっ！」

しかしうざけている一人には聞こえていません。

「モモっ、フレイっ！」

呼んでも返事をしない一人を連れ戻しに、ハナハナが近付こうと歩き始めた時。

突然冷たい風が上方から吹いて来ました。驚いて上を見たハナハナの目の前に、雪の

精霊が何人も舞い降りて来ました。

みんなおんなんじように短かめに髪を切り揃え、白いスカートを履いた、小さな人間の女の子に似た姿をした雪の精霊は、楽しそうに騒いでいるモモとフレイをぐるぐると取り囲みます。

その時になつて、ようやくモモ達は自分の周りが凄く寒くなつているのに気がつきました。

精霊達は、自分と同じくらいの背のモモに、次々と近寄つて行きます。声のない口で笑いながら、モモの頬や腕に、冷たい手を伸べてきました。

モモは、真っ白な精霊に取り囲まれて、寒いのと恐いので真っ青

になりながら、大声で
ハナハナを呼びました。

「いやあっ！　ハナお姉ちゃんっ！」

同じように精霊に囲まれてフレイも、恐くてその場にしゃがみ込んでしまいました。

「ハナお姉ちゃんっ！　助けてえっ！」

「こらあっ！」

ハナハナは、怒って猛然と走り出しました。

「モモとフレイに触らないでっ！　どつか行きなさいっ！」

囲んでいる精霊達の冷たい身体に手を掛けて、ハナハナは一人の周りから女の子達を無理矢理退けました。

「あっちへ行きなさいっ！　あっちっ！」

ハナハナの、凄まじい剣幕に押されて、雪の精霊はあよどんとしながらもみんな場所を開けました。

ハナハナは精霊の輪の中に入ると、泣いている姪と甥を抱きかかえました。

「もう大丈夫よ、お家へ帰るっ」

一人を立たせ、ハナハナは歩き出しました。そこへ、また雪の精霊達が「遊ぼう」というように手を伸ばしてきました。

「止めてっ！」

ハナハナは女の子達の手を乱暴に振り払うと、睨みました。

「あんた達は近付かないでっ。言う通りにしないと、酷いよっ？」
脅かしに、でも「それがなに？」という顔で、また精霊達は手を伸ばして来ます。

ハナハナはひとつ深呼吸すると、小さく息を吹き出しました。

妖精は、十歳くらいになると徐々に魔法が使えるようになります。村にいる時はそんな

に使いませんが、外で危険があれば、ハナハナでも身を守るための攻撃魔法を使えます。

ハナハナは、龍のようく吐いた息を炎に変えました。雪達にとつて火は大敵です。

精靈達は、驚いた様子でみんな空中に飛び上がりました。

ハナハナは、今度は光の魔法を使いました。くるりと人さし指を頭上で回すと、そこに

小さな光の玉が出来ました。それを、精靈達に向かつて投げたのです。

火と同じく、太陽も苦手な雪達は、熱くはないけれどもお口さまでのよう明るい光にびっくりして、皆一斉に上空の雲に戻つて行きました。

「……ふんっ」

慌てて飛んで行く雪の精靈を見ながら、ハナハナはほつと肩の力を抜きました。

「もう大丈夫。お家へ帰ろうね」

こわごわ上を見ていたモモとフレイに、ハナハナはにっこり笑いました。

何とか雪の精靈を追い払つて家へ戻つて来たハナハナ達ですが、恐かった緊張と、冷たい精靈に触られたせいで、モモは熱を出してしまいました。

「だから言ったのに」

ぐつたりしたモモをすぐに寝かし付けて、ミィミは溜め息をつきました。

「雪の精靈に寄られたら、きっと寒さでまた風邪を引くと思つたわ」「めん、なさい……」

出してあげればと言つて、二人を外で遊ばせたハナハナは、反省してミィミに謝りました。

「私が、もつとよく注意してなかつたから
「ハナハナのせいじやないわ」

しかし、ミミは首を振りました。

「モモが行きたいって言い張つたんだもの。モモが悪いのよ
「でも……」

「ハナハナは、雪の精靈が降りて來た時、すぐにモモ達を呼んでくれたんでしょう？」

「うん……」

それは、確かに呼びました。けれどあの時、呼ぶだけではなくすぐ側に行つていれば、

モモとフレイに精靈達が触らなかつたかもしません。

俯いたハナハナの頭を、ミミの柔らかい手がそつと撫みました。
「いいのよ。ハナハナが気にしなくつても。……さて、おばかさん
に熱冷ましを飲ませま

しょうね

ミミは台所の食器棚の上に置いた籠の中から、小さな薬瓶を取り出しました。

「……と。あらあら、熱冷ましが無くなつてゐるわ。どうしましよう」

ハナハナは顔を上げました。困った様子の姉に、言いました。

「私つ、お薬貰つて來るつ」

ミミはびっくりした顔で、小さな妹を見ました。

「さつき戻つて來たばかりでしょ。また雪の中を出掛けたりしたら、
今度はハナハナが風

邪を引くわよ？」

「私は大丈夫つ。丈夫だもん」

ハナハナは、赤ちゃんの頃から病氣をした事がほとんどありませ
ん。その事は、育てた

ミミが一番よく知つています。

「でもね」

「行かせてつ。私なら雪でも駆けられるし。すぐにモルガナさんの

ところへ行つて帰つて
来られるから」

お願い、というハナハナは、ミマイミは根負けした顔で微笑みました。

「じゃあ、お願いするわね。ただし、用心して行く事。急いで思い切り駆けたりしちゃダメよ?」

「はい?」

「あー、お姉ちゃんまたお外行くの?」

食卓で、ブランケットを被つて熱いお茶を飲んでいたフレイが、うらやましそうに言いました。

「僕も行くつ」

「ダメよ。ハナお姉ちゃんはお遣いに行くの。フレイはお留守番」
「やだつ。僕もお遣いくらい出来るもんつ」

むつとして言い返す甥っ子に、ハナハナはめつ、と睨みました。
「ダメつ。今度はフレイが風邪引くよ。あんたまで風邪引いたら、
おかあさん困つちゃうでしょ?」

「ハナお姉ちゃんだつて、風邪引くよつ」

「私は大丈夫なの。……じゃ行つて来ます」

言いながら手早く支度を終えたハナハナは、ミマイミから銀貨を受け取り、戸口へ向かいました。

「くれぐれも、気を付けて」

「はい」

勢い良く飛び出した外は、さつきより幾分雪が上がっていました。

今のうち、と、ハナハナは雪の積もつたトネリコの枝を、モルガナ婆さんの家のある西の下枝まで、思い切りよく駆け出しました。

その12 冬のH(4)

モルガナ婆さんの家から戻る途中、ハナハナはマーフの泉の周りに雪の精霊が集まつているのを見ました。

「そう言えば、去年の冬は泉は凍つてたよね」
今年は、泉は全く凍つていません。ママおばさんやボッシュさんは、マーフが泉に居るから、冬の王の冷気も水を凍らせる事が出来ないんだろう、と話していました。

本当にそうなのかな、と思いながら、幹の道に戻ろうとした時、突然泉全体が光り始めました。

それまで泉の上や周りを飛んでいた雪の精霊が、急いで上空に飛び立ちます。

何が起きたのだろうと、ハナハナは急ぐのも忘れて泉へ降りて行きました。

ハナハナが泉のほとりまで来た時、水の中からマーフが出て来ました。

「マーフ」

「ああ、ハナハナ」

かつて魔王の配下だったといつ黒い水の妖精は、ハナハナを見てにっこり笑いました。

「どうしたの？ 今、泉が物凄く光つたけど」

「水を浄化したんだよ。放つておくと、真冬の間は冬の王の力で水は凍つてしまう。そうすると私は出られなくなつてしまつから」

「あ、そうか」

マーフは、夜は泉の中の洞窟で過ごしていると聞いています。で

も、夜中に雪の精靈や

冬の王が降りて来て雪や冷氣を撒き散らせば、たちまち泉の水は凍つてしまいります。

「天井を塞がれないように、水をいつも綺麗にしておくんだ。そうすれば、温度も一定に

なるし、何より凍らないから」

「もしかして、それ、夜中もやつてるの？」

聞いたハナハナに、マークは苦笑して、

「たまにね」と言いました。

「大変だね。けど、私達は助かります。朝、お水が凍つてないと、すぐに水汲み出来るも

の」

「みんなに感謝してもらえるのが、何よりだよ。……それはさうとうしてこんな大雪

の時に、下まで降りて来たんだい？」

まさか、今から水汲みでもないだろ？」と心配するマークに、

今度はハナハナが苦笑

しました。

「うん。モモがね、お熱を出しちゃって。熱冷ましを飲ませようとしたら、切れてたの。

だから、モルガナさんのところを分けてもらつたの

「そうか。……あ、そうだ」

ちょっと待つて、と叫んで、マークはぼしゃん、と泉に潜つて行きました。

何だろ？ とハナハナが待つていると、マークは白い一枚泉のようないもんを持って戻つてきました。

「これは、この泉の底に住んでる貝の貝殻なんだ。この中に私が作った薬が入っている。

この泉の水で作った薬で、身体を丈夫にするんだ。良かつたら、モ

モちゃんに少し飲ませるといい

「うわあ、ありがとう」

ハナハナは喜んで受け取ると、じゃあね、と手を上げて幹へ戻りました。

後で長老に聞いたところ、この薬は水の妖精秘伝の薬で、作るのに大変魔力が要るものだということでした。

モルガナ婆さんの熱冷ましと、マーフの薬を大事に上着の内ポケットに入れたハナハナ

は、急いで幹の道を駆け上がりました。

あと少しで我が家というところで、また突風が吹いてきました。

しかも、今度の風は前にも増して冷たい風です。

「きやつ！」飛ばされて、危うく幹から転がり落ちそうになり、ハナハナは必死で近くの枝に飛びつきました。

その頭上に、大勢の雪の精霊が降りてきました。

精霊達は皆、愛らしい顔を恐ろしい形相に変え、ハナハナを鋭く見下ろしています。

一瞬、その恐ろしさに、ハナハナは身が竦みました。

多分、さっきの出来事で、精霊達は怒っているのです。

でも、私は悪い事はしていない。そう思い直して、ハナハナは勇気を振るつて起き上がりました。

突然、精霊達が左右に別れ、その上から真っ白な冷気と共に誰かが降りて来ました。

ハナハナは首を上げて、きつ、とそちらを見ました。

降りて来たのは、真っ白なローブを来た、若い男でした。銀色の長い髪の頭には、やはり銀に輝く王冠が乗っています。

冬の王は、顔をこわばらせてじっと睨んでいるハナハナに、静かに言いました。

「おまえが、我が眷属を脅したのか？」

低い、地吹雪のような声に、ハナハナは思わず目を瞑り掛けます。でも必死で見開き、

言いました。

「先に私の姪を脅かしたのは、雪の精靈達です。みんなで囲んで触ろうとしましたつ」

「触るのが悪いのか？ 我が眷属達は、ただおまえやおまえの小さな姪と遊びたかっただけだが」

その12 冬の王（5）

「精靈達が遊びたかつたつて言いますけど、小さな子を大勢で囲めば、絶対に怖がります

つ。雪の精靈達はそんな事も知らないのですか？」

冬の王は、ちょっと目を細めました。

「さて、な。我らはおまえ達妖精や、人間どもとは違う存在だ。おまえ達がどんな風に感じているのか、分からぬ時もある」

「だつたら、そんなんで遊びたいなんて近付かないで下さいっ」

ハナハナはきつぱり言いました。

「精靈達は悪いと思つていなくとも、私達や人間は、雪の精靈に触られたり側に来られた

りするのは嫌なんですつ。何でなら、冷たいからですつ。私達はあつたかいのは大丈夫で

も、冷たかつたり熱かつたりすれば病氣になりますつ。今も、私の姪は雪の精靈に触られ

て病氣になつてしまつて寝ていますつ。私はモモの……、姪の病氣の薬を分けて貰いに、

薬師のお婆さんのところへ行つて來たんです。モモは身体が弱いんです、そういう子もいるんですつ。だから、次からは絶対、私や姪や甥に、いいえ、他の妖精の子供達にも、近

付かないで下さいつ！」

ハナハナの必死の抗議を、冬の王は黙つて聞いていました。

ハナハナは、じつと自分を見詰める王の銀の目を、ずっと睨んでいました。

やがて、王が口を開きました。

「そりが……。妖精や人間どもは、我が眷属が嫌いか」

「嫌いですっ。空を飛んでいたり、雪を降らせたりしている時は、そつは思いませんけど。

嫌だつて言つてゐるのに無視して、勝手に手や顔を触つて来るのは、そういうところは大っ

嫌いですっ」

「……そつか」眩ぐよつていつて、王はあいつ、と上空へ上がつて行きました。

上空には、王の城のある厚い雲が、まるで空に浮かぶ巨大な船のよつて浮いています。

王は雪の精霊を連れて、ゆつくつとその雲の中に入つて行きました。

「…………何よ」ハナハナは小さくなつた王や精霊の姿を見上げながら、ふつゝ、と頬を膨らませました。

「なんにも答えないで帰つちやつて……」

『光の子よ』不意に頭のすぐ上で王の声がして、ハナハナはびっくりしました。

「えつ？」

『おまえの意見、しかと胸に納めた。今後、我が眷属達には、無闇におまえ達や人間に近付かないよう、言い聞かせよう』

「ほんとですかっ？」

思わず言つた言葉に、返事はありませんでした。けれど、雲から大きな綿雪がひとつひら、

ふわふわとハナハナの上へ落ちてきました。

ハナハナは、その綿雪を手に取りました。綺麗な結晶が見える雪は、まるで約束の証の

ように、ハナハナの手のひらにじばばらへとどまり、そして消えました。

雪が消えたハナハナの手のひらに、酷く暖かい感触が残りました。

家に帰ったハナハナは、すぐ「//マ//」に熱冷ましの薬を渡しました。

「よかつたわ。これでモモもすぐ元気くなるわ」

ほつとした顔で眠るモモを見下す「//マ//」、ハナハナもほつとしました。

「あ、そだ」ハナハナは、ポケットに入れて来たもうひとつ薬を思い出して、脱いだ上着を探りました。

「これ、マーフから貰ったの。丈夫になって、元気になる薬だつて「まあ」

「モモにあげて」

「マーフにお礼を言わなければね」
「//マ//」は皿殻を両手のひらに包むと、とてもありがたそうに拝みました。

突然、「//マ//」、ヒドアを叩く音がしました。

何だろ?と、ハナハナが玄関へ行きました。開けると、誰も居ません。

「何かなあ?」

首を傾げつつ、雪の景色を見回します。と、扉の真ん前の雪の中に、透明な塊がひとつ、置かれていました。

「……?」ハナハナは側に行つて、雪を搔き分けてみました。

「氷?」

「どうしたの?」

中々戻つて来ない妹を心配して、「//マ//」がヒドアから顔を出しまして。

「お姉さんつ、氷が置いてあるの?」

「うん、氷が置いてあるの?」

ミイミも驚いて、ハナハナの側へ来ました。

「まあ、珍しい」

『光の子よ』

また突然、冬の王の声がしました。

声は、ハナハナだけでなくミイミにも聞こえました。

『私に意見をする者はそつ多くない。冬を司る者は恐ろしいと、誰もが思うからだ。それ

をおまえは、全く頼着なく意見してくれた。それは礼だ、取つておけ』

「……どういふこと?」

よく意味が分からなくて首を傾げたハナハナに、ミイミは苦笑しました。

「ありがとうで、ことよ」

「ふうん」ハナハナは、顔を空に向けると大きな声で、

「どういたしまして!」と言いました。

一人は、ミイミが家から持つて来たバケツに氷を入れると、よい

しょ、と掛け声を掛け

合いながらそれ家へと入れました。

氷を細かく砕き、水枕に入れ、モモの熱を冷やしました。

氷と薬が効いたのか、モモは翌日にはすっかり元気になりました。ミイミは、それでも念のためにと、マーフに貰つた丈夫になる薬をモモに飲ませました。

そんな事があつてから、雪の日に外に出ても、もつ雪の精靈達はパツセルベルの子供達

に勝手に近付いたり触つて来たりしなくなりました。

「みんなよかつたつて言つてくれてるの。でもね」

しばらく振りに晴れた日、ミイミとハナハナは久々に外へ洗濯物を干しました。

一杯溜まつてしまつたティーヴのシャツや子供達の服をトネリコの枝に掛けながらミイミはハナハナに微笑みました。

「何か、困つた事でもあるの?」

聞かれて、ハナハナは靴下を小さな枝に干しながら、ちょっと俯きました。

「うん……。私、冬の王にとつても怒つちやつたんだけど、ほんとによかつたのかなあ」

「どうして？」

「だつて、あのあと、雪の精靈に出会つと、困つたよつた顔をして、みんなすうつと上へ

消えて行つちやうんだもの。……本当に精靈達は、自分達が嫌がらせをしているんじやな

くつて、ただ遊びたかつただけだつたのかなあつて」

「そうね……。本当はそつだつたかもしれないわね。でもね」

ミヤミは、雪の精靈に悪い事をしてしまつたんじやないかと思つ

ている妹の、ふわふわ

と白い毛が遊ぶ頭をそつと撫でました。

「悪気は無くとも、人に迷惑を掛けてしまつのだつたら、やつぱりそれはしてはいけない

の。ハナハナが言つた事は正しいわ。だつて、私達妖精や人間は、

雪の精靈の冷たい手に

触られるのは我慢出来ないもの。それを、精靈達も氣付かなくてはいけなかつたのよ」

「……そつなの？」

そうよ、と、ミヤミは微笑みました。

お姉さんの優しい笑顔に、ハナハナはやつぱり良かつたんだ、と思つ直しました。

冷たい、緩い冬の風が、一人の頬をふわつ、撫でて過ぎました。

ふと、ハナハナが目を上げると、小さな雪がひとつひら、干したシヤツの上に落ちて来ました。

した。

冬はまだまだ続きます。

ハナハナはミヤミにこつこつ笑い返すと、残りの洗濯物を手早く干し始めました。

その
1
2

冬の王
完

その12　冬の王(6)（後書き）

その12　冬の王は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は『その13　星祭』です。

獵師をしているティーヴは、獵の途中で様々な人を助けています。今は、なんと人間の子供を助けて連れてきました。

でも、人間は普通ならトネリコの木には登れないはずです。
果たして、この子は一体……？

優しくて、ちょっと悲しいお話です。

お楽しみに！

その13 星祭（1）（前書き）

今回のお話は、星祭です。

パッセラベルの、お盆のような行事です。

でも、お祭り前にひとつ、ハナハナには衝撃的な事がありました。

その13 星祭（1）

冬も盛りになる頃。

パツセルベルでは『星祭』といつお祭りが行われます。

妖精は、死ぬと身体は大気に還りなくなります。でも魂は消えず
に、太母と呼ばれる天
の神様の元へと戻ります。

そして真冬、太母のところからもう一度、魂は星となつて地上に
戻つて来るのです。

その魂を迎えるお祭りが、『星祭』です。

お祭りには、様々な食べ物が用意されます。パン、野菜の煮物、
木の実のお菓子、果物
のパイ、などなど。すべて、星となつて戻つて来る人々のための食
べ物です。

もちろん、生きている人々も、その御相伴に預かります。特に子
供達は、果物のパイと

木の実のお菓子は大好物。星祭りが楽しみでなりません。

「ねえお姉さん、今年は何のパイを作るの？」

台所で、かまどの調子を見ていたミィミー、ハナハナはうきつき
と聞きました。

「去年は梨のパイだつたでしょ？ 今年は？」

「今年は、秋に野ブドウを一杯貰つたから、そのパイにしようと思
うの」

そう言えば、風が北風に変わつた頃、コウノトリの妖精の郵便屋
さんが大きな箱を家に
配達に来ました。

「あの箱の中に、野ブドウが入つてたの？」

「ええ。赤龍山脈の村のミミズクの妖精ミスさんから、ティーヴ
宛に届いたの」

「赤龍山脈つて、随分遠いんでしょう？ そんなに遠くの人から？」

「以前、緑龍渓谷の狩り場で、旅の途中で怪我をして動けなくなつて、いたスミスさん達を、

ティーヴが助けたのよ。そのお礼に

「ふうん……」

そんな話は、全然知りませんでした。ハナハナは初めて聞く話に、耳をぴくぴくと動かしました。

「知らなかつた」

「そうね。ティーヴは獵の途中に、よくそういう人を助けるし。だから別に珍しい事じや

あなかつたから、ハナハナ達には話さなかつたかもね」

野ブドウが来なかつたら、ハナハナもモモとフレイも、ティーヴの人助けの話は知らな

いまだつたかもしれません。

ハナハナは、それはちょっと嫌だな、と思い、ミイミに言いました。

「ねえ、今度からは、お義兄さんの人助けのお話、聞かせて？」

「分かつたわ」ミイミは微笑んで頷きました。

「さて。かまどの調子もいよいよだから、パイを作る前にお昼を作つてしまいましょう」

ミイミは、豆のスープの材料が入つた鍋を、かまどの上に乗せました。

ハナハナは、お玉を持つてスープの番を、ミイミは棚の上のパンを下ろして切り分け始めました。

「あら、ティーヴ」と、いきなり玄関の扉が開きました。

今朝早く狩りに出掛けたティーヴが、戻つて来ました。

「お帰りなさい。今日は随分早いのね？」

ティーヴは「うん」と頷くと、ぐるりと外を向きました。そして「おいで」と何かに手招きします。

「？」ハナハナもミイミも何だろうと首を傾げた時。戸の陰から男の子が現れました。

「まあ」

男の子には、尖った耳も尻尾も、ふさふさの毛並みもありません。トーベルさんと同じ

ような真直ぐな金色の髪が、頭の上から肩の辺りまで垂れています。

「この子、妖精？」

「いや、人間の子供だ」

「えっ？」一人は驚いて、まじまじと子供を見ました。フレイと同じくらいの背丈の男の子は、ミイミとハナハナに見詰められて、にっこりと笑いました。

「アー……？」

「どうして、人間の子が緑龍渓谷に？」

「どうやら、親に捨てられたらしい。？？とにかく中へ入れてやつてくれ」

ミイミはティーヴに言われて、男の子の手を取り中へと入れました。

ハナハナは、黙つて男の子を見ていましたが、入つて来た時初めて、その子が裸足なのに気が付きました。

「お姉さん……」

先に気が付いていたらしいミイミは、何も言わずに頷きました。とにかく男の子を椅子に座らせ、ミイミは狩りの道具を隣の部屋に片付けて戻つたティーヴに尋ねました。

「何処であるの子を？」

「リリクの滝の少し先だ。……実は、先に見付けたのは俺じゃない

んだ。『ウノトリの郵

便屋が、あの子が熊に襲われているのを助けたんだ』

その13 星祭（2）

郵便屋さんの話はこうでした。

パッセルトーンへ郵便物を届けた帰り、リリクの滝の先にあるストーン村に郵便の受け取りがあつたので、滝の上を飛んでいたら、大きな熊が小さな動物を襲っているのを見かけました。

うさぎやタヌキにしては大きいな、と思いながらぼんやり上から見てみると、熊の身体の陰からひょいと白い腕が見えました。

もしや妖精の子が襲われたのか、と、郵便屋さんは驚いて、急いで急降下しました。け

たたましい声を上げて熊を威嚇し、怯んだ隙に子供を銜えて飛び上がりました。

間一髪。子供が軽かつたので、郵便屋さんは難無く振るわれた熊の爪をひょいと避け近くの大楠の枝の上に着地出来ました。

しばらく熊と睨み合つていましたが、やがて諦めたらしく、熊は森の奥へ去つていきました。

した。

「やれやれと、ようやく安心して子供を見てびっくりしたらしい。とても軽かつたから間違い無く妖精だと思っていたら、人間の子供だった。でも、軽い訳もすぐに分かつた。こ

の子は、天使の卵だつた」

「天使の、卵？」初めて聞く言葉に、ハナハナは目を丸くして、思わずティーヴに聞き返しました。

「天使の卵というのは、人間の言葉で言えば、精神遲滞という、普通の子より知恵の発達が遅い子供のことだ。俺達妖精は、そういう人間の子供を『天使の卵』と呼んでいる」

「へえ？ どうして？」

興味を引かれて、さらに訊ねるハナハナに、ミイミが微笑みながら、説明しました。

「知恵の発達の遅い人間の子は、みんな軽い魂を持っているの。だからトネリコにも登れ

るのよ。で、死ぬと太母様の元へは行かず、そのまま魂に羽が生えて天使になるの」

「えー、そうなんだ」

ハナハナが感心した時、ばたんと扉が開いて、モモとフレイが外遊びから戻つて来ました。

「お母さんつ、お腹空いたつ。……あれ、この子、だれ？」

モモは、台所の自分の椅子に座つている人間の子を、不思議な顔で見ました。

「あ、お父さんお帰りなさい。？？この子、耳短いよ？」

「毛えなあいつ！」

フレイも、好奇心いっぱいの顔で男の子を見ます。覗き込んで来る一人に、男の子はにっこり笑いました。

「……ア？」

「こんにちわ」

「ア？？」

「こんにちわって、言えないの？」

「この子は言葉が分からないのよ」

ミイミに言われ、モモとフレイはますます不思議そうな顔で男の子を見ました。

「妖精なのに？」

「妖精じゃないの。人間よ」

ハナハナが言いました。

「へえ。人間は言葉が分からぬの？」

「人間はしゃべれるわ。でも、この子は分からぬの」

「へんなの？ 何で？」

「この子は『天使の卵』だからよ」

「『天使の卵』？」さつきの自分と同じ反応をしたモモに、ハナハナは聞いたばかりの話をしました。

小さいフレイはさつぱり分からぬようですが、モモは「ふうん」と相槌を打ちました。

「じゃあ、天使になつたら言葉がわかるようになるのかな？」

「そうかもしけりないな」

小さな娘に、ティーヴは微笑みました。

「取りあえず、長老のところへの子の報告に行って来る。『天使の卵』とはいえ人間の

子だ、騒ぎになるとまずい」

「そうね、行つてらっしゃい」

お昼は帰つたら食べると言つて、ティーヴは雪の中をもう一度、長老の家へと出て行きました。

ハナハナとミイミは、お昼の支度に戻りました。

「モモはその子を見てあげてね」

「うん、とモモは頷きました。

「あ、でも、ここに一緒に居てもいい？」

一人で人間の子の面倒を見るのは心配なのか、モモは恐る恐ると

「いいわよ。じゃお母さんとハナハナも、『お飯の用意をしながら』

ました。

「いいわよ。じゃお母さんとハナハナも、『お飯の用意をしながら』

緒に見ててあげるわね」

うん、と、モモは安心したように笑いました。

何しようかな、と、男の子と向かい合つたモモの側に、寝室から

ぬいぐるみを持ってフ

レイが寄つて行きました。

「ぐまのポンちゃん、じーきーげーんさーん

その13 星祭(3)

猫の妖精のぬいぐるみを振り回して歌い出したのは、パッセルベルの子供達ならみんな知っている童謡でした。

男の子は、びっくりした顔でフレイを見ました。が、すぐに楽しそうに手を叩き始めました。

「アーツ、アーツ？」

「お歌が好きなのね？」

モモが言つと、男の子はますます嬉しそうに手を叩きました。

「じゃあ、一緒に歌いましょ」

モモも、フレイと声を合わせて『「じぐまのポンちゃん』』という歌を歌いました。

楽しそうな三人の様子を横目で見ながら、ミイミとハナハナはこつそり顔を見合わせて笑いました。

支度が出来て、ハナハナはモモにも手伝つてもらいテーブルにお皿を並べました。

ミイミは、隣室からお盆を用の椅子を一脚台所に運び、そこに男の子を座らせました。

「嫌いなものは、無いかしらね？」

豆のスープを入れるため、男の子の前のお皿を取つた時。急に男の子がテーブルの上に頭を置いてしまいました。

「どうしたの？」ハナハナは慌てて男の子の肩を触りました。ミイミも驚いて、お皿を置いて側に来ました。

「具合が悪いの？」

でも、男の子には言葉は分かりません。ミイミはやつと、男の子を頭を持ち上げました。

額に手を当て、顔を顰めました。

「まあ、酷い熱」

「えつ？ ここの子、病気なの？」

驚くモモに、ミヤミは額をました。

「どうやらそうみたいね。口がきけないから分からなかつたけど…」

…

と、玄関の扉が開いて、ティーヴが帰つて来ました。

「長老に話して來た。？？どうした？」

「この子、病氣だつたみたい。熱があるの」

「何だつて？」

ティーヴは足早に、テーブルを回つて來ました。そしてミヤミが押さえていた男の子の身体を、ひょいと抱き上げました。

「……これは酷いな。ミヤミ、毛布を取つて來てくれ」

はい、と、ミヤミは小走りに寝室へ行きました。すぐに毛布を持って、ティーヴの側へ

戻りました。

ティーヴは毛布に子供をくるむと、もう一度抱き直しました。

「この子を長老のところへ連れて行く

「様子を？」

「ああ」

歩き出したティーヴに、ハナハナは、「私も行く！」と言いました。

した。

ティーヴは足を止め、ちょっとハナハナを見ました。

「……そうだな、ハナハナ、一緒に来てくれ」

「はいっ」

「あーっ、じゃあモモもっ！」

負けん気の姪っ子が、すぐにハナハナの真似をして言いました。

「ダメだ。モモは家にいなさい」

「だつて、ハナお姉ちゃんが行くのに」

「

「ハナハナは、もしかしたら大事な役目が出て来るかも知れない。けど、おまえはまだ小さいからダメだ」

「するーーいつ！」

文句を言つ娘を一度睨み付けて、ティーヴは外へと出て行きました。その後を、ハナハナも上着を手早く着て付いて行きました。

ハナハナが冬の王と話をしてから、二二のところはあまり多く降つてはいません。それでも十センチは積もつてゐるトネリコの枝の道を、ハナハナはティーヴの後に続いて歩きました。

「あの、お義兄さん？」

ハナハナは、さつきティーヴがモモに言つていた事が気になつて、ふと、声を掛けました。

「私には大事な役目が出て来るかも知れないって、どういうこと？」
もしかしたら、冬の王にも、それに前に長老やトーベルさんにも言られた『光の子』と、いうのに関係があるのでないのかと思つて聞いたのですが、ティーヴは何も答えずに歩き続けました。

「……お義兄さん？」

答えてくれないのを訝つて、ハナハナはもう一度声を掛けました。

「……その事は、長老の家へ行つたら、多分わかる」

その13 星祭（4）

それきり、ティーヴは何も話しませんでした。元々無口な人々の
で、ハナハナもそれ以上は聞きました。

程なくして、二人はトネリコの梢の長老の家へ着きました。
「ごめんください」玄関で声を掛けると、すぐに扉が開きました。
開けたのは、村長のサウルでした。

「こつちへ」村長は、ハナハナ達を一階の小さい方の部屋へ招きました。

そこは、村の人々が集会に借りる大部屋の左側にある部屋で、ハナハナは初めて入りました。

扉を開けると右に暖炉があり、その前に長老が椅子に腰掛けて待つていました。

「子供が熱を出しました」

ティーヴは、肩に担いでいた男の子を、長老のすぐ後ろの大きな長椅子の上に下ろしました。

した。

長老は「ふむ」と手のひらを撫でると、立ち上がって毛布にくるまれた男の子を見ました。

た。

男の子は、手を閉じて苦しそうに息を継いでいます。長老はその額に手を当て、じつと目を閉じました。

「……なるほどどの」

長老は、ゆっくりと男の子から手を離すと、ティーヴとハナハナの方へ向き直りました。

「どうやら、この子は寿命が尽きておるようじや」

「えつ？」ハナハナは驚いて声を上げました。

「じゃあ、死んじゃうのつ？」

「残念じゃがの。重い病を抱えておるよつじや。それに併せて、『天使の卵』……」

「では、やはりこの子は縁龍渓谷に捨てられたのでしょうか？」

ティーヴの言葉に、ハナハナは更に驚きました。

「捨てられたつて……、本当のお父さんお母さんが、子供を捨てるの？」

「ハナハナや」長老は、静かに言いました。

「人間というのは、時として残酷な行為をする者があるのじや。妖精のわしらには、まず

考えられんがの。この子のよつて、育たない、育てるのが難しいと思われた子供は、人間の親は、たまに捨ててしまう事もある

「だつて……、だつて、生きてるのに……」

どうして、そんな事が出来るのでしょうか？ どんな子供にも、親に愛されて生きる権利

がある筈です。もちろん、不慮の事故や病氣で両親を失つてしまつた場合は仕方ないです

が、そうでなければ、親は大事に子供を育てるのが、愛するのが普通な筈です。

「この子が、『天使の卵』だから、捨ててしまったの？ それとも病氣だから？ それと

もその両方だから？ もしかして、病氣が治れば迎えに来てくれるんじや……」

「それは、あるかもしかんがのぉ」

長老は、ふつ、と天井を仰きました。

「病氣は、どうやつても治らないんですか？」

ハナハナは、長老とティーヴを交互に見ました。

「あのつ、私……」ハナハナは、思い切って聞いてみよつと思いま

した。

『光の子』ってなんなのだろう。もし、自分がそれで、『光の子』に人を治す力があるなら、やってみたい。

「長老さまっ、その……、『光の子』って何ですか？」

長老は、ちょっと驚いた顔でハナハナを見返しました。

「前にトーベルさんがマーフに、『光の子が居るから安心だ』っておっしゃってましたよ

ね。あれって、光の子が、悪いものを排除出来るからなんですか？」

もしそしたら、その

……、私が、光の子なら……」

「……病気を治す事は、出来んよ、ハナハナ」

長老は、優しい声で言いました。

「確かに、光の子は魔を退ける星を持つてある。なるほど、ちょっとやそつとの病なら、

その力で治す事も出来るかもしけん。じゃがの、それにも限界がある。まして、この子の、

この、『天使の卵』の病は重病じや、それにもう、命数が尽きておる。これは、いくら光

の子の力でも、覆す事は出来ん」

「ハナハナ」ティーヴが厳しい声で言いました。

「おまえの気持ちは分かる。子を捨てるなど、理不尽極まりない話だ。親としても、生き

るものとしても、してはならない行為だ。だが、現実に人間はそういう者も居る。それを、俺達はどうする事も出来ないし、する権利もない。……辛いが、この子の死を、俺達は受け入れなければならない」

「……だって……」ハナハナは、朦朧と目を開けた男の子を見下ろして、涙が溢れて来ま

した。

「こんなのがつて、あんまり可哀想過ぎるよ……」

その13 星祭（5）

「……アー……？」

男の子が、毛布の中から手を伸ばして、ハナハナの白い頬に触れました。

泣いているハナハナに「大丈夫だよ」と言つているように、淡く笑いました。

ハナハナは自分の頬に触れる小さな手を握り締めると、目を閉じて泣きました。

「ごめんね……、何もしてあげられなくて……」

不意に、男の子の手から力が抜けました。驚いたハナハナは、目を開けて男の子を見ました。

すると、目を閉じた男の子の額の辺りから、白い光の玉がふわり、と浮き上がつて来ました。

「え……？」びっくりして光を見詰めるハナハナに、それまで黙つてみんなの話を聞いて

いた村長のサウルが、静かな声で言いました。

「これは、この子の魂だよ。『天使の卵』は死ぬと一度星になる。それから、天使に変わるんだ」

光は、きらきらと輝きながら天井近くまで上りました。しばらくほんものの星のよう

辺りに淡い光を投げ掛けていましたが、突然、ぱんっ、と弾けてしました。

眩い閃光に、ハナハナもティーヴも、みんな一瞬目を閉じました。両手で目を被つたハ

ナハナの耳に、可愛い声が聞こえてきました。

『ありがとう、妖精のお姉さん』

ハナハナは、慌てて目を開けました。すると、男の子の星があつたところに、小さな羽をつけた天使が浮いていました。

『僕のために泣いてくれて。僕は、お父さんお母さんに捨てられたけど、最後にお姉さん

のようないい人には会えて嬉しかった。ただ、お父さんお母さんの事も誤解しないでね。

二人は僕を本当に愛してくれていたんだ。でも、とっても貧しくて、身体の弱かつた僕を育てられなかつたんだ。』

「でも、だからつて大事な子を捨てるなんて……」

ハナハナは涙声で、小さな天使に言いました。小さな天使は笑うように、小さく羽を動かしました。

『うん。でも、僕を緑龍渓谷に捨てたのは、ここに妖精が住んでいるつて聞いたからなんだ。捨てられた僕を妖精が見付けたら、きっと悪いようにはしないだろうつて。本当だつたでしょ？ お姉さんも、助けてくれた狩人のおじさんも、みんないい人だつた』

「おまえさんのじ両親は、おまえさんがもう長く生きられないのを知つておられたんじや

な」

長老の言葉に、天使は『はい』と頷きました。

『家で僕が死んだら、お葬式を出さなければなりません。でも、お父さんお母さんには、

お葬式を出すお金が無かつたんです。だから、ここへ僕を置いていつたんです。……別れ

る時、お母さんは「ごめんね」つて、僕を抱き締めてくれました。

僕は、もうそれだけで
何もいらないんです』

ハナハナはまた泣きました。

優しい天使は、『泣かないで』と小さな小さな手で、ハナハナの頬に触れました。

『僕はもう行くけれど、みんな元氣でいて下さい。本当に、ありがとうございました』

その声が消えないうちに、小さな天使はまた光になり、消えました。

『僕は天使になつて何処かへ消えても、人間は妖精とは違います。魂の抜けた男の子の身体は、そこに残りました。』

『さて、墓を作る場所も無いしのお』

長老は、眠るよつた男の子の亡骸を見下ろして、額鬚を撫でました。

『『龍の墓場』なら、人間を埋葬する事も出来るでしょう。ですが、我々はあそこには立ち入れない』

村長の言葉に、ティーヴも頷きました。

『あの、『龍の墓場』って……？』

知らない場所の名前に、ハナハナはティーヴを見上げました。『緑龍渓谷の一番奥、龍王の山脈の中に、古代の龍達の亡骸が葬られている場所がある』

それが『龍の墓場』だ

『そうなんだ……』

『だが、そこは強い結界と障気に満ちていて、我々妖精は入れない。入れるのは、人間と、

強い魔力を持つハイエルフ、それに高位の妖魔だけだ』

『じゃあ、この子の身体は？』

ハナハナの問いに、大人三人は顔を見合させました。

「パッセルベルから離れた場所なら、埋葬出来るが……」

「その前に、我々ではそもそもこの子の遺体には触れられませんよ

? お父さん」

村長の意見に、長老は「ふむ……」と唸りました。
「運ぶのは、俺が出来ます」ティーヴが言いました。
「しかし、埋葬は……。あれは穢れの行為ですから。いくら俺でも
無理です」

「清めの儀式が出来るのは、人間かハイエルフのみじゃしのお
難しい顔をして、三人は黙ってしまいました。

その13 星祭（6）

全然聞いた事もない言葉ばかりで、しかも、長老も思案顔になつてしまい、ハナハナはどうなるのだろうと不安になりました。

と、村長が突然ぽんつ、と手を打ちました。

「モルガナ婆さんに聞いてみましょう。あの人は『死せるものの穢れを払う』星ですから」

「おおそうじゃった。モルガナなら、何かいい方法を知つとるかもしれん」

「じゃ私が早速」

そう言つて、村長は上着を手早く着ると、外へ飛び出して行きました。

「さて、ではとりあえず」村長が出て行くのを見送つて、長老はティーヴに言いました。

「この子をマーフに預けに行つてくれるかの。このままでは穢れが酷くなり、村の者に影響が出て来る」

「はい。分かりました」

ティーヴは男の子の身体を毛布に包み直し、来た時と同じように肩に担ぎ上げました。

「まだ、暖かい……」

ふと聞こえたティーヴの咳きに、ハナハナは「え？」と顔を上げました。

「どうやらこの子は、俺達が遺体を上手く片付けるまで、穢れが集まらないようにしてい

るらしいな」

「それって？」ハナハナは、またまた分からぬ話に、首を傾げました。

「穢れというのは、動物の遺体に好んで集まつて来る、魔の気の一種じゃ。遺体は、冷た

くなればなる程、穢れが溜まる。この身体がまだ暖かいという事は、さつきの天使が、何処かでこの身体が冷えきらないよう、力を使つているからかもしれません」

最後まで、みんなの迷惑にならないよ。」
あの子の必死の気持ちに、ハナハナはまた目頭が熱くなつて來ました。

「じゃあ、早いとこ泉に持つて行つてあげよう」
ティーヴは黙つて頷き、長老に一礼すると歩き出しました。ハナハナも長老に挨拶して、ティーヴの後を追いました。

男の子の遺体は、マーフの泉に下ろされました。事情を聞いたマーフは、一時泉の底に埋葬すると言つてくれました。

そして村長が聞いて来たモルガナ婆さんの意見は、結局そのままマーフに任せるのがいい

いと言う話でした。水の妖精は、高位の者はハイエルフと同じような力を持つています。

マーフなら、子供の遺体の穢れを押さえ込んだまま、浄化出来る筈だと、モルガナ婆さんは言つていたそうです。

その夜。

パッセルベルでは星祭が行われました。先祖の妖精の星達が、宵の星の輝く中、紺色の中空にひとつ、またひとつ、と現れました。小さな淡い光の星は、ゆっくりと村の降り注

ざります。

ミーミの家はもぢりん、村中の家々が、トネリコの枝に積もる雪の上を滑るように移動する星を迎えるために、窓を大きく開け放っています。

窓辺には、奥さん達が腕によりを掛けたじうしが並べられて、星達はその近くまで寄せて来ます。

次々と窓辺に来る星を見ながら、ハナハナは小さな声で言いました。

「あの子は、天使になっちゃったから、ここには来ないんだね……」

「じゅうそうも一杯用意したのに。」

「少しでも、食べさせてあげたかったなあ」「妹の眩きこ、ミーミは優しく微笑みました。

「そうね。でもきっと、あの子にはハナハナの気持ちは通じているわよ。ここには来ないけど、あの子の分までお迎えしましょう」

うん、と頷いて、ハナハナは静かに動く無数の星々に目を戻しました。波のように、窓辺に寄せては外へと戻る光を見ながら、ハナハナはふと、思い出しました。

た。

??やう言えば、『光の子』の事をまた長老に尋ねそびれたな。結局、自分は『光の子』なのだろうか……?

ハナハナが、「私がそつなれば、この子を治したい」と言つた時、長老も村長も、否定しませんでした。

という事は、ハナハナは『光の子』なのでしょうか?

長老は、「光の子は魔を退ける」と言つていました。もし本当に自分がそつななら、自分にそんな力があるのでしょうか。

ハナハナは、隣で星を眺めていた//、そつと聞きました。

「ねえお姉さん、私、『光の子』なの？」

ミマミは、驚いたように妹を見返しました。しかし、何も言わず

に、片手でハナハナの

頭をそつと抱きました。

「ねえ？」もう一度訊いたハナハナに、ミマミは小さく「あ？」

と言いました。

「そのうち、長老さまが教えて下さるわ」

「……何時頃？」

気になつて仕方ないのに、とハナハナは思いました。

「時期が来たらよ」

さあ、そのお話はお終い、と、ミマミはハナハナを離しました。

これ以上は、多分答えてくれないな、とハナハナは思い、諦めました。

隣の部屋の窓から星を眺めていたティーヴと子供達//、ミマミは、

「そろそろ御相伴にしましょ」と声を掛けました。

「ハナハナ、テーブルの支度をしてちょうどいい」

「……はあい」

ハナハナは窓辺を離れ、食卓の支度に掛かりました。

窓の外には、まだたくさんの星が雪の上を飛んでいます。

お供えのじきを取つ分けながら、ハナハナは今度こそ長老に
ちゃんと聞こい、と心
に決めました。

その13 星祭(6) (後書き)

その13 星祭は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか?

ハナハナ、またも『光の子』の真のお話を聞けずじまいでしたが……
どうなりましょうか?

次は『その14 レスワの壺』です。
毎月一日にパッセルベルに立つ市場では、食料品からアクセサリー
まで、いろいろなものが売られます。

普通の人たちが日常に使う品々もあれば、実は、ちょっと危ない品
物も、こつそり売られています。

そんな品物と遭遇してしまったモモとフレイ。
さて、どうなりますか……?

お楽しみに。

その14 レスワの轟（一）（前書き）

れで。

今回のお話は「レスワの轟」です。

パッセルベルの月一の市場で起つた、珍騒動。

何があつたのやうへ。

その14 レスワの壇（1）

パツセルベルでは、毎月一日に行商の人達が来て、市場が立ちます。

市場は旅芸一座がテントを張つていた、あの南の一番下の大枝に出来ます。

雪が止み、青空が覗いた冬の日を、妖精達は『冬の王の休息日』と呼びますが、そんな

久々に晴れた日に、市場が立ちました。

この日はいつもの市より行商人が多く、食料品は元より、衣服やアクセサリーなど、普段はパツセルトーンまで出かけなければ買えないような品物も、並んでいました。

冬の柔らかい日射しを受けてきらきら輝く貝殻のネックレスや指輪は、女の子達の気を、大いに引きます。

「ねえねえ、このイヤリング可愛い」

「あつ、こつちのネックレス、ピンク貝の殻をハートに削つてある

つ

ハナハナヒーーニャ、そしてエマも、綺麗な洋服やアクセサリーを、あつちこつちと見回します。

「私、お姉さんからリックル硬貨を三枚貰つたんだけれど、これでお買い物出来るかなあ」

リックル硬貨は、妖精の社会での通貨です。主に大きな街で使われていますが、物々交換の多いパツセルベルのような田舎では、あまり見かけません。

ハナハナの手の中のリックル硬貨を見詰めて、エマヒーーニャは感嘆の声を上げました。

「うわあ、す「」。私、リックル硬貨見るの初めてっ」と、一
一や。

いつもは、何でも持つてるわ、と威張るHマも、
「私はお父さんから貰った事はあるけど……。三枚なんて、持つた
事ないわ」

ハナハナが照れくさそうに微笑んでポケットに硬貨を終つた時。
「ハナハナ」後ろからミヤミが呼びました。

「お姉さん」

「モモとフレイを見かけなかつた？ 私が八百屋さんへ寄つてゐる間
に、どうやらはぐれ
しまつたみたいなのよ」

ハナハナは、最初ミヤミと姪のモモ、そして甥のフレイと一緒に
市場に来たのですが、

途中で友達の一ー一やとHマに会つて、ミヤミ達と別れたのです。
それでも、ミヤミ達とそんなに離れていた訳ではなく、ハナハナ
達が居るアクセサリー
の屋台とミヤミが行つていた八百屋の屋台は、通りを挟んですぐ近
くでした。

「えつ？ わつきまで隣の帽子屋さんで、子供用の帽子を見てたけ
ど……」

みんな一斉に、帽子屋の方を向きました。

「いないわ。きっと面白いものを見付けて、また先へ行つてしまつ
たのね」

ミヤミは困つた顔で辺りを見回しました。

「大変つ。探さなきや」

「こ」は何と言つてもトネリコの一番下の枝です。その下はすぐこ
地面。その先はパッセ

ルの森です。森には幼い動物や妖精の子を狙つ、獰猛な獣もいます。
まだ小さなモモとフレイがうつかり枝を降りてしまつたら、大変
な事になります。

「私つ、枝元の方を探して来るつ」

買い物の楽しい気分も何処へやら、慌てて駆け出そうとするハナ

ハナに、友達二人が言

いました。

「待つて、私も行くわつ」

「私もつ」

「ごめん、じゃあ手伝つて」

「じゃ私は枝先の方に行くわね」

わかつた、と頷いて、ハナハナと二二ニヤ、エマの三人は、人混みを分けて駆け出しました。

その頃。

自分達が居なくなつたために、お母さんやハナハナが心配してい
るのも全く気にしてい

ないモモとフレイは、枝先に近い屋台の近くにいました。
そこは、幾つもの枝が上下左右に別れているところで、屋台によ
つては上の枝に黒い天

幕を掛けすっぽり覆つてているところがあります。

全体的に黒っぽい店が多く、そのせいか、葉のない季節なのにそ
の道だけ何となく薄暗
い感じでした。

「何だか、気味悪いとこに来ちゃつたね……」

黒いテントの側を通りながら、モモはフレイに小さな声で言いま
した。

お姉さんの右側を歩いていたフレイは、ふつと頬を膨らませまし
た。

「ぼく、恐くないもんつ」

大きな声で言うなり、フレイはたたつ、と斜め左の店へと駆け出

しました。

「あつ、フレイツ！」

後を追つてその店に近寄つたモモは、店の台に乗つてゐるものを見てびっくりしました。

大きなトカゲの干物です。

「ひつ……」

その他にも、乾燥したオオグモや、大きなガラス瓶に入つたナマズ、乾かしたイラクサ、首と胴が切り離された、干涸びたマンドラゴラ、などなどが、所狭しと並んでいました。

その14 レストの轟（2）

モモは恐くなつてその場を離れよつと後ずさつしました。

引き返そつと振り返つた時、側に弟がいないのに気が付きました。「フレイ？」きょろきょろと、辺りを見回します。でも、薄暗い通りにフレイの姿はありません。

ません。

「フレイ！」

「何大声だしてるんだい？ お嬢ちゃん」

突然声を掛けられてびっくりして振り向くと、先程の店の奥からお婆さんが出て来ました。

た。

お婆さんは、枯れ枝のような手に一杯持つた乾物を、他の品で埋め尽くされている台の上に更に並べます。ぎゅうぎゅうと干涸びたマンドラ、ゴリラを押ししゃる手には、指にも甲にもぶつぶつと青黒いイボが出来ていました。

よく見ると、お婆さんの皺くぢやの顔も、手と同じようなイボがたくさん出来てこます。

鼻は潰れて低く、毒ガマ、ガエルそつくりです。でも、垂れた目蓋の下の赤い目は、生氣のない見かけとは逆に、ぞうぞうと陰険に光っています。

「あの……、私……」

モモはすっかり怯えて、その場に釘付けになつてしましました。お婆さんはそんなモモを、とも不愉快そうに睨付けました。

「ここではそんな大きな声を出しちゃいけない。『ネビル・キャラバン』にやつて来るお客様は、人に知られたくない買い物をするために来るんだ。大声を出し

たら、みんなびっくり

して帰つてしまつ。それに第一、ijiはあんたみたいにならひやな子供が来る場所じやない。とつととお帰り

「でも……」

「それとも、何かい？」『子猫の肝』をあたしに売つてくれるつて言つのかい？」

「『子猫の肝』……？」

モモは、初めて聞く言葉に、恐る恐る聞き返しました。

お婆さんは目を細め、枯れ木が裂けたよつにじつ、と口の端を釣り上げました。

「猫の妖精の子供の肝は、そりやあ高価な薬になるのさ。生で食べれば不老不死になるし、

乾燥させて粉末にしたものは、どんな病でもたひひひひひ治す。まさに万能の薬。生を食べるには生きたまま肝を引っこ抜かなきやならない。けど、子猫でも猫の妖精は魔力が強

いから、なまなかでは出来ないけどね」

聞いた途端、モモは全身がぶるぶると震えてしましました。

ここに居たら殺される。早く帰らなきや。

「わつ、私つ、きも、なんて、売らないつ！」

渾身の勇気を振り絞つて叫んだ時。

お婆さんの真後ろで、クリーム色の小さなモモがもぐもぐと動いたのに気が付きました。

モモは、小さな尻尾を上にして、何か覗いています。

「フレイっ！」何時の間にか、フレイがお婆さんのテントに入り込んでいました。フレイ

は、お婆さんの後ろにある色々な壺を、次々そつと覗いて遊んでいたのです。

モモの声に気付いてお婆さんが振り返った時、フレイは一度お婆

さんの真後ろの、茶色

い壺の蓋を開けたところでした。

開けた途端、ぽんつ、という小気味良い音がして、中から何かが飛び出しました。

「あつ！」

「えつ？」

お婆さんが、酷く慌てた表情で叫びました。

フレイは、その声に驚いて蓋を取り落としました。

陶器の蓋が、固いトネリコの枝の上に落ちて、がちゃん、と割れました。

「ああつ！ なんて事を……」

お婆さんがフレイに掴み掛かります。フレイが慌てて逃げようと

したその時。

田の前に黄色いウサギが現れました。

「よおつ、出してくれてありがとうーーー お礼にこれ、あげるーーー！」

小さなフレイの、さらに半分程の背丈のちっちゃなウサギは、悪戯っぽく大きな赤い田

でウインクをすると、持っていた黒い杖をぱつと振りました。

「レスワつ！」

その途端、ウサギの杖から真つ赤な光が飛び出しました。光はまっすぐにフレイに当た

り、次にお婆さんの方へと向かいます。

しかし、光が当たる前に、お婆さんは呪文を唱えました。

「ディモオつ！」

お婆さんの指先から青い光が飛び、赤い光を消しました。

「ちじつー！」ウサギは光が消されたのを見ると、一田散で台を飛び越えテントから遠ざかりました。

「待てつー！」

お婆さんも、急いでテントから飛び出します。

蹴飛ばされた台から、トカゲとマンドラ「ラ」が転がり落ち、モモの前に散らばりました。

その14 レストの毒（3）

「全くつ！ るくでもない事をしてくれたよつ！ 絶対おまえと弟の肝を食つてやるつ！」

恐ろしい言葉を吐いてモモを睨み付けると、お婆さんはウサギが飛んで行つた方へと走り出しました。

騒ぎに、何事かと幾人かの人が通りへ出て来ました。それを突き飛ばすようにして、お婆さんは走つて行きました。

お婆さんが見えなくなると、モモは漸くテントの中へ入りました。フレイは、赤い光を浴びてその場に気を失つっていました。

「フレイつ！」モモは、弟の肩を掴んで揺さぶりました。と、フレイが目を覚ました。

「あ、おねえちやん……？ も、『はん出来た？』

「違つわつ、『はん』はお家じやないのつ。早く起きてつ」

「え？ 僕お家にいたあよ？ 朝『はん』、まだ食べてないもんつ」

「ふつと頬を膨らませたフレイに、モモは怒りました。

「何言つてんのつ！ もつお皿なのつ！ フレイ、忘れちやつたの？ 一緒に市場に来て

たでしょ？」

「……いちば？」フレイは、きょろきょろとテントの中を見回します。そして、きょとんとした顔で言いました。

「『はん』おつ？」

「なによつ。わつき『はん』お婆さんの毒を開けりやつたの、覚えてないの？ 怒られたじやないつ」

「僕、そんな」としてなあつ！」

手を振り回して主張する弟に、モモは呆れた顔をしました。

「なによつ！ 自分の悪戯はさつたと忘れちゃうわけつ？」

「そりやあ違うよ、嬢ちゃん」

突然響いた低い男の声に、モモはぎょっとして振り向きました。大きな熊の妖精のおじさんが、台の方から中を覗いていました。「弟坊主が開けたのは、レスワの壺だ。あのウサギに魔法を掛けられると、ちょっと前の

事はみんな忘れてしまうんだ」

「レスワ、の壺？」

田をぱちくりさせたモモに、おじさんは「やうだ」と頷きました。

「壺のウサギは、蓋が割れたんで喜んで飛び出して行つちました。

？？大変だな、これか

らあつちこつちで物忘れの人が出るよ」

283

ウサギは南の大枝から飛ぶように上へと上がって行きました。熊の妖精のおじさんが言つていたように、ウサギは出会う人みんなに忘れ魔法を掛けて回りました。

十六丁目の木ねずみの妖精ルーラさんは、夕飯にと採つて来た野菜の泥を雪水で洗つて

いる時に、ウサギにばつたり会つてしましました。

お陰で野菜を採つたのを忘れ、大事なラティッシュをウサギに持つて行かれてしまいま

した。

シマリスの妖精ラッセさんは、柱時計を直している最中にウサギが家に入つて来ました。

時計を持ち上げているのを忘れて、床に落として壊してしまいました。

猿の妖精アンソニーさんは、お昼の買い物の道で魔法を掛けられ、

市場で買つたリンゴ

やイチゴを、全部ウサギに盗られてしましました。

魔法で悪戯して、人のものを盗り放題のウサギは、いい気になつて更に上の枝へと逃げて行きました。

七丁目の枝へ来た時。

木ねずみの妖精ワトソンちゃんの家の屋根を、丁度ボツへ親方とトッドさんが直していました。

「おおいトッド。そこの材木を持ち上げてくれ

ボツへ親方に言われて、下で材料を切つていたトッドさんは、雪の重みで折れてしまつ

た古い屋根の支えの代わりの材木を持ち上げました。

その時、その材木の上にレスワウサギが飛び乗りました。

「わつ？ なんだこいつ？」

びっくりしてトッドさんが材木を振ると、ウサギはそのままぴょーんと屋根へと飛び乗りました。

招かれざる珍客の登場に、ボツへ親方は驚いて釘を打つ手を止めました。

「なんだい、あんた？」

ウサギはいじわるな表情でにやりと笑うと、杖を振り上げました。

「レス？？つ！」

ところが、屋根はまだ修理中で、ウサギの足下も受け板が張つていなくて穴が開いてい

ました。気付かずに思い切り杖を振ったウサギは、そのままバランスを崩して穴に落ちそうになりました。

「わーっわわっ！」

手をぐるぐる回して、ウサギは何とか落ちないようにと踏ん張り

ます。しかし、何度も手を回した事で、魔法が何回もボツへ親方に当たってしまいました。
「あ？？？」

その14 レスワの壇（4）

ボツへ親方は、今やつていた仕事だけではなく、大工の技のほとんどを、いつぺんに忘れてしまいました。

「……あれ？ 僕は何でこんなとこにいるのかな？」

呟いて、ボツへさんは下を見ました。

「わーっ！ たつ、高いっ！ たつ、助けてくれーっ！」

「お、親方っ？」

上で急に喚き出したボツへ親方に、トッドさんは驚いて材木を投げ出して上がつて行きました。

「どうしたんですつ、親方っ？」

「たつ、助けて下さいつ！ 僕はこんな高い所、まだ恐いですつ！」

完全に様子のおかしいボツへ親方を、トッドさんは困惑しながらゆづくり下へと下ろしてあげました。

「一体、何があつたんですか？」

尋ねても、ボツへ親方は真つ青な顔を「わかりません」と振るばかりです。

「僕はまだ見習いなんです。なのに、あんな高い所で仕事なんて……」

「えつ……？ 何を言つてるんですか親方」

「親方？ 僕がですか？」

そこで漸く、トッドさんはボツへ親方が修行時代から後の事をすっかり忘れているのに気が付きました。

「思い出してくださいっ！ ボツへ親方は、パッセルベルで一番の大工の棟梁なんですよ

？」

「そんな事言われても……」

「親方～～つ！」

全く思い出す氣配の無いボツへ親方に、トッドさんは半分泣き顔になりました。

屋根から落つこちそつになり危ない所で踏み止まつたウサギは、トッドさんの慌てぶり

を横目で笑いながら、屋根からまたぴょーん、と飛び下りました。

「さて、次は何処へ行こうかな？」

トネリコの幹の方へと走りかけ、ウサギはふと立ち止まりました。

くくんくん、と上方から匂つて来る、いいにおいを嗅きました。

「おや、誰かがお昼の支度をしている。キャベツのシチューだ。いいにおい」

よし、これを失敬してやれり、と、ウサギは上の枝へと駆け出しました。

お昼にキャベツのシチューを作つていたのは、ネービルさんでした。

今日は大きな市場が立つたので、奥様達がまた買い物を持つてネービルさんの家へ集まつていました。

買い物をしてくれたお礼にと、ネービルさんは得意のキャベツのシチューを、みんなに振る舞うために作つていたのです。

ママおばさんが、足の悪いネービルさんを手伝つて台所に立てていました。

と、誰かが戸口を叩きました。

「どなた?」ネービルさんの問いに、答えたのは長老でした。

「わしづよ。入つてもいいかの?」

「まあ長老。どうぞどうぞ」「さあ

「マー・マおばさん」が戸を開けると、長老が嬉しそうな顔で入つて来ました。

「市場からの帰つじやつたのだが、四十日の側まで来たらあんまりにいい匂いがするもん

でな。ちと寄つてみたくなつたんじや

「まあ。長老もキャベツのシチューがお好きですか?」

「うむ。好物でな」

更に顔を嬉しそうに崩した長老に、ネーベルさんもマー・マおばさんも笑いました。

と、その時。

台所の窓の外で何か音がしました。何でしょ、と、マー・マおばさんが窓を開けました。

その途端、レスワウサギが窓に飛びつきました。

「レスワウ！」

ひゅん、とウサギが杖を振ります。杖の先から飛び出した細い真っ赤な光がマー・マおばさんに当たる寸前。

「ディオモウ！」

長老が魔法を唱えました。金色の大きな光が、赤い光を飲み込み、更に先へと走つて行きます。

「うわあああー！」

金色の光は、もろにウサギに当たつたり、ウサギは窓から転がり落ちました。

それを見た長老は、いつもの屈眠りばかりしている姿からは考えられない素早さで、家の外へと飛び出しました。

「待てつー！」窓から雪の上に転がり落ちたウサギが、逃げようと枝の端まで走つて行くの

を追い掛けた長老は、もう一度魔法を唱えました。

「ロープっ！」

今度は長老の手の先から、金色のロープがしゅるり、と現れました。
真直ぐに自分に向かって来るロープを、ウサギは慌てて避けました。

「ひょいっ！」

しかし、身体を一回転した拍子によろけて、側の雪の塊の中へ突つ込んでしまいました。

ウサギの入った雪の塊を、長老の魔法のロープが叩きました。と、塊はつるつると滑つ

て、四丁目の枝から真直ぐ下へと落ちてしまいました。

「あ～れ～っ！」

雪の塊は空中で解け、ウサギは真っ逆さまにマーフの泉へと落ちて行きました。

その同じ頃。

ハナハナとニーニャ、ヒマの二人は、南の大枝の枝元にいました。はぐれたモモとフレイをよじやく見付けたハナハナ達は、モモから何があつたか聞いて、

すぐにお婆さんに謝りました。

そして、ハナハナと友達一人は、お婆さんを手伝つてウサギ探しを始めました。

しかし、市場の中をくまなく探しても、ウサギは見つかりませんでした。三人はくたび

れて、枝元で一度休憩していました。

「どうしよう、何処にもいないね」

「困ったねえ……」

「一二ニヤもエマモ、困った顔で溜め息をつきました。

「ごめんね、モモ達の失敗なのに、付き合わせて……」

ハナハナは、しょんぼりと友達に謝りました。

「ううん、いこよ。……でも、ほんとにそのウサギ、何処に行つち

やつたのかなあ

「ねえ、一度家に帰らない？ もしかしたら、ウサギは上の方へ行つちゃつてるかもよ。

家に帰つて、おかあさん達に話した方がいいよ」

「そうだね……」

エマの提案に、ハナハナは頷きました。

記憶を無くしたフレイと、泣きじゅくつてしまつたモモはニヤニヤ家へ連れて帰つてします。

「誰か大人に……、長老さまに相談した方がいいかもね」

「長老に相談つ？ 冗談じやないよつ！」

不意に大きな声で怒られて、ハナハナ達は驚いて振り向きました。壺の持ち主のお婆さんが、恐ろしい形相でこちらに近付いて来ました。

「大体、あんたの甥つこが悪さをえしなけりや、こんな大事にならなかつたんだつ！ そ

れを忘れて、長老に相談だなんてつ！」

「だ……、だつて、このままじや搜せません。他にも誰かに手伝つてもらわないと……」

おずおずとハナハナが言つと、お婆さんはふん、と鼻を鳴らしました。

「面倒臭くなつたんだろつ。全く、近づくの小娘共はつ。すぐには誰かに責任を押し付けようとしてつ！」

「そつ、そんなんじやありませんつ。私達は……」

「だつたらとつとお探しよつ！」

お婆さんはつんけんと言つと、三人をじろりと睨み回しました。

「……ウサギは、多分上の枝の方へ行つちゃつたんだわ」

エマが、睨み返して言いました。

「何だつて？」お婆さんが、ぎょっとした顔をしました。

「上の枝だつて？……それはまずい。わたしや、これ以上上には登れないんだ……。あ

あ、どうしよう？」

「あの」

「一ニヤが聞きました。

「どうして、上に行かれんですか？」

お婆さんは、きつ、と目を釣り上げました。

「そり、そんな事つ、あんた達に言う事じやないよつ！……あでも、あいつが上に逃げちまつたかもしれないなんて……」

「何を、そんなところで集まつているんだい？」

突然後ろから声がして、お婆さんは驚いて振り向きました。

ゆるゆると身体を左右にくねらせて近付いてくる薬師の蛇の妖魔のお婆さんに、ハナハ

ナは、につこりと笑いました。

「こんにちは。モルガナさんもお買い物ですか？」

「ああ、眠り薬に入れる光草と心臓の薬の材料を買ひにね。？？おや、そこにいるのは、

誰かと思えば……」

モルガナ婆さんは、顔を伏せて「こ」と自分で離れよつとしていた壺の持ち主のお

婆さんの顔を、回り込んで覗きました。

「やつぱり。パメラじゃあないかえ」

「あ……、ひ、久し振りだね、モルガナ」

「あんた、こんなところで何してるんだい？……さてはまた鬼からぬ事をしてかそつとしているんじやなかつね？」

「え？」

その14 レスワの壷(6)

モルガナ婆さんの言葉に、ハナハナ達は壷を丸くしました。

「良からぬ事つて？」

「この人はね、ガマガエルの妖魔であたしとおんなじ特別な星を持つてるんだ。『身が正しければ穢れが落ちる』つていうね。けれど、妖魔の性なのかねえ、ショッちゅうこそ」

そ悪さをするんで、ちつとも星が生きない。『うだら？』

え？、と、モルガナ婆さんに睨まれて、ガマガエルのパメラ婆さんはおどおどと壷を逸らしました。

「公爵にも言われただろ？　あんたは重要な星を持つてるんだから、きつと精進潔斎しな

いとダメだつて。それを……。今日も、この子達をこんなところに呼び止めて、どうせろ

くでもない事をそそのかそそうとしたんだらうが」

「それは違いますっ」ハナハナは思わず声を上げてしまいました。

「私の甥のフレイが、お婆ちゃん、パメラさんの壷を開けてしまって、その蓋を落として

壊しちやつたんです。そうしたら、壺の中からウサギが飛び出して、逃げてしまつて」

「ウサギ？」モルガナ婆さんが、細い眉をぴくりと上げました。

「もしかして、あんた、レスワウサギをまだ持つて歩いてるのかい

？」

「あ、えー……、えーと……」

「レスワウサギって？」ママの問いに、モルガナ婆さんは呆れたと、いう顔で答えてくれました。

「ろくでもない小妖魔だよ。物忘れ魔法のレスワしか使えないんだ
けどね、あっちこっち

駆け回って、人に魔法で悪戯を仕掛け。物を盗んだり、酷い時には家も忘れてしまった

人を全然知らない土地へ連れて行つて置き去りにしたり。 . . .

全く、あんなものをまだ

後生大事に抱えてたのかい？」

「い、いえね……」

「でも、妖魔なら、トネリコの木には登れないんじや……」
ハナハナの言葉に、モルガナ婆さんは首を振りました。

「いや。妖魔と言つても、レスワウサギみたいな小妖魔は軽いのさ。
頭の中身も無いから、

大した悪事はしないんですね」

「そなんだ」

「それでも、悪意が無いからって人を困らせていい訳じやないよ。
とにかく、逃げたん

ならとつとと見付けて捕まえて、処分してしまわないと？？」

モルガナ婆さんの言葉が終わらないうちに、泉の方から何かが落ちた大きな音がしました。

た。

「何だい、今度は？」

ハナハナ達は、急いで泉へと行きました。

市場に居た人達も、一斉に泉へと行きました。

と、泉の真ん中に、マーフに抱えられたレスワウサギがいました。

ウサギは、落ちた時のショックでか、ぐつたりとしています。

「あつ、あのウサギつ！」エマが指差して叫ぶと、モルガナ婆さん

大声で言いました。

「マーフつ、そいつはレスワウサギだ。そのまま沈めてしまつておくれつ！」

「まつ、待つておくれつ！」

パメラ婆さんが必死に叫びました。

「そいつはあたしのだつ！ 頼むから返しておくれつ！」

「何をお言ひだいつ！」 モルガナ婆さんが目を剥きました。

「あんならくでもない悪戯小妖魔つ。あんたは何時まであんなものを後生大事にしている

氣だえつ？ いい加減におしつ！

パメラ婆さんは、きつ、とモルガナ婆さんを見返しました。

「たつ、確かにあんたの言つ通り、レスワウサギなんじろくなもんじやないさ。けどね

つ、あんなものでも役に立つ時も、あつ……、あるんだよつ。

世の中の連中は、みんなあんたみたいに強く無いのや。どうしても過去を忘れたいつて

奴だつて居る。そういう奴には、あのウサギでも、必要なんだよ……」

モルガナ婆さんは、しばし、パメラ婆さんのイボだらけの顔を見詰めました。

マーフが、泉から静かに声を掛けました。

「モルガナさん、助けてあげましょつ。小妖魔でも、生きているのですから」

モルガナ婆さんは、ふつ、と溜め息をつきました。

「しようがないね。けどパメラ、あんたあこつを持つて歩くんなら、二度とここに来ちゃ

なんないよ。いいね？」

「……分かつてるよ」

マーフが、ウサギをほとりまで運んで来ました。パメラ婆さんは氣絶しているウサギを

そつと壺に戻すと、小ちく呪文を唱えました。

「??封印せよ」

すると、割れたはずの壺の蓋が、何処からともなく現れて、ぽん

つ、と壺の上に被さり

ました。

パメラ婆さんはウサギを元に戻し終えると、見物人が黙つて見送る中を、自分の店へと戻つて行きました。

「さて、あたしも家へ帰るとするかね」

買い物籠を抱え直すと、モルガナ婆さんがよつこいしょ、と蛇体を動かしました。

その14 レスワの壙（7）

その時。

「モルガナ婆さんいるかい？」

木ねずみの妖精ワトンさんが、息せき切つて駆けてきました。

「長老が……、お呼びなんだ……。ボツヘ親方が大変なんだつ！」

モルガナ婆さんは、急いで長老の家へと行きました。ハナハナ達も、何事かと一緒に付

いて行きました。

長老の家には、村の人が大勢来ていました。

「はい、ちょっとごめんなさい」

モルガナ婆さんは、人を搔き分けて中へと入りました。

一階の会議室には、長老とボツヘ親方、そして娘婿のトッドさん、ママおばさん、ワ

トソンさん、ミヤミが来ていました。

「おお、すまんのモルガナ。ボツヘさんが、レスワの魔法で記憶が無くなつてしまつての」

「ウサギでしょ？ サツキ泉で捕まえましたよ

「うむ。わしが、上から落としたんじや」

「そうだったんですねか」

モルガナ婆さんは、ボツヘ親方の側へ寄り、顔を覗き込みました。ボツヘ親方は極まり悪そうに、下を向きました。

「……なる程ねえ。けど、レスワウサギの魔法なら、一時間程で効果は切れるんじやありますか？」

「それがじゃ」

長老はふう、と息を吐きました。

「レスワといふ魔法は、強烈によつて忘れる内容の時間の長さが決まる。ウサギの魔法は、大体杖ひと振りで十五分程度、効果が切れるのに三十分から一時間もあれば十分じや。しかし、このボックさんの場合、少し忘れが酷いんじや」

「忘れが酷い?」聞き返したモルガナ婆さんは、長老は「うむ」と頷きました。

「トックの話を聞いたといひ、どうもウサギが何かに荒れて、続ければまた何度もボックさんに魔法を掛けたようなんじや。お陰で、ボックさんは自分が大工の見習いになつた時か

ら現在までの記憶を、全部忘れてしまつたよひよせ

「それは、中々……」

「うむ。じこまで酷いと、記憶が戻るのに半年……、いや、下手をすれば一年は掛かるか

も知れん」

「ええ? そんなに掛かるんですか?」

トックさんが慌てました。

「そんなん、一年も親方に仕事を休めたら……。俺一人じや、仕事をこなせませんつ!」

「どうにかなりませんか? 長老さま」

半泣きのトックさんを可哀想に思つたマーマおばさんが、言つました。

した。

「どうにかして上げたいのはやまやまなんじやが……。じこまでじやと、わしの魔法でも、

どうにもならん。そこで、モルガナに相談したんじやが……」

「そうさねえ……。物忘れに一番効くのは、青龍平原にしか咲かない黒竜胆の根なんだけれど……。あればレスワの魔法でさえ打ち消すからね。でも、今は持つてないね」

青龍平原は、パツセルベルのある緑龍渓谷より遙か東の土地です。

とても、すぐに行つ

て帰つて来れる場所ではありません。

「それに、今は時期じゃ ないしね。行つたとしても、黒竜胆は見つからぬいさね」

「じゃあ、どうすれば……」トッドさんの困りきつた表情に、長老とモルガナ婆さんは顔を見合わせました。

「……伯爵でも、居てくださればのお……」「連絡してみたらどうです?」

「あの、長老?」ボツヘ親方の様子を心配して集まつていた周囲の人々の後ろから、ふいに声がして、みんなはびっくりして振り返りました。

そこには、泉から上がつて来たマーフが立つていました。

「ハナハナに協力して貰えれば、私が物忘れの解除薬を作れると思いますが……」

「えつ、私?」

みんなに混じつて様子を見ていたハナハナは、突然名前を言われて、びっくりしました。

マーフは、ハナハナの側に来ると、にっこり笑いました。

「泉の一番深い所から湧く水にハナハナの氣を込めれば、多分作れると思います」

「そうかつ。光の子じゃ」

長老は立ち上がると、一人に言いました。

「マーフ、すぐに始めてくれ。ハナハナ、ちょっと大変じゃが、マーフに協力してやつてくれるかの?」

その14 レスワの壷(8)

ハナハナは、いいのかな、と、ちらりとミヤミを見ました。ミヤミはそっと頷きました。

「……はいっ、分かりました」

ハナハナはマーフと一緒に、すぐに泉へと降りて行きました。長老達も村の人々も、ハナハナ達の後に続きました。

泉に来ると、マーフはすつ、と水に戻りました。少し待っていると、マーフが掌程の大

きさの巻貝を持って上がって来ました。

「この中に、湧き水が入っています。ハナハナ、貝の蓋を開けて……」

マーフが持つ貝殻の蓋を、ハナハナはそっと摘んで開けました。中を覗くと、透明な水が一杯、入っていました。

「まず、目を閉じて病気が治りますようにって、お祈りして」

ハナハナは、言われた通り目を閉じると、ボツヘ親方の物忘れの病気が治りますように、

と小さな声で祈りました。

「もつと一生懸命に……。そう、そんな風に……」

ハナハナは三回程、声に出して祈りました。一所懸命、ボツヘ親方の回復を考えました。

と、ハナハナの手から、白い光が出て来ました。

「ハナハナ、目を開けて」

マーフに言われて、ハナハナは目を開けました。

「わ……？」自分の手から光が出ているのに驚いて、ハナハナは目を丸くしました。

「わっ、私……？」

びっくり顔でマーフを見ると、マーフは薄く笑つて頷きました。
「いいから、気にしないで。指を、貝の中に入れて『ごりん』
どうしたんだろうと思ひながら、ハナハナはマーフの言ひ通り、
水に指を入れました。

途端。水の中がぱあっと明るく輝きました。透明だつた水は虹色
に変わり、僅かに表面
が波打ちました。

「あ……」

「もう、いいよ

何が起きたのか分からぬまま、ハナハナは、指を抜きました。
マーフはハナハナの手

から貝の蓋を受け取ると、虹色の水に蓋をしました。

そして、ゆっくりと呪文を唱えました。

「光の子の力を分け『えられし水よ、全ての者の病を癒せ??』
マーフの手から青い光が現れ、貝殻を包みました。光はすぐに、
貝の中へと吸収されま
した。

「長老」マーフは、側で一人を見守つていた長老に言いました。

「出来ました」

「おお、そうか

長老は貝殻をマーフから受け取ると、マーフおばさんが持つて來
たコップに少しだけ、
中の水を入れました。

「さ、ボツへさん、これを飲むんじや」

修行時代に戻つてしまつたボツへ親方は、長老からコップを受け
取ると、恐る恐る口に
運びました。

一口、一口と水を飲んで、数分。

「お……、お?」

「おっ、親方っ？」

呼び掛けたトッドさんを、ボツへ親方はゆっくり見ました。

「ああトッド。 ?? わしばぢして、ここに歸るんだ？ ワトソンさん家の屋根の修理をしていた筈なのに……？」

「わーっ！ 親方の記憶が戻ったあつ！」

トッドさんは大喜びで両手を挙げました。村のみんなも、声を上げて喜びました。

「よかつたあつ！」

「やつたねえ、ハナハナっ、マーフっ！」

「水の妖精がいてくれて、本当によかつたねつ」

ハナハナは、誉められてけよつと嬉しくなりました。マーフを振り向くと、マーフも嬉しいのでしょう、照れたように笑いました。

ボツへ親方を送つて村のみんなが上へ引き上げた後。ハナハナは泉に残つていた長老とミヤミヤ、思い切つて聞きました。

「あの、長老……。光の子つて、何なんですか？」

長老は驚いたように、長い眉毛の下の目を見開きました。

「前から時々そう言われるし……。前にも、今日みたいに協力してつて言われたし。人間

の男の子が亡くなつた時にも、長老は詳しく教えて下さらなかつたけれど、私には、特殊な力があるんですか？」

「ハナハナ、それはね……」

宥めようとしたミヤミヤを、長老が手を上げて止めました。

「いや。 そうだの。 もう、ハナハナに隠しておくことは、無理かもしけんの」

長老はまぶつひ、と溜め息をつきました。

「マーフ」

呼ばれて、マーフは「はー」と返事をして、泉から上がりつてきました。

「今夜、ハナハナに全部を話そつと語つ。悪いが夜、わしの家まで来て貰えるかの?」

「はい、わかりました」

「ハナハナ」ハナハナは、長老を見上げました。

「今夜、ティーヴとミヤミと一緒に、わしの家へ来なさい。光の子の事を話してあげよ」

ハナハナはこつくりと頷きました。

しかし、嬉しいといつ氣持ちは湧きませんでした。何か、空恐ろしい事が、これから起ころうな氣分になりました。

「ではな」と言つて、長老が歩き出しました。その背中を見ながら、ハナハナはきゅつ、と拳を握りしめました。

その14 レスワの壺（∞）（後書き）

その14 レスワの壺は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は、いよいよ最終話『光の子』です。

ハナハナの特別な星『光の子』とは、いつたいどんな星なのか？

本当に、再び魔王との戦いが始まるのか？

ハナハナは、どんな役割があるのか？

お楽しみに！

その15 光の子（1）（前書き）

最終話『光の子』です。

ハナハナの特別な星である、光の子。

一体、どんな意味があり、使命があるのでしょうか？

また、そのために、ハナハナはどんな決断をするのでしょうか？

その15 光の子(1)

その日も、ハナハナはいつものように朝ご飯を食べるとすぐ「マーフの泉へ出掛け水を汲み、ミイミと洗濯を始めました。

籠一杯の洗濯物を持って庭に出ると、トネリコの枝の下、朝の光を浴びて、解け掛けの雪がきらきら輝いていました。

ここにこのところ、冬の王も疲れたのか、あまり雪が降りません。雪の精靈達も雲の上の古城から、全然降りて来ていません。

そろそろ春の女神が動き出したからだと、大人達は顔を綻ばせています。

春になれば、谷底の荒れ地にもたくさんの花が咲き、薬草も一杯芽を出します。

鹿やウサギも赤ちゃんが生まれ、ティーザの仕事も忙しくなります。

みんなが春を待っています。でも、ハナハナは春になるのが憂鬱でした。

春節祭が終わって年が明ければ、ハナハナは十一歳になります。それは、カールベルのリリア婆さんが、ハナハナが生まれた時に予言をした事が始まる歳です。

市場で大騒ぎがあつた日の夜、ハナハナは全てを長老から聞きました。

かつてあつた魔王との戦いの事、ミイミとハナハナの両親の事、ティーザの事、そして、ハナハナに送られた予言の事…?

ハナハナは、よつこいしょ、と籠を乾いている場所に置きました。

物干竿にしている枝の露を雑巾で拭き取り、洗濯物を掛けて行きます。

「今日はこっちの枝も使うわよ」

後の洗濯物を持って来たミイミの声がしました。

「天気、良くてよかつたわね」

「……うん」

「ハナハナ」ミイミは、雑巾を取りにハナハナの方へ寄つて来ました。

「まだ、気にしてるの？」

「……ううん」ハナハナは慌てて首を振りました。

「そんなこと、ないよ」

「まあ……、あんなことを聞いて気にしないよ」とて言われても、無理よね……」

ミイミはゆつくり妹の前へしゃがむと、優しく笑いました。

「考えなさい、ハナハナ。悩むのは決して悪いことじゃないわ。でも、思い詰めないでね。

どうしても分からなくなつたら、私でもいいしティーヴでもいい、もちろん長老さまだつ

て、みんなハナハナの相談に乗つてくれる。ね？」

「うん……」ハナハナは、力無く頷きました。

あの夜。

長老は自分の部屋の肘掛け椅子にゆつたりと腰掛け、話を始めました。

「『近い将来、再び魔王が戻つて来る』それが、リリア婆さんの予言の最初じゃった。

『この世界に戻つた魔王は、またかつてのよつて十三の軍団に命令を下し、世界の破壊を

始める。かつて我々は妖精と人間の中から十五人の英雄を選び戦い、

魔王を退けた。

しかし、今はその英雄達も、いない。彼等の剣は折れ、身体は天へ還つた。

彼等に代わる者を、この世界の者達は一度と持たない。唯一の望みは『光の子』。光の

子だけが、この世界を暗黒から救う力を持つ。』

そして長老は静かに、ハナハナの顔を見ました。

「リリア婆さんは、続けてこう言つた。『十五人の英雄のうち、ひと組の猫の妖精の夫婦

の間にその子は生まれる。トネリコの木の上に。ミーアとバスカルの子ハナハナは、光の

子の星を持つ』　？？わしは、その予言を聞いた時、正直仰天したのじや。そして嘆いた。

バスカルとミーアが、戦士として小さなハナハナとミーミを置いて戦いに赴かねばならん

のに、その赤ん坊のハナハナが、また世界の救済という重責を負わされるのか、と……。

ミーミは次々と辛い運命に肉親を取り込まれるのかと。

しかし、それも決められた事なら致し方無いのかもしれん。わし

らの出来る事は、ハナ

ハナが無事に育つよう、手助けする事じや。そう心に決めて、この十年ハナハナを見守つ

て來たのじや』

「長老さま……」ミーミが、うつすら浮かんだ涙を、そつとエプロンの裾で拭きました。

「ただの

長老が続けました。

「リリア婆さんの予言では、光の子は魔王と戦うとは言つておらんのじや。わしは、それ

がずっと気になつておつた。戦わんなら、どうやつて光の子は世界

を暗黒から救うのか、

との。

じゃが、ハナハナが育つのをずっと見て来て、また子供達が元気に暮らしておるのを見守つて来て、わしは思った。この、子供達の元氣こそが、世界を救うのではないかとの。

また、ハナハナはきっと、どうすれば自分の星を生かす事が出来るのか、きっと自分で答を見付けるじゃらうとの」

長老はにつこり笑うと、ハナハナに側へ来るよつ手招きしました。

ハナハナは神妙な顔で、長老の前へ立ちました。

「本当に、大きくなつたの。ミーアとパスカルが魔王の城への旅に出る時には、まだこんなに小さな赤ん坊じやつた。それが、もう立派な猫の妖精じや」

その15 光の子（2）

長老は、ハナハナの、まだ少しこそて手を取りました。

「ミイミ、よく頑張ったの。まだ十五じゅうたミイミが、両親から赤ん坊の妹を託されて

途方に暮れておったのが、つい昨日のよつじゅ。ティーヴも、よくミイミとハナハナを守

つてくれた。おまえさんが居たから、ミイミはハナハナを育てる事が出来たんじや」

「いや……。俺は何も。ミイミがしつかり者だから、ハナハナも病気ひとつせずに育つたんです」

「ティーヴ……」長老は、一人にうとうと、と頷きました。

「十五歳同士の夫婦が大変だったのは、わしがよう知つとる。ほんに、頑張った。じゃが

……」

長老は、ハナハナに手を戻すと、ゆつくりと言いました。

「もう、ハナハナの事は心配いらん。これからは、ハナハナは自分で、どう生きて行くのが、決めねばならんからの」

どう、生きて行くのか。

その長老の言葉は、ハナハナの小さな胸にずつしりと重い課題を置きました。

十一歳は独立するには早過ぎる歳です。しかし、『光の子』という稀な星を持つて生まれたハナハナには、時間はもうありません。

いつまでも、姉夫婦に庇われる小さな子供では、いけないので。

「……」

あの夜の事を思い出したハナハナの手から、モモの小さなエプロ

ンが落ちました。

それを、//マイ//ミがそつと拾いました。

「ハナハナ」//マイ//ミ呼ばれ、ハナハナはまつと我に遭りました。

「やつぱつもう一度、長老をまと話してりつしゃー」

「お姉さん……」

「これから、どうするのか、ハナハナはどうしたいのか、ね。今分からなくても、お話を聞いてこらうかに、何かいい案が浮かぶかもしれないわ」

「……うん」

もうしよう、とハナハナは思いました。

「こいでぐるぐると悩んでいても仕方ない、とにかく動いてみなくつちや。

「分かった。洗濯物ちゃんと干したら、長老をまと話してりつしゃー行つて来る」

頷くハナハナに、//マイ//ミは微笑んで頷き返しました。

洗濯の手伝いが終わった後、ハナハナは//マイ//ミ言つた通り、長老にもう一度話を聞くために出掛けました。

けれど、一体どんな事を話せばよいのどうしょー? 考えながらとぼとぼと歩いていると、後ろから声を掛けられました。

「ハーナハナつ!」振り返ると、子ねずみ三兄弟のリック、ニック、マック、それにニー・ヤとエマが上つて来ました。

「どこに行くの?」

寒がりのニー・ヤは、橙色の毛糸のオーバーをきつちり着て、手袋をしています。

リック、ニック、マックは、緑、水色、黄色の色違いのお揃いの厚手の綿の耳つきキャップを被っていました。

おしゃれなエマは、自分の灰色の毛並みによく合つ青い綿のショールを羽織っています。

ハナハナは、みんなの着ている服の色が、何故かとっても新鮮なものに見えました。

不思議な顔で見詰めているハナハナに、エマは「どうしたの？」の小首を傾げました。

「あ……、ううん、何でもないの。これから長老さまのお家へ行くの。ちょっと、お話があつて……」「……」

「あ、いいなつ。長老さまのお話つて、また新しいおとぎ話?」

「えーつ、だつたら私達も聞きたいつ

二二ニヤが大きな声で言いました。リック達も「僕もつ」と口々に言います。

「ハナハナにだけつて、どうして?」エマが、口を尖らせました。「この間も長老さまは、ハナハナにだけいらっしゃつて、言つてらしたわよね?」

「あ、ウサギが暴れた日でしょ? あの後、ハナハナ、ミィミーおばさんとティーヴおじさんと一緒に長老さまのお家へ行つたのよね?」

「あれ、何のお話だつたの?」

ニックに聞かれ、ハナハナは暫し戸惑いました。

大人から、『光の子』の話をみんなにするなどは言われていません。ですが、みんなに

話すのは、何だか自分だけ特別だと言つてゐるようだと思われそうで、勇気が要りました。

その15 光の子（3）

でも、もうすぐハナハナは決断しなくてはなりません。

『光の子』として、何をするべきか。

もしかしたら、それでパッセルベルを出なくてはならないかも知
れないので。

ハナハナは、気持ちを決めました。

「あのね……、この間長老さまのお家に行つたのは、私の星のお話を聞くためだつたの

「星つて、ハナハナはやっぱり星を持つてたんだ？」

リックが目を輝かせて聞きました。

「それつてやっぱり『光の子』？」

「……うん」

「『光の子』って、一体何なの？」

何につけても自分が一番でないと本当は気が済まないエマが、目を釣り上げて子ねずみ

達を見ました。

「ずっと、大人の人達が、あのトーベルさんまで『光の子』ってハナハナの事を警めてた

けど、そもそもそれは何よ？」

「エマつ」きつい言い方を、一一ニヤが嗜めます。

「ハナハナの話を聞こう？」

ね、続けて、と一一ニヤに言われ、ハナハナは固い表情で頷きました。

「私の星、ね、みんなの言つ通り『光の子』だったの。でも、そんないいのじゃない。反

対に、恐いの。長老さまが昔、私が生まれた時に、カールベルのリリアさんっていう長老

さまで、特に特別な星があるつていうお告げがあつたって、お聞

きになつたの。それは、

十一年後、再び魔王がこの世界にやつて来て、世界を暗黒にしてしまつ。暗黒なにつた世界を救う事が出来るのは、『光の子』だけだつて……

ハナハナが話し終えた後、みんなはしばらく呆然としていました。やがて、ニックが小さな声で「すっげえ」と言いました。

「ハナハナ、英雄の星を持つてるんだ」

「ううん、違うの。英雄じゃないよ」

「でも世界を救えるんでしょう?」リックにも言われて、ハナハナはもう一度首を横に振りました。

「私になんか、救えないよ。そんな方法、分からぬるもの」

「そうよね。ハナハナに分かる訳無いわよ」

エマが、つん、と横を向きました。あからさまに「ビックして自分じゃないの?」といつ

態度のエマに、一一ニヤは「もつづ」と溜め息をつきました。

「大体、ハナハナは、ただいい子なだけもの。そんな子が英雄なんて、おかしいわよ」

「いい子だからいいんじゃない。エマみたいに我がままな子が英雄だつたら、それこそ世界は暗黒のままよ」

「なあによそれつ」

「止めなよつ、エマも一一ニヤも」

「……うん、でもエマの言う通りなんだよね」

ハナハナは、ぽつり、と言いました。

「私、ただお姉さんの言い付けを守つて来ただけだもの。いい子つて言われるどどうかな

あつて思うけど、エマみたいに自分の言いたい事ちゃんと言える方じゃないし、一一ニヤ

みたいに頭良くないし。リックみたいに器用でもないし……。

なのに、どうして私が『光の子』なのかなあ。長老さまがおつしやるんだから、リリア

さまでの予言は正しいんだろうけど、だつたらどうして、私にそんな予言があつたんだろう

つて、ずっと考えてたの

「ハナハナ……」一一一ヤが、気の毒そうな顔でハナハナの側に来ました。

「気にする事、ないよ」

「そうなんだけど……。ほんと、エマが『光の子』だつたらよかつたのに」

ハナハナの言葉に、子ねずみ達が一斉に「止めてよ」という声でエマを見ました。

エマはみんなの嫌そうな顔を見て、わざと胸を反らして言いました。

「そーよお、私が『光の子』だつたら、ハナハナみたいにぐちぐち悩んだりしないわつ。

英雄なんだもの、やりたい事みーんなやつちやう。好きなお洋服着たり、好きなお花を勝手に咲かせたりしちやう。トネリコの花だつて、見たい時に咲かせちゃうわつ。人間の街にだつて、行つちやう

「だから英雄にはなれないんじゃないのかなあ」

呴いたリックに、エマは「なんか言つた?」と凄みました。

「ねえでも、ハナハナは何で悩んでるの? 世界を救う方法が分からないから?」

エマの大きな目で覗き込まれて、ハナハナは一瞬びっくりしました。

「そなんだけど……」

「だつてそんなの、魔王をやつつけちゃえばいいんじゃないの?」

「長老やおは……。リコアやおの『光のナ』の予言によれば、魔王と戦

うといひ言葉は一言も

無かつたつておっしゃるの。だから……」

「ええつ？ 戦わないで、どうして世界を救つの？」

今度はリック達が田を丸くしました。

その15 光の子(4)

「そうよねえ、なら『ひやつ』って暗黒の世界を救うんだね?」

「——『ひやつ』も首を傾げます。

「だから、英雄じゃないんだって」

「そうだね、それは英雄じゃないよね」

「それで、ハナハナは悩んでた、と?」

エマに言われて、ハナハナは頷きました。

「確かに、それは悩むよねえ」

「戦わないで魔王から暗黒の世界を救うのって、『ひやつ』やるんだろ? 腕を組むリックに、マックが言いました。

「ねえ兄ちゃん、暗黒って、真つ黒って事?」

「ん? ああ、そうだね」

「じゃあ、真つ黒じゃなきゃいいんでしょ? 黒い所に色々な色を入れちゃうとか」

「赤とか黄色とか橙色とか?」

「ピンクとか真つ白とか」

「それで暗黒が救えると思つてるの? ばつかじやない?」

エマが突つ込みを入れて、兄弟はしゅんとなりました。しかし、

ハナハナはこれは大変

なヒントだと思いました。

「そつか……、真つ黒じゃなくすればいいのか」

「なあに、ハナハナまで?」

「ううん、そりじゃなくって。色って、前に若先生がおっしゃつてたけど、光が当たるから

ら初めて色だつて分かるんだって。暗黒って事は、色が無くなる。

真つ黒になるのは光が

無くなるから。で、私の星は『光の子』」

「そつか! 真つ黒に光を当てて色を取り戻すのが『光の子』なん

だつ！」

リック、ニック、マックが同時にぽんつ、と手を叩きました。二
一一ヤもなる程と頷きました。

エマは、「ほんとにそんな事なの？」と、眉を顰めました。
「分からぬ。でも、魔王と戦わないで暗黒の世界を救うつて言つ
んなら、それに近いん
じゃないのかな……」

呆れたという顔で、エマはハナハナを見ました。

「ほんと、どうしてハナハナに『光の子』なんて星があるんだろ」「
とにかく、これから長老をまとお話して来る
「うん、それがいいよ。長老さまなら、きっといい答えをこ存じだ
よ」

リックの言葉に、ハナハナは「うん」と頷きました。

「じゃあ、行つて来るね」

ハナハナは、みんなと別れて長老の家へと急ぎました。

急に訪ねたのですが、長老はここしながらハナハナを家へ招
き入れてくれました。

「まだ外は寒いじやうつ、さ、暖炉の側へお行き」
集会所を誰かが使つていなければ、長老はいつも一人で家にいま
す。

「今、ココアを煎れてあげようの」

「あ、私手伝います」

ココアはリック達兄弟のお父さんが働いているベラスの方から持
つて来る、とつても貴
重な飲み物です。

ココアを買うお金は、ティーヴが狩りの獲物を売つて得たお金で
す。その時々で買える

だけ買い、村のみんなで少しづつ分け合っています。

動物性のものを飲んだり食べたり出来ない妖精は、牛乳の代わりに、サペとう豆の汁

からできる豆乳を飲みます。『ココアも、たっぷりの湧かした豆乳に、粉をスプーン一杯入

れ、お砂糖を加えてかき混ぜます。

『ココアのいい匂いが、ほんのりと長老の家の居間に漂い、ハナハナはちょっとだけほつ

とした気持ちになりました。

掛けなさい、と椅子を勧められて、ハナハナは暖炉の脇の背無しの椅子に腰掛けました。

「さて。今日ハナハナが何で来たのかは分かつてあるよ。『光の子』の事じやろ?」

「はい。……あの『ハナハナはちょっとココアを啜ると、思にきつて言いました。

「私、やっぱり分からなくて。『光の子』って、一体何をどうするんだろ?うつて。でも、

さつきここに来る途中で、友達に会つたんですね。一一一ややリック達やエーマと話をしています。

たら、みんなが色々な事を言つてくれて……。マックが、世界を暗黒から救うのには、真

つ黒になつたところに光を当てて、色を取り戻せばいいんじゃないかつて……」

「ほお……?」

長老は面白そうに微笑みました。

「色を取り戻す、の」

「はい。『光の子』は光なんだから、色々な色を照らし出すために居るんじゃないかつて

言つてから、ハナハナは、はつとしました。

その15 光の子(5)

さつき、道でみんなに出会った時。
みんなの着ている服の色が、とっても綺麗だと思った事。橙色や
黄色や青が、いつもよ
りとっても鮮やかに見えました。

それが、その色こそが、ハナハナ達の世界なのです。
「ハナハナ」長老が、ココアのカップを脇のテーブルに静かに置きました。

「その考えは、きっと当たつておる。世界は華やかな色で出来てお
る。その色が、魔王の
出現で真っ黒に塗りつぶされる。それをまた元の色とつどりの世界
に戻すのが、きっと

『光の子』の使命なのぢやない?

「……はい」

「しかしそれには、魔王が掛けた、いや、これから仕掛けるであろ
う様々な悪の魔法を撃
ち破らねばならん。それには、大変な努力と修行が必要じや。じや
が、ハナハナには幸い

な事に、その素質がちゃんとある

「私に、魔法の素質が?」

ハナハナはびっくりしました。魔法なんて、簡単なものを除くと、
これまでんまり使
つてきていません。

「そう、ハナハナはもういくつかの魔法を、使つておる。たとえば、
命の水じや。ボツヘ

親方やルウを助けたあの水は、ハナハナの魔法も入つておる

「でもあれは、マーフの力じや……?」

「大半はマーフの魔法じや。じやが、ハナハナの力で更に安定した

命の水になつたのじや。

その他にも、物忘れの解除薬を作つた事じや。あれはハナハナの力を、マーフが薬に変えた。やり方は違うが、命の水とほぼ同じじや。『光の子』には、じやから人々を癒す力があるんじや

「私……」

？？言われてみれば、そうかも。

ハナハナは誰かが怪我をしたり病気になつたりした時、マーフや長老に乞われて協力してきました。

思えば、モルガナ婆さんが薬を黙々と調合している姿に、少し憧れたりもしました。自分

分も、誰かの役に立つ仕事がしたいと、ずっと思つていました。人々を癒し、この世界を暗黒から救う。もしそれが『光の子』の本当の使命なら、自分は進んでやるう??

「長老さま」ハナハナは、しつかりした口調で言いました。
「私、もっと勉強がしたいです。世界の事もそうだし、薬の事とか、その……、魔王との戦いの事とか」

「ふむ」長老は、少し考えるように手を閉じました。
柱時計がボーン、と、11時を打ちました。

「……ダメ、ですか？」

ハナハナは、じつと手を閉じたままの長老に、恐る恐る聞きました。
「……いやいや、ダメではないよ。考えておつたのじや。ハナハナにとつて何処で誰にそれらを教わるのが一番いいのかと、の」

「長老さまや、若先生では、ダメなんですか？」

「ふむ……」長老は、白くて長い顎ひげを一、二回撫でました。
「ダメではないんじやが。もつといい先生があるかと思つての。お。
？？カールベルのリリ

ア婆さんの所には、色々な妖精が勉強に来ておるから。そこなら
どうかとも、思つての

「カールベル
……」

ハナハナは思わず呟きました。

カールベルは、青龍平原の東の果て、ルシトーワッドの広大な森
の中の街です。

「わしとリリア婆さんは、魔法の水晶球を使ってちょくちょく話を
しておる。トーベル伯

爵とも、緊急の時はその方法で連絡を取り合つておるのじや
どつこいしょ、と長老は立ち上がり、隣の部屋へと入つて行きました。

ややあつて、長老は両掌に丁度包める程の大きさの水晶を持って
来ました。

「これが、その水晶球じや

「すごい……」ハナハナは思わず目を見張りました。

「これに呪文を唱えると、相手の水晶球に自分が映る。相手が応え
れば、それで話が出来

るのじや。ハナハナが、もしカールベルで勉強したいと呟つのなら、
わしはこれでリリア

婆さんと話をして、ハナハナをあちらに受け入れてもうつようす
るがの」

「いつ、今ですか？」

急な展開に、ハナハナは目を丸くしました。

「どうしよう」とおろおろするハナハナに、長老が「いやいや」と
笑いました。

「今すぐではないよ。そんな急には決められんじやろ。第一、ミミ
ミとティーヴにちゃん

と話をせんといかんしの。ただ、パツセルベルよりカールベルの方が、リリア婆さんを始め、ハナハナが覚えたいと思う事を教えてくれる先生が、きっとたくさんおると、わしは思うがの」

その15 光の子(6)

長老の家から帰ったハナハナは、早速ミィミに長老に言われた事を話しました。

お昼の支度をしていたミィミは、手を止めて、妹の話を聞くために食卓へ腰掛けました。

ハナハナが話し終えると、ミィミは小さく頷きました。

「そう……。長老がそうおっしゃったの」

「うん。でも、カールベルつて遠いよね」

「そうね、パツセルベルからはかなり離れているわね。……不安?」

ハナハナ

「うーん……」

不安じゃないと言えば嘘になります。もしカールベル行きが決まれば、ハナハナはそれでミィミ達の所から独立する事になるのです。

予言の通り、これから魔王が舞い戻つて来るとすれば、もうそれきりミィミ達には会えなくなるとも考えられます。

「私……、どうしよう……」

「正直に言つとね」ミィミは静かに言いました。

「私、ハナハナが『光の子』なんて事、知らなければいいと思つたの。父さんと母さん

が、やはりリリアさまの予言の英雄だと分かつた時、真つ暗闇に突き落とされた気分だつ

た。だって、まだ十五歳だったのよ? 両親が死ぬかもしれないって分かつて、恐くない

子供なんていないわ。でも、その上に、リリアさまはハナハナにも過酷な予言を下された。

私は本当に途方に暮れて……。そんな私を、ティーヴや長老さまが

支えてくださったのよ。

でも、ハナハナが大きくなるにつれて、またあの時の恐怖が訪れるのかと思うと、気が気がじゃなくなつて来たの」

初めてそんな話をしてくれたミイミを、ハナハナはじつと真剣な顔で見詰めています。

「??ハナハナが『光の子』として色んな勉強をしたいつていうのは、分かるわ。それは

多分とっても大事な事でしょう。だから……。

だから、私は反対は出来ない。それは、自分の気持ちをハナハナに押し付ける事になる。何より、自分の我がままで世界を暗闇のままにしてしまつような事を、この世界の者ならしてはいけないもの……」

「……お姉さん」ハナハナは、切なくなつてミイミに抱き着きました。

「『めんなさい、辛い思いをさせて』

ミイミは、ぎゅっと妹を抱き締めました。

「『めんな、ハナハナのせいじゃないのに。私こそこんな話、ハナハナにしてはいけない

と思つてたのに……』

「ううん。してくれてありがとう。だつて、今聞いておかなかつたら、私、ずっとお姉ちゃんの気持ち知らないままだつたかも」

「ハナハナ……」

「ごめんなさい、私……、私、カールベルへ行きます

自分を思い遣つてくれる優しい姉がいるから。

ミイミとティーヴ、そしてモモとフレイ。大事な家族を守りたいから。

「私にしか、暗闇に光を当てられないなら、私がやらなきゃならな

い。誰も代わってくれ

ない、そうでしょう？ だったら、私はカールベルに行つて、リリアさまのところへたくさ

ん勉強します。そして、立派に『光の子』の使命を果たします。『ハナハナ……』ミィミは、切な氣な、それでいて嬉し氣な表情で小さな妹を見ました。

「本当に、それでいいの？」

「……うん」ハナハナは、力強く頷きました。

「恐いけど、やらなきゃ。やってみる」

その時、どうしてあんなに清々しく笑えたのか、後から振り返つてもハナハナには分からりませんでした。

ただ、その時にした大きな覚悟が、パッセルベルを、更に世界を、のちに本当に救う事になりました。

一週間後。 ハナハナは十一歳の誕生日を待たずにカールベルへ旅立ちました。

旅立ちの朝、ハナハナは最後の水汲みをするためにマーフの泉へ行きました。

バケツを持つて降りて行くと、泉のほとりでマーフが待つていました。

「今日、カールベルへ行つてしまふんですね、ハナハナ」
少し悲しそうな表情で、マーフは言いました。

「うん。色々ありがとう、マーフ」

「ハナハナは『光の子』。世界を暗黒から救うために、多くの事を学ばねばなりません。

それには、ここよりリリアさまの元へ行つた方がいいのは分かります。でも、残念です」

ハナハナは、じつとマーフの声を聞いていました。
マーフは、そつと手を水の中へ浸けました。

その15 光の子(7)

「私は、ハナハナに出会つて本来の自分を取り戻しました。水の高位妖精である自分の力

と使命を。だから、ハナハナには『光の子』としてもっと力を伸ばして欲しい。でも……」

「マーフ」自分がパツセルベルから出て行くのを悲しがってくれる人がここにも居る事に、

ハナハナは改めて感謝しました。

「ありがとう」

ハナハナは、そつとマーフの手を取ると、その手の甲にキスをしました。

すると

それまで魔王の暗黒の魔法に染まつたままだつたマーフの黒い肌が、みるみる本来の水の妖精の肌の色に変わりました。

「マーフっ？」

「これは……」

美しい虹色の光沢を放つ薄水色の肌の自分の手を見詰め、マーフは金色の目を驚きに見開きました。

「元に戻つた……」

「これが、本当のマーフなんだ」

よかつた、とハナハナは微笑みました。マーフは、泣き笑いのような顔でお礼を言いました。

「ありがとうハナハナ」

「ううん、私は何も……」

多分自分の力でしようが、何となく信じられなくてハナハナは大

きく首を横に振りました。

その手を握り、マーフは力強く言いました。

「いえ、これはハナハナの魔力です。出会った頃より、ハナハナは確実に魔力が成長しています。きっと将来は、魔王も凌ぐ魔法使いになります」

「そつ、そんな……」

「そうならなければなりません。ハナハナ、これだけは決して忘れないで下さい。何があ

つても、パッセルベルを忘れてはいけません。ここに住む人々を。

大事な家族を。それこ

そが、魔王と対峙した時に唯一己を保ち、希望を持ち続けられる手段です」

一度魔王に負け、その足下に踏みにじられた経験を持つマーフの言葉は、ハナハナの胸を打ちました。

「分かつた。絶対、何があつても忘れない」

大きく頷いたハナハナに、マーフは何度も頷き返しました。

水汲みを終え、ハナハナは家へ戻つて旅の支度をしました。

「それじゃ、行つて来ます」

「いつてらっしゃい」

ミイミは、台所でハナハナを抱き締めました。

モモは、大事にしていた指人形をハナハナにお守りだぞ言つてくれました。

同行するティーヴの後に続いて家を出て、ハナハナはトネリコの根元まで降りて行きました。

した。

根元では、ハナハナを見送る大勢の人々が待っていました。

一番前に長老がいました。その脇に、ニーニャが、涙を浮かべて立っていました。

「ハナハナつ」ニーニャは、ハナハナを見ると泣きながら抱き着いてきました。

「本当に行っちゃうんだね？」

「うん」ハナハナは、親友の背中を片手で撫みました。

「元気でね、ニーニャ」

「ハナハナ……」

「しつかり、勉強しておいで」

長老が言いました。

「わしらは、いつまでもここでハナハナの帰りを待つてあるよ」

「はい」

「いつてらつしゃい」ママおばさんが、わざと元気な声でいいました。

「身体に気をつけるのよ」

「ハナハナつ！」

おばさんの後ろにいた子ねずみ三兄弟が、たたたつ、と前へ出てきました。

「これつ」と目の前に手を出したのは、リックでした。

「なあに？」

「持つてつて。作ったんだ」

リックがぱつと手を開くと、掌に小さな木彫りの花が一輪、乗っていました。

「トネリコの花。ハナハナが、パッセルベルを思い出せるよつて……」

「ありがとう」ハナハナは微笑んで、その小さな一輪の花を手に取りました。

「絶対忘れないよ」

いつてらつしゃい、と三兄弟が涙声で言いました。

そして、大勢の人が、ハナハナにいつてらつしゃい、と言いました

た。

「——ニヤも、涙を拭いて「いつてらっしゃい」と言いました。

「待つてるからね」

「うん、絶対戻つて来るから、——ニヤも待つてて
うん、と——ニヤが頷いたのを見て、ハナハナは笑顔になりました。

た。

「行つて来ます」

元気な声でそう言つと、ハナハナは歩き出しました。

トネリコの根元を離れ、しばらくして、ハナハナは足を止めました。

そして、大きなトネリコの木??パツセルベルの村を、見上げました。

「どうした?」振り向いたティーヴに、ハナハナは言いました。

「私……、絶対守るから。パツセルベルも、世界も」

「ああ」と頷くティーヴと同調するかのように、トネリコの大きな枝が、雪風に微かに揺れました。

その15 光の子 完

??「パツセルベルの猫の妖精」完

その15 光のナ(7)（後書き）

「パツセルベルの猫の妖精」は、これで完結です。

ここまで読んでいただきて、ありがとうございました。

1話田から、最終話まで、時間がかかってしまいましたが、なんとかこじつけました。

お気に入りにも、35件も登録していただけました。ありがとうございました。

地味なお話でしたので、気に入つて下さる方は僅かかなあと思つていたので、望外の喜びです。

また、次の作品もファンタジーで頑張りたいと思いますので、よろしければ、ご感想なり、お寄せ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2318d/>

パッセルベルの猫の妖精

2011年7月12日07時03分発行